共通語を求めて

樋口克己

壱葉舎

黙示録（Contents）

まえがき……3
序品第一　一般的事項
　1－1　NHK のおふざけ英語……5
　1－2　日本語の発音と文法……22
方便品第二　英語の音と語
　2－1　文字と音……30
　2－2　単語の語勢……34
　2－3　異音語と多義語……38
　2－4　同音語，同形語、派生語……44
　2－5　反義語、類義語、類似語……47
比喩品第三　品詞
　3－1　総論……56
　3－2　名詞・代名詞・形容詞……60
　3－3　副詞・動詞……73
　3－4　接続詞・前置詞……94
　3－5　間投詞……102
信解品第四（しんげほん）　語彙
　4－1　慣用句・熟語・成句……108
　4－2　生活用語……124
　4－3　修辞法……143
薬草喩品第五　共通語への道
　5－1　世界の言語……155
　5－2　名称も美しく……170
あとがき、索引、奥付……197,203,205

まえがき

私は若い頃に、北アフリカのアラブ諸国のひとつで、天然ガス処理工場の建設に従事していた。勤めていた会社は日本の企業であり、職種はフランス語の通訳翻訳だった。そしてその時の経験から書き上げたのが、この本の原本である。しかしフランス語の本を書いても出版して下さる会社は殆どなく、また売れることも全く期待できないので、やむなく英語に変えてみたのだった。しかしその英語版も陽の目を見ることなく消え去り、長い間ほったらかしにしてあったものを、今回更に手を加えて、英語をもとにした読み物に変更して書き上げてみた。

こうして振返ってみると、本書はかなり大胆な本といえる。とても真面目に外国語、とくに英語を勉強するための本ではない。ただ英語はもちろん日本語も十分に吟味して書いたので、ほぼ誤りはないと思う。というか日本人だって日本語を間違えるときもあるように、英米人だって英語を間違えることもあるという、おおらかな気持ちで書き上げた。最近、ある政治家が選挙運動の応援を頼まれ,「皆さん、惜敗(せきはい)を期して頑張ろう」と演説したと聞く。まあそれにしても面白いことをおっしゃったものと、大半の日本人は思ったことだろう。こういうこともあるわけだから、要するに言葉は通じればよいのである。「過ちは人の常、許すは神の業(わざ)」であるのだ……。

さてヨーロッパでは、統合が徐々にではあるが進んでいるようだけれども、我がアジアではそのような兆しは殆どない。その理由はあの忌わしい大東亜共栄圏の亡霊があるからだろう。そこで統合を問題とする前に、我々東洋系の黄色人種が共通に

使える言葉を作ったらどうだろう。美しい文字と美しい響きをもった言語で、かつ人類の知的遺産のすべてを、その言語だけで表現しきれるような夢の言語である。そこでその手本として英語という言語を取り上げて、それをもとに夢の言語を作る道を探るのが本書の目的である。ただ作ること自体はさほど難しいことではないが、問題はそれが目的にかない広く浸透するか否かである。それを実現するため皆さん、赤飯(せきはん)を期して頑張ろう！

著者

追記:この本は樋口一浪の筆名で、文庫本として出版していたものの電子書籍版です。出版社も変り、著者名も変ったので、書名はそのままにしました。

序品第一　一般的事項

1－1　NHK のおふざけ英語

英語は難しい。日本で生れ育った人々の半数はそう思っているのではないだろうか。難しい理由は英語側と日本側の双方にあると思われる。英語は一見やさしそうに見えるけれども、その実、西洋言語の中でも特に難しい言語に分類できる。文字は 26 文字しかなく、動詞の大部分も殆ど活用せず、名詞に格や性による変化も殆どない半面、単語の発音と綴字及び語勢（accent）の置く位置についてこれといった原則がなく、殆どが慣用によってきめられている。英語の発音には「**原則はないという原則しかない**」という人もいる。

発音以外では慣用表現の多さ、時制と相、冠詞そして前置詞の使い方の難しさがあげられると思う。しかし逆に言えばこれら 5 つを乗越えれば、英語も乗越えられることになる。その最も良い方法はと言えば、単語すなわち「用例を含めた単語力」に尽るといえる。ちなみに日本国内で売られている普通の国語辞典は、およそ 6 万語の日本単語が載っている。普通の日本人はこのうち半分の 3 万語位は大体知っていると思う。ところが英単語について言えば大学入試で 1 万語、英検 1 級で 2 万語も知っていれば楽に合格できる。この辺にも英語の難しいといわれる日本側の原因があると思われる。

巷（ちまた）にたくさんある英語学校の類では、高い授業料を払ってせいぜい数千語の範囲の会話を楽しみ，分らなくなればニコニコ笑って済ませてしまう。これでは普通の英語は仲々とものにはならない。自動車学校に通えば免許証という確固たる成果が得

られるのに、英語学校に行ったり英語教材を大量に買っても、殆ど成果がないと嘆いている人も大勢いるだろう。更に言えば学校教師や一部の出版社の人々が、情報の出惜しみをしているという点も挙げられる。

一人の教師が何十冊もの英語に関する本を出したり、何十社とある出版社が何百冊もの英語の本を出して、より多くの本を買わせようとしている。これも非常にまずい。英語学はできても実用英語のできない人達、英語はできるのだが日本語がそれにつられて怪しくなってしまっている人達、そういった人々になることなく英語ができる人になることは、日本人にとって本当に難しい。そこで以下においてその理由を考えてみることにしよう。

まず NHK という組織があるが、これは一体何なのか？日本放送協会の略なら日放協といえばよいのに、NHK では日本人にも外国人にも通じない。英語を全く知らない日本人の一部には、Nihon Hoso Kyokai と言えば、外国人にも通じると思っている人間もいるようだから呆れかえる。日本国内では日本放送協会、国外では JBC(Japan Broadcasting Corporation)で統一すべきだろう。社名がいかさまだとやっていることもいかさまが多い。教育テレビやラジオ第二放送では色々な英語講座を放送しているが、大部分はおふざけ、おちょけ講座ばかりだ。

一言で言うならば、一人でも多くの日本人に英語を嫌いになってもらうように、努力している番組ばかりといえる。黄色人種がニコニコ、ニヤニヤと笑いながら白色人種と英語で喋っている姿は本当にみっともないし、まるで幼稚園児が先生と喋っているようだ。それなのに Keep on smiling などと言って、英

米人でも首をかしげるような変てこりんな英語を得意になって紹介したり、「キソエイゴツー」とか「ナットウ delicious!」などという馬鹿げた英語を英語番組なのに使っている。これでは英語を知らない中学生らが聞いたら、キソエイゴやナットウは英米人にも通じる英単語のひとつと誤解してしまうだろう。ふざけるのもいい加減にしなさい。

しかも放送している内容といえば、もう誰にでもわかるような簡単すぎる表現を何百回と繰返している。繰返練習が言語習得の基礎とはいっても、何事にも限度があるだろう。要するに情報の出惜しみである。私の住んでいる名古屋という田舎町には市営バスと市営地下鉄があるが、ここでも日本放送協会の英語番組と同じく、一人でも多くの名古屋市民にバスや地下鉄を利用してもらわないように、日夜努力していらっしゃる。そして大量の赤字公債を発行して、我々はまっかな血の出るような努力をしていますと言いたげである。考えてみれば NHK も名古屋市職員も、ともに公務員という特殊な人類なのだから当然かもしれない。不幸なことである。以上からして **NHK は NKH**、すなわち**日本国賊放送**と名称を変えた方がよい、と考えている人もたくさんいることだろう。

英語が話せるということは、和文英訳が即座に頭の中で出きることと言えるので，日放協の講座でもまず日本語を言い、次にそれを外人講師が英語で言うという方法がいい。しかしどの番組でも相変らず旧態然とした方法でまず英語が読まれ、その次に日本語訳が読まれる場合が殆どだ。これでは読める英語が多少はできても、話せる英語はまずできないだろう。　「たかだか逆にしただけだろう」という人もいるかもしれないが、こ

れが実は大変な違いなのだ。現に例えば生から死へは行けるが、その逆の死から生へは来れないのと同じようなことと言え、耳から覚えるべき言語の基本は、常に自国語から外国語へと行くべきである。そこで本書でもまず日本文を書き、次に英訳文を書くという方針を採用するが、時として英文の方に構文上や文法上の特色があることを示すための例文の場合には、英文を先に書くという方針を採用している。

日本では中学と高校を通して 6 年間も英語が国民の 8 割方に教えられているのに，ほんの 1 割位だけがまともな普通の英語が理解できるだけである!!　恐ろしい無駄だ。しかも英語は喋れなくても英文法の本を出している大学教授とか、英語は喋れなくても英文学の翻訳書を出している翻訳家とか、英語は全く喋れなくても NKH で英米系の歌謡曲の解説をしている者達とか、変わった人々も結構いる。

要するに黄人には白人の言語をうまく喋ることはできないから、文科省も日本国民も、英米文化や文明のおいしいところだけをつまみ喰いして、日本国のために役立てればよいと考えているのだろう。島国国民特有の上手なやり方と言えるが、一抹の虚しさを感じてしまう。

一般的に言って南方民族が、北方民族の言語を習得するのは難しいことである。がしかし例えば日本に働きに来るフィリピンの人々などは、その大半が 2～3 年の日本語教育を受けただけで、かなり上手に日本語が話せる。それなのにアメリカやイギリスに 2～3 年滞在している日本人の商社員や新聞記者らのほんの少しが、まともな英語が話せるだけだ。学校では**通信簿（report card）**が出されるように日本民族全体の通信簿を出す

とすると、日本人は理工学は秀、医学は優、法律や経済学も優だが、文学はなんとか良、語学に至っては不可がつくことだろう。人間個々人に得手不得手があるように、民族全体にも得手不得手があるものだ。

ただ善人が損をするのが世の常であるように、語学の得意な民族は、あまり他の科目が得意でない傾向がみられるようだ(すいません、フィリピンの皆さん)。アラブ人なども語学が得意であり、相当数の人々が英語かフランス語が話せるが、物理や工学、数学などはからきしダメである。もっともアラブ人が、こんなにも理工学がダメになってしまったのも、あのムハンメッドがイスラム教を広めてからである。それ以前はアラブ人も数学や化学、とくに代数の分野では、かなりの業績を残しているのに可哀想なものだ。代数を意味する algebra という語も、元々はアラビア語のはずである。日本人が語学の下手な国民の筆頭とすれば、英米人やフランス人もそれに続く国民と言える。しかもこれらの人々は語学以外の分野では殆ど秀や優に近い成績をあげているから、やはり悪い奴は得をするということの現れであろう……。

こう考えてくると語学などは日本語さえできれば、他の科目で良い成績をあげた方がよいことになってしまい、本書を書く意味がなくなってしまうので、やはり語学も必要であるという前提で話を進めよう。言語は本来、音声的なものだからやはり耳から覚えるべきである。目から覚えた知識は正確だがすぐに忘れてしまうのに対して、耳から入った知識や体で覚えた技術は何年たっても忘れないものである。

子供は皆、「これ何？」「あれ何？」「どうして？」という 3 つ

の基本文を駆使して、親から日本語を習得していく。これと全く同じことを学校教育で行うのは難しいので、他の方法をとるとしても、文法や構文などを目から覚えるのは全く無意味である。例えば日本語で形容動詞の活用を書いてくださいと言われて、すぐに「だろ、で（に）（だっ）、だ、な、なら、―」と書ける日本人はどの位いるだろうか？　殆どいないはずである。むしろ形容動詞って、動詞を形容する品詞のこと？、などと言う人もいるだろう。

それにも拘らず日本ではこれと同じようなこと、つまり英米人でも知らない文法用語や知識を学校では教えている。情けないことである。兎にも角にも、外国語は耳からだけ最初は覚えるべきだ。「馬鹿のひとつ覚え」と言うと言葉はよくないが、それと似た「**英語のひとつ覚え**」をとりあえずやることから始めるのがよい。中学と高校を通じて 6 年間も英語を勉強しながら、国民の 8 割が日常会話のひとつもロクにできないのは超異常である。フィリピン人やタイランド人などの皆さんに恥かしいとすら言える。ラジオ体操は国民の 9 割方が踊れるのに、なぜそれ以上の時間を費やしている英語はダメなのか？

そこで「英語のひとつ覚え」を始めよう。中学生や高校生が日常に出くわす色々な場面を想定して、日本語の会話とそれに続いて英語の訳文を、ただ耳から入る音だけで反復暗唱するとよい。例えば「今日は学校で何をしてきたの?　うん、弱い子を 2，3 人いじめてきたよ。良かったね。みんな強い子になって弱い子をいじめようって、公共広告機構の人々も宣伝しているものね」とか、「今日、先生に保健室に連れ込まれて、さあ先生の搾（しぼ）りたての牛乳を飲めって言われて、口の中に入れられちゃた

の。エー! それって強姦じゃあないの! うん、でも口の中では強姦にならないって弁護士先生は言うし、あの先生はバックに日教組がいるから怖いの」などの、日常の生きた会話を英語で暗唱するとよいだろう。

ただ上記の例、とくに後者はあまり日常的でないだろうが(そう期待したい)、最近でも広島市の公立学校の先公が、20 年間に亘り 60 人以上の生徒を、同様の手口で強姦していて逮捕されたと聞くから、まんざら非現実的でもないようだ。まさに先公もヤー公も**同じ穴のムジナ(They are of the same ilk)** の時代と言える。また中学で英語を最初に覚えるときには、日本語訳はなしで、全くの英文だけを音だけで覚えるのがよいし、もう少し簡単で短い文章、例えば「今日学校で、25m プールを二往復泳いだよ」などから始めると良い。

この際に使う教材は米語ではなく英語が良いだろう。というのも米語はあまり響きが美しくなく、言ってはよくないが、いわば名古屋弁のような英語が米語だからだ。しかも英語は、これも言っては良くないが白人が喋ったときはじめて美しく響くのであり、有色人種や白人と有色人種との混血の人々が話してもあまり美しくは響かない。

最近では日本のあちこちで英語まがいの米語で吠えまくる放送局が増えているようだが、本当に耳障りである。しかもどういう訳か、自局の放送局名と周波数を 10 分に 1 回、1 日で 100 回以上も吠えている。バカのひとつ覚えならまだ我慢もできるが、ここまで同じことを鵯(ひよどり)が吠えているような調子で繰返されては、もはやタワケのひとつ覚えとしか言いようがない。非常に遺憾である。英語はもう少し知的な響きのある言語だから、

黄色人種が真似てもあまりサマにはなりませんです。こんな事なども、日本の英語普及のまずさのひとつだろう。

英語が国際語として広く世界に普及しているのも、ただ単に彼らが過去に世界中に侵攻していった結果ばかりではなく、その響きが美しいのみならず、人類の知的遺産の相当数が彼らによって作られたこともある。ちょっと考えただけでも文学は W. Shakespear、哲学は J. Locke、経済学は J. Keynes、物理や工学は I. Newton や J . Maxwell など、一人でその分野における大半の業績を作り出してしまっている人々が、イギリスにはいかに多いことか!!

更に絵画では J. Turner、バロック音楽では H. Purcell や G. Handel といった具合に、これさえ知ればその分野の概略はほぼ分るという便利さもある。「大英帝国見ずして、偉大と言うなかれ」（Never say Great, before you see Great Britain）と言っても良いくらいだが、英国人自身はそんなことはおくびにも出さない、控えめな紳士淑女の国民である。ただ紳士淑女という言葉は、良い意味もあれば悪い意味もあり、心の中では思っていてもそれを口には出さない人々も含んでいる。

この点フランス人は紳士淑女ではなく、彼らは何んでも平気で口に出してしまう。フランス語も響きはきれいな言語であり、とくに若い女が喋ると美しく聞こえる言語ではあるけれども、なんせフランス人の性格の悪さがその普及を妨げていると言える。「オミャら黄色人種は、フランス語で喋れ」などと言われては、喋る気もなくなってしまう。まあしかし、こういうことを平気で言うのはフランス人の中でも半分くらいに過ぎないが、それでもムカつく。

しかも日本人の場合にはその 9 割方がフランス語の「フ」の字も分らないのだから、まさに馬耳東風、糠(ぬか)に釘で何の意味もないことに気づいていない。もう少しフランス人も利巧になればよいのに、個々人の性格が 30 才もすぎるともう治せないのと同じく、フランス人の国民性ももう治らないだろう。

ただ自国語を他国民に押付けようとする性格は、フランス人に限らず日本人にも強い。多くの日本人は例えば、中国に出かけても中国語の一言も喋らず、「中国人はみんな日本語が話せるよ」などと、シャアシャアという者が多い。こうした**言語的覇権主義**は厳に慎むべきである。フランス人も日本人もこれだけ外国語を話そうとしない、または話せない国民であり続けると、世界の他の民族から嫌われ、結局は自国の言語も滅びてしまうかも知れないので気をつけて下さいな。

さてここらあたりからそろそろ英語の話に移ろう。ただ何度も言うように言葉は耳から覚えるべきゆえ、目からの知識は役立たずのものになる可能性は高い。まず英語を話すときの心構えは、ニヤニヤ、デレデレしないこと、ハーハン(Uh－huh)とかフーフン(Unh－unh)といった相槌をいれないこと、女性は地声でよいとしても男性はできるだけ低く太い声で話すこと、日本語に比べてかなり早口かなと思えるくらいの早さで喋ること、そして単語の強弱のみならず、文の中でも強弱をいれてメリハリをつけて話すこと、の 5 つが挙げられるだろう。

第 1 番目のニヤデレしないことは、日本人同士でもそうだが白人と付き合うときにはとくにそうだと言える。英米人は白人の中ではよく笑う方だが、それでも意味のないニコニコや、不

敵な笑みは避けた方がよい。笑いというものは人間だけに与えられた特権ではあるが（犬や猫などが笑うのを私は見たことがない)、それを上手に使うのは難しいことではある。現に英語でも以下のように色々な笑い方がある。

ハッハッハと笑う＝laugh、ヒッヒッヒと笑う＝chortle、フッフッフと笑う＝chuckle、ヘッヘッヘと笑う＝snigger、ホッホッホと笑う＝smile

キャキャと笑う＝giggle、クスクスと笑う＝snicker、ケッケッケと笑う＝cackle、ニコッと笑う＝grin、ニタッと笑う＝smirk、ニヤリと笑う＝simper、ニヤニヤと笑う＝smirk foolishly、ゲラゲラと笑う＝roar with laughter、ドッと笑う＝burst out laughing、笑いこける＝break into a laugh

こうして見てみると笑うのも容易ではないことが分る。ただ上記の単語群は日英で正確に訳が対応しているとは限らないし、またいわゆる**擬音語**とか**擬態語**は、英語では全く普通の単語と変らないことが分る。上記の例では cackle と giggle くらいが、擬音語または擬態語かなと感じられる程度である。いずれにしても東洋人独特の意味不明の笑み（smile）を見せることなく、また笑って誤魔化すこともなく正々堂々と英米人には対応するとよいだろう。

「笑う門には福来る」と言うが、これは間違っている。金正恩とかその妹の金何某、オサナ・ビン・ラディンとか名古屋市土木課職員などは、いつもニヤニヤと笑っている。彼らの笑いは人間性そのものを舐めた笑い方であり、「笑う門には悪魔が潜む」とこの言葉も改めるべきだろう。と言うか笑い方によってその人間の性格とか、素姓とかが分ってしまうと言うべきかも

しれない。“Yes, ばか須クリニック”のオッサンとか、NKH の職員たちのニヤニヤは、まさに人間性そのものが腐っていることが見え見えである。十二分に心しましょう。

第 2 番目に書いた相槌を打つ(chime in)のもよくない、というかみっともない。西洋人と会話をする場合には相手方の顔を見て、ときどき Yes とか I see と言えばそれでよく、日本人同士の場合ほどには相槌を打ったり、首でうなずく(nod)必要は少ない。これも日本人と西洋人との違いなのだからわりきればよい。また印象の悪さという点からは、yes の代りに yea[jei]、yah[jɑ:]、yeah[jɛə]と言うのも避けた方がよいだろう。

次に女性は、男性と比べると人種間の差が比較的小さいと感じられるので、女性は地声でもよいが男性は出きる限り低く太い声で（deep voice）で英語を話すとよいだろう。そして男女を問わず、できるだけ早口で喋るとよい。英語とくに米語は早口であり、平均的黄色人種の舌の長さと大きさでは、ちょっと真似できないなと思えてくることもある。どの位に早いかと言うと、例えば 10 行で書かれた日本文と 15 行で書かれた英文とがある場合でも、読むと同じ位の時間で終わる程度の速さの違いがある。かなり早い。早口もみっともないが、英語はそれが普通なのだから慣れるようにしたらよいだろう。

最後の 5 番目は**強弱語勢**(stress accent)の付け方である。日本語には**高低語勢**(pitch accent)はあるが、強弱はないのが原則である。しかし英語では各単語すべてに、強勢の置く位置が決まっており、しかもこれは辞書に書いてある通りしなければならないので厄介である。これに対して文章の強弱の置き方は、理論的には比較的簡単で名詞・動詞・間投詞は強く、前置詞・

接続詞・代名詞は弱く、形容詞・副詞は普通に発音すればよい。ただ文脈によっては例えば、「彼がそれをやった」などでは、「彼」を強く発音することもあるだろうし、また指示代名詞の this や that は日本語と同じく「これ、あれ」と強く発音されるのが普通である。

英語の響きが世界の言語の中でも美しいと感じられる原因のひとつに、この強弱の語勢の存在があると思われるので、大切にしたい。加えて文の読み方については、上に書いた文中のどの部分を強く読むべきかという**文強勢**（sentence stress）の他に、長い文をどこで切るかという**句読法**(punctuation)の問題、文中のどの個所で調子を上げたり下げたりするかという、**抑揚**(intonation)の問題の 3 つに注意して英語を話すとよいだろう。

ここまで述べてきた 5 つが、英語を英語らしく話すためのコツであるが、最後にもうひとつ重要なことがあった。それは**人間としての威厳と尊厳**、及び**黄色人種としての自信と誇り**をもつことである。今の日本人の相当数は人前で大きな口を開けてあくびをしたり、人と目が合うとすぐに視線を外して後ろを見たり、道路にタンコロを平気で吐いたり、扉を開けるとそのすきまから割込んできたり、人前であるにも拘らず一向に気にせず、思い切り走ってぶつかりそうになっても平気でいる。要するに礼儀とか躾(しつけ)の全くない人間が相当数いる。成績さえ良ければ良い子というまずい教育の現れであろう。

食事の仕方にしても同じだ。クチャクチャ、クチャクチャと、まるで犬猫畜生が餌を喰っているかのように食事をする日本人が多い。とりわけ文系 4 年制大学を出た者に多い。これを日本以外の国のホテルやレストランでやられては、まさに日本の恥

である。言葉は汚いけれども「黄色人種が餌を喰っとるがや」と言われても仕方ないだろう。こういう日本人は外国に行っても英語はもちろんのこと、他の外国語のひとつも喋れない者が殆どだろう。

こうしたことになる原因の 2 つめは、日本放送協会と報道陣とりわけ A 新聞社であると言える。これらの組織に努めている者たちの多くは、一昔前は安保反対とかベトナム戦争反対などと吠えながら、石投げっこをしていた者たちに違いない。彼ら戦後生れの苦労知らずの者たちには、人間としての知性や知能はもちろん、**人間としての心**すなわち他人を大切にしようとするほんのわずかな気持ちすらない。非常に遺憾である。例えば一度自分のツラを鏡で見てみれば黄色人種であることが分るのに、いつまでたっても白人のつもりでいる。しかもそのくせ白人をメッチャ高く評価するという自己矛盾に陥っているのみならず、そのことに気づいてもいないという知能の低さである。

彼らの作るテレビ番組や新聞では、とにかく出演者らはカメラの方を向かないように演出させ、写真を撮るときにも横を向いた顔のみを大写しで写している。黄色人種の横顔を大写ししても全然美しくないのだから、正々堂々と正面を向いた顔を使いなさい。皮肉れた心がそのまま現れてしまっている君たちのツラなどは、誰も見たくないのだ。こうした他人と目線を合せようとしないやり方が、今の日本人の礼儀のなさや躾の悪さに大きく影響してしまっている。まさに日放協と A 新聞社は戦後日本の国賊である。ただ真正面から目と目が会うと、いわゆるガンタレ状態になり、イザコザが起りやすいことも確かだから難しい問題ではあるが、それでも限度はあるはずだ。

以上は人間としての威厳と尊厳の問題だが、次に黄色人種としての自信と誇りの問題にふれよう。我々日本人からみると白色人種は皆、同じような顔に見えてしまうものだ。殆どがノーベル賞かアカデミー賞でも取った、あの人かと思わせるような顔つきを白人はしている。しかし白人と言っても良い人もいれば悪い奴もいるのである。例えば牛や豚は毎日殺してその死肉を喰っているくせに，鯨や海豚（いるか）は保護しなければいけないと、一本気で主張し続ける Sea Shepherd の連中などは悪い奴の典型例といえるだろう。

必死になって鯨やイルカなどの保護を叫ぶあの姿は、これが白色人種なのかと思いたくなるような阿呆さであり、ムハンメッドの保護しか叫ばないアラブイスラムの連中と全く変りがない。夢の白色人種といえども、やはりタワケはタワケなのであるから、黄色人種であることに我々はもっと自信と誇りを持ってよいだろう。

真面目に働いている人々から税金を盗み取って、働きもしない役立たずのワル達にも福祉を施して平然としている公務員達とか、戦争をやって負けた国には人道支援をしてやり、戦争をすることなく真面目におとなしく国を運営している人々はほったらかしにしている国連の人道支援団体とか、犯罪という快楽を行った犯罪者の人権は手厚く保護しても、何んの罪もない被害者はほったらかしにしている人権派弁護士や報道陣たちも、シェパード達と同じである。

悪い奴をやっつけることが大切なのに、悪い奴らは仲々とやっつけられないから、その腹いせいに真面目な人間やおとなしい動物たちをいじめるという矛盾がみられる。これらすべて

の原因は何んの罪もない牛、豚、鶏だけを喰い殺しても、ヒヨドリやカラス、犬や猫、鯨やイルカをほったらかしにしているという根本的誤りからきているのに、誰も気づかないのは遺憾なことである。

例えば殺人は悪いことである。しかし更に悪いことは、殺人者を英雄扱いし、被害者の苦しみや悲しみを逆撫でして喜んでいる奴らである。こうしたド悪を殺すことはさほど悪いことではない。つまり人権派弁護士とか朝日新聞記者などの犬猫畜生を殺すことは悪いことではあるが、それ以上に社会のためになるので、ムカついた人はたまにはこうしたドワル達を殺すと良いだろう。言いかえれば全ての死刑廃止論者を殺すことは、殺人罪ではなく、器物損壊罪にしかならないと考えて、法律を改正するとよい。けだし死刑を廃止せよと主張することは、自らを殺人罪の客体ではなく、器物にすぎないと主張することに等しいからである。

これに対して、秋葉原の加藤のように不意打ちでやる殺人とか、小学校に侵入して無抵抗な女児を殺すとか、同じく無抵抗な子供を殴ったり蹴ったりした挙句に餓死させたり、戸塚ヨット学校の戸塚のように訓練生を殺したり、相撲部屋の親方が弟子をなぐり殺したりするのは卑怯者のやる殺しであり、こんな奴らを生かしておいてはいけない。加えてこうした奴らを擁護する者達は「まあ、死んどれ」と言いたいが、悪い奴ほどよく生きるので、仲々とやっつけることは出来ないであろう。

話を元に戻して本節の最後に、英語の早口言葉と回文の例を少しあげて、舌慣しの練習をしたいと思う。

早口言葉（tongue twister）の例

・If the sentence that had “had had” had had “had”, it’d have been correct. （もし had had とあるその文が had であったなら、その文は正しかったでしょう）。

・I think that that “that” that that man used is wrong.
(あの人が使ったあの「あの」は間違っていると思います)。

・If the spaces between “Romeo” and “and”, and “and” and “Juliet” were wider, the cover couldn’t cover the title. （もしロメオと「と」と、「と」とジュリエットとの間がもう少し広かったなら、表紙は表題を書ききれないでしょう）。

・In restless dreams, I saw an unidentified object and an unknown soldier.
(絶え間ない夢の中で、私は未確認物体と無名戦士を見た)。

・Miss Nightingale says, “The nightingale sings in the night in gale.” (ナイチンゲール嬢は，小夜鳴鳥(さよなきどり)は強風の夜に 鳴く鳥です，と言う)。

・Nobel prize is a noble prize for a novel novelist.
（ノーベル賞は奇抜な小説家には高尚な賞です)。

・Don’t trouble the trouble till the trouble comes to trouble.
（問題が問題化するまで、問題を問題とするな)。

・These cow and sow know how to sow, mow, bow and sew, now.
（これらの雌牛と 雌豚は種まき、刈入れ、おじぎそして裁縫の方法を今では知っている)。

・Three fluffy feathers fell from a feeble Phoebe’s fan.（3 枚のフワフワの羽がかよわなフィービーの団扇(うちわ)から落ちた)。

・Three thousand thick thistles thrive there.（三千本の太い

アザミがそこに繁茂している)。

・Round a rugged rock a ragged rascal ran.（でこぼこの岩の回りをぼろを着たよた者が走り回った)・

・A parallelepiped can be made by parallel translation of a parallelogram.
（平行六面体は平行四辺形を平行移動するとできる)。

回文(palindrome)

これは前から読んでも、後ろから読んでも全く同じとなる文または単語のことである。単語の例としては level とか mum などがあり、文章の例としては次のようなものがある。

・Able was I ere I saw Elba.
（エルバ島を見る前は私は有能だった)。

・A man, a plan, a canal Panama.
（ある人、ある計画、パナマ運河)。

・God as a devil deified, deified lived as a dog.（神格化された悪魔としての犬、神格化されたものは神として生きた)。

・Madam, I'm Adam.（奥さま、私はアダムです)。

・Poor Dan is in a droop.（可哀想なダンは打ちしおれている)。

１－2 日本語の発音と文法

英語をよりよく知るために、まず日本語から始めよう。と言うか、いかに文法や発音の規則などは知らなくてもよいかの再確認として、日本語の音や文法等の復習をしよう。尚、以下に出てくる文法用語は、殆どが通常の国語辞典に載っているものばかりなので、定義等はそちらで確認できる。まず日本語の音は何種類あるのか？意外と正確に数えるのは難しい。本によっても数値がかなり違っている。その理由は仮名は一字一音になっているが、促音や拗音があってその組合せで別の音になるからだ。

そこで本書では以下のように数値を決定した。まず「**文字としての仮名**」は次のようになる。大字は、①「あ」行から「わ」行までの 46 種(「やゆよ」、「わをん」とする)、②濁音は「が、ざ、だ、ば」行ゆえ 20 種、③半濁音は「ぱ」行の 5 種。小字は④ぁ、ぃ、ぅ、ぇ、ぉ、ゃ、ゅ、ょ、っの 9 種。加えて長母音を表す「ー」の 1 種（アー、ヤッター、ほーら、など)。よって総合計は 81 種×2（平仮名と片仮名）－1（「ー」は共通）＝**161 種**となる!!

次に「**音としての仮名**」は以下のようになる。①短母音は 5 種、長母音も 5 種、連母音は新しい音としては無し。②清音は「か」行から「わ」行までで 40 種（「を」と「お」は音としては同じとする)、③濁音は「が、ざ、だ、ば」行で 18 種（「じとぢ」、「ずとづ」は音としては同じとする)、④半濁音は「ぱ」行の 5 種、⑤拗音は「きゃ、しゃ、ちゃ、にゃ、ひゃ、りゃ」、「ぎゃ、じゃ、びゃ」、「ぴゃ」の 11 種について「ゃ、ゅ、ょ」の 3 種がそれぞれにあるから 33 種。よってここまでで日本語の音は

106 種。しかし「ん」と長母音を除いてすべての音に促音があるから（あった、いった、買った、バッタ、じゃっかん、など）、106 種＋100 種＝**206 種**の音が日本語にはある!!

これだけなら音の問題も比較的簡単だが、更に各種の問題があり、音の種類は増えていく。まず西洋語の音（エイトゥ、ティー、アンドゥ、など）も日本語に入れるべきか否かが問題となるが、これは入れないことにしよう。その理由は簡単でこれをしているとキリがないからである。次に音韻と音素の区別の問題がある。**音韻**(phoneme)とは文字では 1 種で書くが、実際の音では数種の**音素**(allophone)に分解できる語をいう。尚、音声は voice または sound、音韻論は phonology、音声学は phonetics という。

日本語では音韻の区別をあまりしないが、次の例のように、音素としては無意識的に区別しているので厄介である。「ん」は音韻としては一つだが、音素としては三つの区別をしている。①b,p,m が続くときは[m] となる。例えば金歯は kimba、アンパンは ampan、勤務は kimmu、など。②t,d,n が続くときは[n]となる。例えば金太郎は kintaro、宣伝は senden、鉋は kanna、など。③n,k,g が続くときは[N]となる。例えば金銀は kiNgin、銀行は giNkou、日本画は nihoNga、など。

次にガ行の音韻は、音素としては濁音[g]と鼻濁音[ŋ]の 2 つの区別がある。[g]の口のまま，鼻から息を出せば[ŋ]になるが、非常に微妙な音の違いといえる。①「私が」とか「ですが」のような助詞の「が」と、②音楽、鍵、仕事などのような、単語の 2 音節目以下にガ行が来たときに鼻濁音[ŋ]になる。従って例えば「学校が、好きではない」という文の場合、最初の「が」は

濁音の[g]、2 番目の「が」は鼻濁音の[ŋ]で無意識的に区別して発音していることになる!!

またラ行音の音韻は①ホラー！などの**弾音**、②ブルン、ブルンなどの**巻舌音**、③ラジオ、リズム、ロボットなどのように語頭に来るときの**[l]音**、の 3 つに音素としては無意識的に区別して使っている。尚、日本語のラリルレロは舌先を上歯茎の裏につけてはじいて出す音だが、英語の la，li，lu，le，lo は舌先を上歯茎の裏につけたまま出す音である。

最後に、**無声母音**または**母音の無声化**とは、口は母音の発音の形をしているが、声帯は振動していない場合をいい、次の 2 種がある。①無声音と無声子音の間にくる母音。机＝ts~~u~~kue、草＝k~~u~~sa、力＝tʃ~~i~~kara、など。②言葉の終りが無声子音から続いた母音のとき。書く＝kak~~u~~、朝日＝asah~~i~~、です＝des~~u~~、など。特に最後の「です」は日本語では非常に頻繁に現れる例である。しかしこれを「ですう=desuu」と u を強く残したり、「ですよ＝desuyo」とわざわざ母音を増やして発音する方言があるが、非常に耳障りである。

また韓国語では「～da」とか、「～dayo」で終る文が多いように聞え、なんとなく捨てっぱちの感じがして良くない。この点、英語では文のみならず単語の殆ども子音で終るので、やはり子音で終る方がどちらかと言えば美しく響くようだ。従ってこの母音の無声化は、日本語の響きを少しだけ美しくしているようだから大切にしたい。

尚、日本語のサ行は sa,ʃi,su,se,so のように発音され、タ行は ta,tʃi,tsu,te,to、ハ行は ha,xi,Fu,he,ho のように発音される。また**連母音**とは 2 重母音とか、3 重母音などのように、母音が 2

つ以上連なってできた音をいい、日本語には ya,yu,yo,wa の 4 種の 2 重母音があるのみである。

以上ここまでをまとめると日本語の音には、短母音・長母音・2 重母音・半母音・無声母音・清音・撥音（ん）・促音（っ）・拗音（ゃ、ゅ、ょ）・濁音・半濁音・鼻濁音の **12 種**があることになる。

また、仮名文字の使い分けについては、「じ、ず」と「ぢ、づ」が問題となる。①「じ、ず」と発音する語は「ぢ、づ」と書く。例：近づく、ちぢむ、みかづき、など。②助動詞「ぬ」[－、ず、ぬ（ん）、ぬ（ん）、ね、－]の連用形では「ず」と書く。例：食べずに寝る。③単語の頭にある「じ、ず」はそのまま使う。例：辞意（じい）、実地（じっち）、図画（ずが）、頭蓋（ずがい）、随分（ずいぶん）など。

次に日本語の語勢(accent)に移ろう。 これには平板式と起伏式の 2 つがあり、更に後者は頭高型、中一高型、中二高型、尾高型の 4 つがあるので合計 5 種あることになる。次葉の表において、語勢のあるか否かは上まで音が行っているか否かで決めるので、平板式は語勢なしということに成る。また助詞の「を、が、は、」は常に中の高さにあるので、語勢を調べるとき、特に一音名詞の語勢を調べるときに役立つ。次葉の表の下側に書いたのがそれである。

これらを日本語の単語すべてについて覚えるのは不可能であり、また標準語と各地方の方言とで微妙に違っているので、覚えても無駄ともいえる。通常の国語辞典の巻末にも、大体において東京弁を基準にした高低語勢が書いてあるので、それを参考にすると良いだろう。但し東京弁は標準語ではないことに注

意した方が良い……。

日本語の語勢の 5 つの型

	平板式	頭高型、中一高型、中二高型、尾高型			
上：		て	ら	んみ	とーと
中：	たくし	んごく	さき	ん	
下：	わ		む	じ	お

一音名詞の語勢の調べ方

上：	絵	地	歯
中：	を	が	は
下：	柄	血	葉

以上のような事柄は、NKH や民放の声屋(announcer の和訳)にでも就職するのでない限り、普通の日本人は殆ど気にすることもなく日本語を話している。ここからしても日本の英語教育の無駄さ加減がよく分る。

さて次にこれもまた無駄だけれども、日本語の文法のおさらいをしておこう。まず日本語の品詞については何種類あるのか？　この点については 12 種説、10 種説、8 種説などがあり定説はないようだ。日本の文科系の学問はアーだコーだという人物が多すぎるせいか、定説がないものが多いのは非常に遺憾である。そこで本書では英語や仏語との整合性を考えて **8 品詞説**をとることにする。この説では品詞は次葉のような 8 種になる。

8 品詞説では助動詞は動詞に入れ、数詞や冠詞は形容詞の中

に含められている。これに対して日本語では前置詞がない代わりに、助詞、助動詞、連体詞、形容動詞の 4 つが加わり、11 品詞に分けるのが通説のようだ。しかし助詞は、正確に言えば後置詞ではあるが前置詞に入れ、助動詞は動詞に入れ、連体詞は代名形容詞として形容詞に入れる。また形容動詞は名詞に助動詞「だ」、「たり」が付いたものと見て、独立の品詞とは認めないとすれば、日英仏が見事に 8 品詞言語として統一的に理解できる!!

- 単語
  - 語形変化がある
    - 主語になる ---------- 名詞・代名詞
    - 主語にならない
      - 述部に使われる ---------- 動詞
      - 修飾の働きをする ----- 形容詞・副詞
  - 語形変化がない
    - 他の語の後にくる
      - 修飾の働きをする ---------- 前置詞
      - 接続の働きをする ---------- 接続詞
    - 他の語が必ずしも後に来ない ---- 間投詞

但し、副詞（いつも、通常、早くも、など）は日本語の場合には語形変化しないので、上の分類表では前置詞と同じ所に入れるとよいだろう。また名詞も代名詞も日本語では語形変化しないので、上の分類表に「語形変化がない、主語になる」という項目を付け加える必要がある。

語形変化(inflection)とは耳に聞こえる言葉の形が変わることをいい、この中には屈折変化（declension)、活用(conjugation)

そして比較変化(comparison)の 3 つがある。日本語では語形変化は活用があるのみだが、英語では代名詞が I, my, me などのように格変化をするので屈折変化があり、また形容詞や副詞が pretty, prettier, prettiest などのように比較変化もする。しかし英語でも名詞は Smith's などのように所有格を表す's が付くだけなので、ドイツ語やロシア語などのような、いわゆる**屈曲語**(inflectional language) ではない。この点は日本語と似ている。また逆に中国語やタイ語などのように語形変化の全くない言語は、**孤立語**(isolating language) と呼ばれている。

市販されている通常の国語辞典は約 6 万語が載っているとして、そのうちの 8 割強の 50,000 語が名詞、7,500 語が動詞、800 語が副詞、形容詞と間投詞が各 700 語、接続詞が 130 語、代名詞が 100 語、助詞が 70 語くらいであろう。英語の場合は日本語と異り無駄な重複が少ないから、約 5 万語の辞典で十分と考えると、こちらは名詞が 41,000 語、動詞が 7,000 語、副詞と形容詞が各 600 語、間投詞が 500 語、代名詞・前置詞・接続詞が各 100 語くらいであろう。

更に**品詞の残存率**、すなわち奈良時代の頃の古典語と大正以降の現代語で、どの品詞がどの位そのままで使われているかを調べると、次のようになるようだ。動詞・形容詞・名詞は 8 割位が昔も今も同じ、副詞や助詞は 5 割位が同じ、助動詞は 2 割位が同じままであるようだ。ということは古文を読むときには、特に助動詞に注意する必要があるということになる。

ついでに少々分りにくい文法解析の例をあげておこう。「そこに行か**ない**のは、よく**ない**」。　この文の最初の「ない」は動詞「行く」の未然形についた助動詞であり、2 番目の「ない」は

形容詞「よい」の連用形についた形容詞である。　「あの人は**男らしい**。あの影は**男らしい**」。この文の最初の「男らしい」は形容詞だが、2 番目の「男らしい」は名詞「男」に助動詞「らしい」が付いたものである。

助辞(auxiliary word)とは、語が文節をなす場合の性質から見たときの付属語をいい、日本語では助詞と助動詞がこれに当る。助詞は後置詞とも呼べ、格・接続・副・終助詞の 4 種に分けられる。助動詞は「う、させる、そうだ、だ、れる」など約 20 語あるが、本書では動詞に含めて考える。

連体詞は「この、あの、その、あらゆる、いわゆる」など約 17 語あるが、代名形容詞として形容詞に含める。形容動詞は「静かだ、愉快だ、すなおだ、ユニークだ、大事だ」などのダ型と、「泰然(たいぜん)たる、堂々たる」などのタル型がある。例えば「可愛くて、可哀想な子牛達」の、「可愛い」は形容詞の連体形、「可哀想な」は通説では形容動詞である。しかし本書では「可哀想」という名詞に、助動詞「だ」の連体形がついたものとみ、形容動詞は不要とするということは前に書いた通りである。

最後に品詞の簡単な見分け方を書いておこう。それは「**行けよ、だけど、ウド**」である。つまり「い」で終れば形容詞、「だ(たる)」で終れば形容動詞、「う音」で終れば動詞ということだ。また格の見分け方は「**鬼の歯が**」と覚えておくと便利である。つまり「を」という助詞が付けば直接目的格、「に」が付けば間接目的格、「の」が付けば所有格、「は」または「が」が付けば主格というわけだ。但し、これは外国語を日本語に訳したときにそうなるということで、また例外もあるので注意がいる。

方便品第二　英語の音と語

2－1　文字と音

前章の第 2 節では日本語の音と文法について復習したから、本章では英語のそれらの概略を復習したい。耳から音で英語を覚えれば全く知る必要のない知識ばかりであるが、これが日本式外国語だからいかに無駄かを悟る意味で書いてみた。まず英語には 26 文字（但し大文字と小文字、筆記体と活字体があるから合計 104 文字）があり、そのうち a, e, i, o, u の 5 文字が母音字(vowel)、残りの 21 文字が子音字(consonant)である。ただ w と y は子音字だけれども、半母音という音を表すという特徴がある。

これに対して音は基本的には 47 音があり、20 の母音(vowel sound)、25 の子音(consonant sound)、そして 2 つの半母音(semivowel sound)がある。**母音[子音]**とは声帯の振動によって生じた音が、舌や唇または歯で障害や摩擦を受けないで[受けて]発音される音をいい、**半母音**とは母音でありながら子音に近い性質をもつ音[j]と[w]をいう。また**有声音**(voiced sound)とは、咽喉のところにある声帯を振動させて出る音をいい、**無声音**(voiceless sound)とは振動させないで出る音である。母音はすべて有声音だが、子音は有声音(d, g, r など)と無声音(t, k, s など)がある。また[ə]は、**あいまい音**(schwa)と呼ばれる。

英語には母音として短母音(monophthong)、長母音、二重母音(diphthong)があり、子音として破裂音(p, b, t など)、摩擦音(f, v, s など)、鼻音(m, n, g の 3 つのみ)、側音(l の 1 つのみ)があり、半母音として[j]と[w]がある。また[ts], [dz], [tʃ], [dʒ],

[hw] という 5 つの二重子音がある。二重子音は 2 つの子音がくっ付いたものであるが、二重母音とは異りひとつの新しい音が生れるという特徴がある。例えば white は「フワイト」ではなく「ホワイト」であり、adjective は「アドジェクティブ」ではなく「アヂェクティブ」と発音される。この意味での二重子音という語は本書独特のものともいえ、通常の本では、破裂音と摩擦音の合体した音で**破擦音**(affricate) と呼んでいる。

以上が英語の 47 音に関する基本的な事柄だが、次に発音と綴字の関係に移ろう。英語の一大特色は発音と綴字がメチャクチャという点なので、以下に書く例も原則 60%、例外 40%であると考えた方がよい。まず英語では同じ子音が 2 つ続くときは 1 つの音として読む。例：addendum, allege, suggest, Joanna, illusion, mammoth、など。しかし異る子音字が 2 つ続くときは別々の音で読む。例： It'll, prompt。　但し often[ɔːfn]などの例外もある。また無声音と有声音とが続くときは、結果的に有声音 1 つだけに聞こえる。例えば Hepburn は「ヘボン」に聞こえるし、It'd は「イドゥ」に聞こえる。

次に紛(まぎら)しい音と綴字の例を挙げてみよう。

[æ]: Capricorn Daniel havoc radical ration valor
[ei]: atheist David label latent patron ratio Satan

[ai]: Bible biography horizon
[i]: biblical bibliography divorce horizontal

[ɑː]: hearken heart hearth clerk Derby guard sergeant
[ə:]: attorney rehearsal word work world worm worship

[e]: antenna discretion edit aesthetics premier
[i]: counterfeit estate event forfeit
[iː]: camellia chameleon edict mediaeval premium

[ɛə]: bear pear swear tear
[iə]: dear dreary fear rear smear tears weary weir

[ou]: coast ghost Joan postpone program progress
[ɔ]: cost John problem product profit

[u]: cook foot hood hook shook soot wood wool
[uː]: brood doom food groove loose shoot zoom

この他に decease[disíːs] と disease[dizíːz]、envelop[invélop] と envelope[énviloup]、 finesse[finés] と fineness[fáinnis]、wallet[wɔ́ːlit]と walnut[wɔ́ːlnʌ̀t] 、woe[wou] と wow[wau] なども似通っていてややこしい。また「母音(ぼいん)の発音(はつおん)」、「先物(さきもの)と現物(げんぶつ)」、「夜店(よみせ)と露店(ろてん)」などのように、読み方が単語によって異っている例は日本語にもたくさんあるが、この点では英語は日本語より進んでいるので、イチイチ辞書で調べなければならないので大変だ。こうしたことは島国民族の言語の、一大特色であると私には思われる。

加えて生れたときから日本語だけで生活をしていると、[b]と[v]、[i]と[j]、[l]と[r]、[u]と[w]、[g]と[ŋ] などの音を使い分けることは神技のように思えてくる。しかし前にも書いたように日本語でも、例えば[g]と[ŋ]は濁音と鼻濁音として無意識的に区別しているので、慣れる以外によい方法はないだろう。そこで以下においてダジャレのような文章を作ってみたが、これらはあくまで方便であり、実際の会話でこのような文章を多用する

と品位を疑われるので注意のこと。

A hanger is left behind in the hangar.

（衣紋掛（ハンガー）けが、格納庫に忘れてある。）

Leeks leak reek.　（ニラは悪臭を出す。）

Life is rife with unpleasant things.

（人生は不愉快な事でいっぱいだ。）

Japanese live on rice, not on lice.

（日本人は米を主食とします、シラミではありません。）

Japanese lovers use Javanese rubbers.

（日本の恋人たちは、ジャワ製のゴム製品を使う。）

These earplugs wear for donkey's years.

（これらの耳栓はバカもちします。）

They ban the van.　（彼らはその荷物車の販売を禁じる。）

They found yeast in the East.

（彼らは東洋でイースト菌を発見した。）

This lighter's this writer's（このライターはこの作家のです）.

When he woos, saliva and slobber ooze.

（彼は求愛するときには、つばとよだれが出る。）

2－2　単語の語勢

語勢(accent)とは、高低または強弱がそれぞれの語について、習慣的に一定していることをいう。日本語は高低語勢(pitch accent)だが、英語は強弱語勢(stress accent)である。英語の語勢には原則はない、と言っていい位に適当なものだが、英語固有の語は第一音節に強勢のある語が多く、また意味の重点のある所に強勢は置かれるというのが、一応の大原則である。その他、主だった原則としては次のようなものがある。

ｉ）真上型：－eer, －oo, ― oon, －ique, －esque, －ade で終る語はその真上に第一強勢（primary accent）がある。その例としては、career, engineer, bamboo, taboo, balloon, cocoon, antique, boutique, arabesque, grotesque, barricade, lemonade など。しかし例外もあるのであまり当てにならない原則である。以下同じ。

また、－ometer で終る語は o の上に強勢はある。例：barómeter（晴雨計） hydrómeter（比重計） hygrómeter（湿度計） speedómeter （速度計） tachómeter（回転計） thermómeter（温度計）、など。しかし kilometer は míllimeter, céntimeter の続きなので kílometer が正しいが、英米人でも kilómeter と発音する人が多い.

ⅱ）直前型：-ion, -eon, -acy, -ian, -ient, -ic, -ics, -ety などで終る語は、その直前の音節に強勢がある。例えば allusion, religion, luncheon, pigeon, conspiracy, democracy, barbarian, guardian, convenient, deficient, dramatic, terrific, mathematics, physics, anxiety, society など。しかし例えば-ic で終る語でも Arabic, arithmetic, arsenic, Catholic, heretic,

lunatic, politic(s), rhetoric, turmeric は例外となっている!!

ⅲ）後ろより 3 音節型：-ate, -ment, -ism, -ify, -ite, -ize などで終る語は後ろより 3 番目の音節に強勢がある。例えば certificate, intermediate, document, sentiment, criticism, mechanism, diversify, notify, definite, parasite, civilize, recognize など。

以上の 3 つの原則はまあまあ当てになるので、覚えておくと良いと思う。加えて「例外のない原則」はないのかと探したところ、次のようなものが見つかった（但し確信は今のところない）。 -itis で終る語は t の前の i の上に強勢がある。例えば appendicitis(盲腸炎)、arthritis(関節炎)、conjunctivitis(結膜炎)、encephalitis(脳炎)、gastritis(胃炎)、gastroenteritis(胃腸炎)、hepatitis(肝炎)、meningitis(脳膜炎)、pharyngitis(咽頭炎)、stomatitis(口内炎)、tympanitis(中耳炎)など。

尚、有名なものとしては - tion で終る単語はその直前に強勢が置かれるという原則があり、これはおそらく例外なしであろう。また「単語の語勢は必ず母音の上に置かれる」という原則も、当り前かもしれないが例外はない。ただ以下のように、「母音字はなくても母音となる例」があるので多少注意がいる。
M<u>c</u>Donald[məkdɔ́nald], <u>Mc</u>Intosh[mǽkintɔʃ], r<u>hy</u>thm[ríðm]

ついでに言えば「**例外のない規則はない**」(There is no rule but has exceptions.)という言葉があるが、この言葉自体をひとつの規則と考えれば、この言葉にも例外があることになる。つまり「例外のない規則はない」の例外だから「例外のない規則がある」ことになる。こう考えると確かに数学の定理などは、

例外のない規則として作られている。この意味では数学は、立派な学問と言えなくもないが、ただ定義(definition)や公理(axiom)を変えれば、色々異なった定理(theorem)が作られるので、大した学問でもないともいえる。

本節の最後に、人名と地名について一言。人名や地名のなかには読みづらいものが多いことは、日英共通の現象といえる。ただ英米人の名前(first name)の多くは、いわゆる Christian name でありその数は限られている。しかし苗字（last name）はラテン系、スラブ系などもあり非常に読みづらいものも多い。また同姓同名を避ける意味もあってか、殆どの人が middle name を持っているが、日常ではあまり使われることはない。しかもこれは Baines, Fitzgerald, Milhous といった、一昔前の世代の名前が使われることが多い。

こういう訳で名前は男女合わせても 300 種も知っていれば、英米人の 8 割方の名前を知れるので便利である。ただ Catherine は Kate, Elizabeth は Betty、John は Johnny、William は Bill、Geraldine は Jerry、Thomas は Tom、などの愛称(hypocorism)も覚えておく必要がある。また Bamberg,Hamburg, Lindbergh は、「バーグ」は同じ音だが綴字は微妙に違っているので注意のこと。加えて Edinburgh は、エディンバラと読む!?

あだ名は nickname、雅号は pseudonym、偽名は false name、匿名は anonym、筆名(ひつめい)は pen name または nom de plume、別名は alias という。また、名字は family name、苗字は last name、姓は surname、中間名は middle name、氏(うじ)［族］は generation name、名前は first name または given name、名は name、姓

名は full name、氏名は first and last name、姓名判断は onomancy、本名は autonym、諱(いみな)は real name、諡(おくりな)は posthumous name、戒名は Buddhist name としておこう。

浮き名は moniker、通称は sobriquet、通り名は epithet、仮名は borrowed name、別姓は byname、名誉名は cognomen、家名は agnomen、家紋は family crest という。あだ名は綽名、渾名、仇名、諢名などとも書き、綽号(しゃくごう)ともいうようだ!?

ついでに言うと天皇という語は、固有名詞なのか普通名詞なのかが問題となる。「あの人」しかいないから固有名詞かと言えるが、世襲なら「誰でもいい誰か」ゆえ普通名詞とも云える。同じようなことはダライ・ラマや愛新覚羅についても云えると思う。英語では天皇も皇帝も emperor というから、普通名詞としておく。尚、皇太子は crown prince といい、天皇の母親である皇太后は empress dowager いう。

日本人の姓名は姓＋名で書くが、英語にすると名＋姓と書くように、中国人の場合は苗字＋氏＋名で書くが、英語にすると氏＋名＋苗字で書くことが多いので注意がいる。例えばチャーン類という数学上の概念を作り出したチャーン氏は、中国語では**陣省身**と書くが、西洋系の本では Shiing Shen Chern と書いてある。氏＝**省**＝Shiing、名＝**身**＝Shen、苗字＝**陣**＝Chern となり、非常にややこしい。

2－3　異音語と多義語

前にも書いたように単語は語学の生命である。「これ何?　あれ何?　どうして?」と言いながら、耳から覚えるのが最も良いが本書ではそれができないので、系統的かつ確実に覚えるために何か軸となるものを作ることにした。その軸とは単語とりわけ、名詞や形容詞を以下のような 8 種に分けて、できる限り多くの語を集めるというものである。

①異音語(heteronym) ②多義語(polysemous word) ③同音語(homophone) ④同形語(homograph) ⑤派生語(derivative) ⑥反義語(antonym) ⑦類義語(synonym) ⑧類似語(paronym)

尚、単語を接尾辞(suffix)、挿入辞(infix)、接頭辞(prefix)、語根(radical)や語源(etymology)などによって系統的に覚える方法がある。しかしこの方法はラテン語やギリシア語の知識も多少は必要となり、かえって覚えにくいかも知れない。例を挙げてみると、anthro は人を表し、miso や phobe は嫌いを表すから、misanthrope は人間嫌い、misogynist は女嫌い、xenophobe は外国嫌いの人になると言った具合である。ただ本書ではこのような方法はとらず、上記のような方法をとるが、一応有名な接尾辞などの一部を列挙しておこう。

ⅰ）名詞語尾として-ion, -al, -y, -ment, -ity, -age, -tube, -cy, -ism, -ist, -let などがある。また動詞＋al は名詞に、名詞＋al は形容詞になるのが原則である。

ⅱ）形容詞語尾として-ile, -al, -ent, -ic, -ous, -ory, -iant, -ate, -ine, -ative, -ary, -ive などがある。

ⅲ）動詞語尾として-ify, -ate, -ize などがある。

ⅳ）副詞語尾として-wise, -ward(s), -ling, -long, -ly, -like など

がある。
ｖ）挿入辞としては、whatsoever の so などがある。
さて本論に戻って、まず**異音語**とは同形異音異義となる語をいい、綴りと発音が相当かけ離れた英語特有の現象といえる。しかしそれでもその例はそれほど多くはなく、私が見つけた限りでは 35 例だった。日本語では漢字は殆どが音と訓の 2 つの読み方があるので一種の異音語といえるが、単語としては河野（カワノとコウノ）、形相（ケイソウとギョウソウ）、白山（シラヤマとハクサン）、吉川（キツカワとヨシカワ）など、それほど多くはない。

axes
- [æ´ksiz] ax の複数
- [æ´ksi:z] axis の複数

bass
- [beis] c. 低音
- [bæs] c. 魚の名

bow
- [bau] c. おじぎ，船首
- [bou] c. 弓

buffet
- [bʌ́fit] c.　平手打ち
- [bu´fei] c.　食器棚

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

wound
- [waund] wind の過、過分
- [wu:nd] c.傷　vt.

wind
- [wind] n. 風 vt.
- [waind] v.を巻く u.c.

その他の例としては cashier, cleanly, desert, drawer, hinder, housewife, Job, lead, live, logos, minute, mow, multiply, pension, Polish, primates, primer, prayer, proverb, refuse,

row, sewer, slaver, slough, shower, sow, tear, used, vice, viola などが見つけられた。

これらとは別に、綴字は同じだが語源が異り、かつ強勢の置く位置が違う語も、異音語の一種とみなせる。その例として cónsole（床置型）と consóle（を慰める）、cóntent（中身）と contént（満足して）、cónverse（逆の）と convérse（談話する）、éxcise（物品税）と excíse（を切除する）、ínvalid(病身者)と inválid（無効の）などがある。

次に**多義語**とは、1 つの語でありながら、多くの意味をもつ語をいう。いわゆる基本語と言われる語の多くはこれである。とくに動詞の一部は、こんなに沢山の意味があってよく誤解が生じないものだな、と思いたくなるくらい多くの意味と用法がある。ここではほんの少しだけ例を挙げておこう。

attend: He attends school. (彼は学校に通う)。
John attended(accompanied) her on the tour.(に随行する)。
Are you being attended to ?(ご用件はもう伺っていますでしょうか)。

come: On what page does it come? (どのページに出ていますか?)。 The butter will not come.(バターがまだできない)。
My shoelaces have come untied. (になる)

do: do one's hair, do the room, do the wash (を処理する)
The glass of wine has done me good. (A に B をもたらす)。
Will this do for you? I think I can make it do. (十分である)。
This would do in quantum mechanics. (これは量子力学の規則に適うだろう)。

due:　This discovery is due to Newton. (に与えられるべき)。
When is the baby due? (赤ちゃんの予定日はいつですか)。
He plied his friendship with due decorum. (彼はしかるべき礼儀を尽して、しきりに交友を結んだ)。

get:　I'll get you a dishwasher for your birthday. (A に B を買ってあげる)。　Get his hat for him. (B を A に取ってきてやる).　How far have we got? (どこまで進みましたか)。　Let's get doing. (急いで取りかかろう)。　Let's get started.（さあ始めよう)。(さあ出発しようは、Let's start.である)。

give:　The hen gave an egg this morning. (めんどりは今朝、卵を産んだ)。　Give my kind regards to your family. (ご家族によろしくお伝えください)。　It's expensive, I give you that, but it's a good one. (を認める)。　Given under my hand and seal this 7th day of July. (7 月 7 日自署捺印により作成)。　This chair gives comfortably. (たわむ)。　There is no give in this mattress. (このマットレスには弾力がない)。

go:　He's going all over. (彼は至るところに出没している。)
Don't go breaking glasses. (やたら～する).　The clock has just gone three. (鳴る)　　As the proverb goes. (諺にもあるように)　Where do the spoons go ? (いつも置かれる)
The car went cheap. (その車は、安く売られた)　He's clever as students go today. (彼は今どきの学生としては、お利巧さんだ)　It's a rum go.(妙なことだ)

have:　ｉ)「を持っている、(友人など)を持つ、(ある性質など)がある、を心にいだく、をしなければならない(＝have to)」の意味のときは、イギリス英語では have got の形を使うのが

普通。但し、目的語がない文では have となる。例： Have you got the book？　Yes, I have.　ⅱ)「を食べる、を飲む、を吸う、(経験として)をもつ」の意味のときは進行形にすることもでき、またこの意味ではイギリス英語でも do を使って疑問文や否定文を作る。例：He's having lunch.　Did you have much snow last year？　　ⅲ)使役を表す have の場合も do を使って否定文や疑問文を作る(I don't have her do the wash)。

keep:　She keeps a bookstore. (を経営する)。　We don't keep that article. (を店に置く)　I keep myself in clothing. (私は衣服は自分持ちである)。　The milk will keep for three days.(牛乳は 3 日はもつ)。

let:　I won't let you down. (がっかりはさせません)
a house to let = a house for rent (貸家)　Fight until their blood is all let (彼らの血を全て流すまで戦え)。
Don't let's [= Let' not] anticipate which may never arise. (起りそうもないことを、案じないようにしよう)。

make:　There was only a beer. Maurice made it. (食事など)をとる。　Life is as pleasant as you make it. (A を C と思う)
The precedents make in your favor. (先例は君に有利である)。

meet:　I was met by him at the door. (を迎える)　Nice [Pleased] to meet you. (初めまして、よろしく)　The bus meets the first train. (と接続する)　Will this meet the case？(を満たす)　The class will not meet on Sunday. (開かれる)

refer:　This is sometimes referred to as anomaly. (これは時として異常と呼ばれる)。　You may refer to this book. (を

参照する)。　The number refers to the page on which the symbol is defined.（を指し示す。）
The hiatus you've been referring to, how would you say about literary community ? (あなたがお話の資金の空白について、文学界についてはどうお考えですか)。　Should he refuse you, refer him to me. (に差し向ける)

set:　It sets the boys an example. (を示す)　Cook until the eggs set. (卵は固まるまで火にかけなさい)　The apples haven't set well. (リンゴはよく実っていない)

take:　I don't take any paper. (新聞は取っていません)。
I take it that she is English. (と推定する)　She takes well. (彼女は写真写りが良い)　The seed didn't take. (種はつかなかった)　You should take the blame. (責めを負うべきだ)。

基本語の中には、husband のように「夫」という意味の方が強烈で、「を節約する」という意味の方が往々にして忘れがちな語がある。このような語としては better(を改良する)、champion (を擁護する)、dog (をつけ回す)、eye (をじろじろと見る)、harbor (をかくまう)、 man (に人を配置する)、mouth (を気取って言う)、right (を整頓する)、stomach(に耐える)、 thumb (を親指でめくる)、wrong (に悪い事をする)、などがある。
I bicycle to the station. (私は駅まで自転車で行く)。
He stars in this film. (彼はこの映画で主役を演じる)。
Popular entertainers volunteered in campaign.
（人気芸人も運動に奉仕参加した)。

2－4　同音語・同形語・派生語

同音語とは異形同音異義語をいい、「鮭は魚、酒の肴」、「貴社の記者が汽車で貴社に帰社しました」などのように、音の少ない日本語では頻繁に現れるが、英語では比較的少ない。普通の英和辞典で調べたら **250 例**位見つかった。尚、draft=draught, plow=plough, premiss=premise などのように、1 つの単語でありながら 2 つの異る綴り方のある語は、ここでは含めていない。また国語辞典を調べていたら、紀行・機構・気候・・・・・寄港・寄稿・奇行というものが見つかり(18 種あった)、こうなると漢字というよりか感字といった方がよい感じもしてくる。

[eid] { aid / aide }　　[eil] { ail / ale }　　[eit] { ate / eight }

[ɛə] { air, heir / ere }　　[ail] { I'll / isle, aisle }　　[ɑːk] { ark / arc }

……

……

[weist] { waste / waist }　　[wiːk] { weak / week }　　[wud] { wood / would }

以上は単語の同音語の例だけれども、I scream, “Ice cream.” (私はアイスクリームと叫ぶ)、It's taught, “it's tort.”（それは不法行為であると、教えられている）などのような、文章で同

音となる例は**連接発声**(juncture)と呼ばれている。このような例を自分で探してみるのも単語力の強化になると思う。尚、日本語では「おー神だ!　狼だ?」、「佐藤俊夫の砂糖と塩」、「すいません、吸いません」などの、色々な例が作られる。

同形語とは同形同音異義となる語をいい、多義語と違い語源が異ることにより、違った語として扱われるものである。同形語は辞書を見ていれば、例えば mole[1] c. もぐら　mole[2] c. ほくろ　mole[3] c .突堤 などのように書いてあるので見つけることは簡単である。ざっと調べてみたら **150 例**位が見つかった。こうした語を覚えるには例によって、駄洒落を作って記憶するとよいが、ただ実際に使うのは教養を疑われるので止めること。

Brills and flounders floundered on the deck.

（ヒラメとカレイが甲板の上でもがいた。）

His palm looks like a palm.

（彼の手のひらはシュロの枝のようだ。）

The doctor examined the pupils of the pupils.

（医者は生徒たちの瞳をしらべた。）

The rap musician didn't a rap hear a rap on the door.

（ラップ音楽屋は扉を叩く音が少しも聞こえなかった）

This sole is made of the sole skin of sole.

（この靴底はシタビラメの皮だけで出来ている。）

They yen for strong yen.（彼らは強い円に憧れている。）

派生語とは、ひとつの単語から分れ出た、通常品詞の異る語をいう。殆どの単語には派生語があり、これらを網羅すること

は殆ど不可能なのでほんの一部の例をあげておこう。 尚、接頭辞(prefix)とか接尾辞(suffix)は派生語を作る上で重要である。

line（直線）—linear（線形の）—rectilinear（直線の）、curve（曲線）—curvilinear（曲線の）,

morning—matinal（朝方の）、day—diurnal(日中の), evening—vesper— vespertine, night—nocturnal(夜中の), spring—vernal—vernalize（に春化処理する）, summer—estival—estivate（夏を過ごす）, autumn—autumnal, winter—hibernal—hibernate

head—cephalic（頭の）, body—corporal, hand—manual, foot—pedal, breast—pectoral（胸の）, ear—aural（耳の）, eye—visual, ocular, mouth—oral, nose—nasal（鼻の）, face—facial, brain—cerebral（脳の）, voice—vocal（声の）, tongue—lingual, stomach—gastric, heart—cardiac（心臓の）, lung—pulmonary（肺の）,vein—venous（静脈の）,artery—arterial（動脈の）

tooth—dental, intestines—intestinal, spine—spinal（背骨の）, kidney—renal（腎臓の）, liver—hepatic（肝臓の）, pancreas—pancreatic（膵臓の）, spleen—splenetic（脾臓の）, esophagus[iːsɔˊfəgəs]—esophageal（食道の）,guts—gutsy（腸(はらわた)の）, duodenum—duodenal, rectum—rectal（直腸の）, anus—anal（肛門の）

2－5 反義語・類義語・類似語

反義語とは、ある語と反対の意味をもつ語をいう。反義語、反意語、反対語は類義語としておく!?　反義語を探すのは普通の辞典では難しいが、「反義語辞典」を使えば簡単に分るので、ほんの少しの例を集めておこう。

alliteration（頭韻）—rhyme（脚韻）, annual（一年生の）—perennial（多年生の）, apogee—perigee（近地点）, austral—boral（北の）, connote—denote（明示する）, colloid（にかわ質）—crystalloid（結晶質）, deciduous（落葉の）—evergreen, confident—diffident（自信がない）, devout（敬虔な）—profane, elective—required（必修の）, esoteric—exoteric（顕(けん)教の）, extinguish—kindle（火をつける）, explicit—implicit, extrinsic（付帯的な）—intrinsic, extrovert—introvert（内向性の）, fertile（肥沃な）—sterile, figurative（比喩的な）—literal（文字通りの）, frigid—tropical, hearty—perfunctory（形だけの）, heterodox—orthodox, ideographic（表意的な）—phonetic, naïve（信じやすい）—sophisticated, limp—stiff, nadir—zenith（天頂）, opponent（対抗者）—proponent（擁護者）, opaque—translucent（半透明な）—transparent（透明な）, protract（を引伸ばす）－retract,　plenum（充満）—vacuum, polite—uncouth（乱暴な）, recto（表側）—verso（裏側）,warp（縦糸）—weft=woof（横糸）。

また成句や熟語形の反義語としては、次のようなものがある。Ahura Mazda（光明神）－Angora Mainyu（暗黒神）, cast [drop] anchor(錨(いかり)を下ろす）—weigh anchor(碇(いかり)を上げる), Don

Quixote—Sancho Panza（俗者）, nod one's head（うなずく）—shake one' head（首を振る）, the merits and demerits（長所と短所）, the strong and weak points（利点と弱点）, the steady-state theory（定常宇宙論）—the big-bang theory（膨張宇宙論）, under separate cover（別便で）—under the same cover（同封して）、など沢山ある。

最後に反義語を作る接頭辞としては de-, dis-, il-, im-, in-, ir-, mal-, mis-, non-, un- などがある。例： decentralization dislike illegible immortal inanimate irregular malfunction misfortune nonsense unkind ,etc.

類義語(synonym)とは、別のことやものであるが、似かよっていることを別の言葉で云った語をいう。これに対して、**同義語**(synonymy)とは、同じことやものを別の言葉で云った語をいう。これらは日ごろから「英英辞典」を引く癖をつけていると、自然と相当数覚えられる。加えて類義語と同義語の区別は紙一重の場合が多いので、本書では類義語という言葉を優先することにした。加えて「平和」と「鳩」、「ビン」と「酒」などの本来は異る意義をもっているが、個々の文脈において同じ意味として扱われる語は、**換喩**(かんゆ)(metonymy)と呼ばれる。以下に於ては類義語の例を少々挙げておこう。

・衣類＝wear, 衣服=dress, 衣装=costume, 着物=garb, 衣(ころも)=clothing, 盛装=array, 着衣＝raiment、服装＝apparel、服＝garment、服飾(品)＝accessories、装い＝attire、洋品＝clothes
・誤り＝mistake、過失＝fault、為損(しそん)じ＝miss、失敗＝failure、

失策＝error、大失敗＝blunder、ケアミス＝careless mistake、怠慢＝neglect、不注意＝negligence、へま＝fiasco

・学位論文＝dissertation、学術論文＝treatise、研究論文＝memoir、小論文＝essay、専攻論文＝monograph、卒業論文＝thesis、論文＝paper

・がらくた＝rubbish、くず＝litter、ごみ＝trash、粗大ごみ＝refuse、生ゴミ＝garbage、資源ごみ＝recylables、くず箱＝waste-paper basket、ごみ箱＝dustbin、ごみ入れ＝trashcan

・頭文字(かしらもんじ)=initials、頭字語(とうじご)=acronym、頭字飾(とうじかざり)=monogram

・国民＝nation、人民＝people、市民＝citizen、住民＝inhabitant、平民=commoner、庶民=the populace、大衆=the masses、民衆=the public、下層民=the rabble、賤民=the untouchable、衆生=sentient being、人種＝race、民族＝ethnic race、種族＝tribe、語族＝lingual tribe

・肥えた＝plump、太った＝fat、でぶな＝fatty、肥満な＝obese、中年太りの＝stout、やせた＝lean、細い＝thin、すらりとした[スマートな]＝slim、

・賢い＝smart、端正な＝decent、端麗な＝graceful、美男の＝handsome、優雅な＝elegant、気品のある＝noble、粋な＝chic、上品な＝refined、洗練された＝polished、当世風な=stylish

・逸話＝anecdote、挿話＝episode、故事＝historical fact、碑文＝墓碑銘＝epitaph、肖像＝effigy、たとえ話＝parable、寓話＝fable、教訓談＝apologue

・鬼＝ogre、鬼神＝demon、悪魔＝devil、魔王＝Satan、邪悪＝evil、悪鬼(わるおに)＝goblin、極悪人＝fiend、幽霊＝ghost、お化け＝specter、妖怪＝phantom、亡霊＝apparition、幻影(げんえい)＝spook、

妖精＝fairy、小妖精＝elf、阿修羅=berserk

・格言＝maxim、金言＝adage、警句＝aphorism、諺＝proverb、俚諺(りげん)＝saw、名言＝saying、名句＝epigraph、標語＝slogan、座右の銘＝motto、信念＝belief、信条＝creed、信教＝credo、主義＝tenet、教理＝dogma、教義＝doctrine、教訓＝lesson，訓戒＝precept、宣伝文句＝catch phrase、観念形態＝ideology

・特色＝trait、特質＝character、特性＝characteristic、特徴＝feature、特長＝strong point、性質＝property、属性＝attribute、

・知性＝intellect、悟性＝understanding、理性＝reason、知能＝intelligence、知覚＝perception、感性＝sensitivity、感受性＝sensibility、感覚＝sense、感覚作用＝sensation

・(人が)泣く＝weep、(馬や牛が)啼く＝cry、(鳥が)鳴く＝sing、すすり泣く＝sob、泣き叫ぶ＝cry out、涙を流す＝shed tears

・教会＝church、礼拝堂＝chapel、大聖堂＝cathedral、大修道院＝abbey、修道院＝monastery、女子修道院＝convent、尼寺＝nunnery、僧院＝cloister、司教館＝rectory、バジリカ教会堂＝basilica、ユダヤ教会堂＝synagogue、寺院＝temple、神社＝shrine、回教寺院＝mosque、拝殿＝祈祷所(きとうじょ)＝oratory、本殿＝聖堂＝sanctuary,　霊堂=廟堂(びょうどう)＝mausoleum、聖像=icon、万神殿=pantheon，小修道院＝priory

・信徒＝adherent、信者＝believer、俗人＝laity、異教徒＝pagan、邪教徒＝heathen、異端者＝heretic

通常、日本語では１つの概念に１つの単語を当てる場合が多いが、英語では似かよった概念は１つの単語で言ってしまう場合

が多い。しかし中には日本語では１つの単語で言われるが、英語では数語になる例もあるので、ここでそのような例を少し集めておこう。

足（foot, leg, hoof, paw, stem）、炒める(brown, fry, sauté)、茨(bramble, brier, thorn)、客(client, customer, guest,visitor)、切る(chop, cube, cut up, dice, mince, shred, slice)、係数(coefficient, factor, modulus)、こぶ（hump, lump, swelling）、旅(excursion, journey, outing, tour, travel, trip, voyage)、爪(claw, nail, talon)、針(hand, hook, needle, pin, sting, stylus)、混ぜる(blend, mix, stir, whip)、見出し(caption, entry, heading, headline, title)、道(road, route, way)、むく(pare, peel, shell)、群れ[(人の)crowd=horde、(魚の)shoal=school、(獣の)herd、(鳥や羊の)flock、(虫の)swarm、(無生物の)cluster、(建物などの)complex、(一般的な)group、(幾万もの) myriad]、焼く（bake, broil, barbecue, fry, grill, roast, toast）

最後に**類似語**とは、単語の外観が似ている語をいう。類似語と類義語とは類似語である!?　類似語の中には外観は似ているが意味は似ていないものと、外観も意味も似ているものとがあり、後者はとくに類義語とほぼ同義語である!?　こうした単語を覚えるには、例によってまず駄洒落から始めよう。

・He’s conscious of his conscience and conscientious consciousness is his confidence. (彼は自分の良心を自覚しており、良心的自覚は彼の自信である。)

・Snoozing, he’s snoring and sneezing. （うたたねをしながら、彼は鼾(いびき)をかきクシャミをしている。）

・This clean-cut man has a clear-cut mission. (この小ぎれいな男は明確な使命をもっている。)
・He seemingly seems a seemly man without the seamy side. (彼は外観上は裏面のない、きちんとした人に見える。)
・He studied odontology, ontology and otology. (彼は歯科学、存在論そして耳科学を研究した。)
・Ian ate an ion of iron. （イアンは鉄のイオンを食べた。）
・Vile wiles rile Reyl. （下劣な策略はライルを怒らせる。）
・The juggler cut the jugular of a jaguar. (曲芸師はジャガーの頸(けい)静脈をきった。尚、頸動脈は carotid)
・Indigenous people are indigent, but ingenuous and ingenious. They're never indignant at other's ingenuity. （土着の人々は赤貧であるが、天真爛漫で発明の才がある。彼らは決して他人の創意巧妙さに憤慨しない。)
・A shabby and shaggy man with flabby skin is shady and shaky. (ぶよぶよの肌をし、ぼろを着て毛むくじゃらな男はうさん臭く、よろよろしている。)
・She's sensible, and her sensual and sensuous sensory organs are sensitive. (彼女は分別があり、また官能的かつ、美的な感覚器官は感じやすい。)
・He dabbled in stocks and doubled his debts. (彼は株に手を出し、借金を 2 倍にした。)
・Inpatients are impatient and outpatients are out of patience. (入院患者はイライラし、外来患者は我慢の限度を超えている。)
・Dear prostitute lay prostrate and kneaded my prostate.

（売春婦さんはひれ伏して、僕の前立腺をもんでくれた。）

・I envelop my envelope in newspaper.

（私は封筒を新聞紙で包む。）

・Sting said that the door was stuck and stunk like a skunk.

(スティングはこの扉はくっ付いて動かないし、スカンクみたいに臭いと言った。)

次に類似語の例をもう少し挙げておこう。ただこれも沢山あるのでほんの一部の例だけである。

abjure(を放棄する)—adjure (を命じる)—adjudge (と判決する)—abject (下劣な), arise(生じる)—arouse (を目覚めさせる)—raise (を上げる)—rise (上がる)—rouse (元気づける)、alternate(交互の)—alternative —alternating (交流の)。

censor—censure—census—consensus—sensor, clash(カチンと壊れる）—crash（ガチャンとぶつかる)—crush（グシャと壊れる）—smash（ガチンと壊す）, crumble(ボロボロに砕く)—crumple(しわくちゃにする)。

convoke—evoke—invoke—provoke—revoke（を取消す）, emaciate—emanate—emancipate, flight—freight—fright(恐怖), intention—indention—indentation—intent—intend, link(環)—rink(スケート場)—ring (競技場), numerable（数えられる）—numeral—numerical—numerator—numerous, statue（彫像）—stature—status—statute—statutory.

tribe（部族）—tribal—tribunal—tribute—tributary（支流）－tribune—tribulation（苦難）,verifiable—veritable—viable (実行できる), variable(変りやすい)—variant—various(様々

の)—varied（変化に富んだ)。

日本語にも類似語は多い。ひとつの例として遣と遺、補と捕、径と経、郡と群、微と徴など使い分けの微妙な語が相当数ある。これらとよく似た関係にある英単語としては、a と u、または a と o の入替語が挙げられる。 babble と bubble、bastard と bustard、barn と burn、bask と busk、brash と brush、cant と cunt、crash と crush、dab と dub、damp と dump、exalt と exult、fan と fun、flash と flush、gargle と gurgle、hash と hush、hat と hut、lark と lurk、lash と lush、mad と mud、pad と pod、parser と purser、pat と pot、rag と rug、rapture と rupture、rash と rush、rat と rut、snag と snug、spar と spur、spatter と sputter、staff と stuff、tag と tug、track と truck、valley と volley、warm と worm、wrath と wroth などは、類似語の例にもれず意味も似ているものと、意味は全く似ていないものとがあって非常にややこしい。早速ダジャレを作ろう。

・A dump truck full of rats is running on a damp track full of ruts. （ネズミで一杯のダンプカーが、轍(わだち)で一杯の湿った小道を走っている。)

・A bug on the rug, a rag in the bag.
（絨毯(じゅうたん)の上に虫一匹、鞄の中にぼろ切れ一枚)

・Don’t use a flash light in the flush toilet.
（水洗便所の中で懐中電灯を使うな。)

・Wearing a hat in a mud hut is mad.
（泥小屋の中で帽子を被っているのは狂っている。)

・This coat is snug, but has a snag.
（この上着は体にピッタリだが、引っかき傷がある。）

加えて日本語では王女と女王、会議と議会、会社と社会、外国と国外、慣習と習慣、該当と当該、権利と利権、法律と律法、理論と論理などは、まだ多少の意味の違いがあるのでやむを得ないとしても、荷電と電荷、議決と決議、軽減と減軽、継承と承継、情熱と熱情、消費と費消、生誕と誕生、分配と配分などはどちらかにするか、または別義語に定義し直すとよいだろう。

また権限と権原、広告と公告と抗告、採決と裁決、酒食と主食と酒色、召集と招集、心理と心裡と心裏、意思と意志、選民と賤民、特殊と特種、反米と汎米、保障と保証などは駄じゃれのもととなるので、もう少し工夫して見たらどうだろうか。英語ではこうした例はあまりないが、次のような文章は似かよった点がないともいえない。

・She left right and turned left at the light.
（彼女はすぐに出発し、信号で左に曲った。）
・Men who quarry in a quarry are quarrymen.
(採石場で採石する人々が砕石夫である。)
・These scarecrows don't serve to scare crows.
（これらの案山子（かかし）は、カラスを脅すのに役立たない。）
・Fleas, please, freeze! (ノミ達よ、どうか、動くな!)
・They still steal steel.　　（彼らは今も鉄を盗む）

譬喩品第三　品詞

3－1 総論

さて本書もここまでくると、巷(ちまた)に何千種と売られている、殆ど役に立たない英語の本と同じになりつつある。しかし何度も言うように英語は耳から覚えるべきで、本などは元々不要なのだから、我慢してお読みください。そこで、まずは各種用語の定義から始めよう。

文法(grammar)とは、ある言語体系がどのような形で組合せられ関係づけられて、表現と理解に役立っているかの規則をいう、としておく。**品詞**(parts of speech)とは、単語を文中で果す役目により分類した名称をいい、**語**または**単語**とは意味をもった言葉の最小単位をいう。**文節**(articulation)とは直接に文を構成する最小の単位をいい、**連文節**(joint-articulation)はまとまった自然な区切りからなる、数個の文節のことである。

文(sentence)とは音声又は文字を続けて、一定の思想または意味を表したものをいい、**文章**(sentences)とは文の集りである。「火事!」、「はい」、「いいえ」などのような 1 語文では、文＝文章＝語となる。尚、**分ち書き**(word segmentation)とは、単語又は文節毎に間(ま)をあけてしるす書き方をいうが、西洋語では分ち書きされるが、日本語では殆どされない。例： I go to school every day. 私は、毎日、学校に、行く。

文脈(context)とは、文章における意味の展開の仕方や流れをいう。**文の成分**とは文節と文節の関係をいい、主述関係・修飾被修飾関係・対等関係・補助関係・独立関係の 5 つがある。文の要素には、主要素として主語(subjective word)、述語動詞

(predicative verb)、目的語(object)及び補語(complement)の 4 つがあり、修飾要素(modifier)として句と節とがあり、独立要素として間投詞(interjection)と呼びかけ(address)がある。

句(phrase)とは文の一部をなし、その中に主語・述語を含まない語群をいう。Get away with は動詞句、in front of は前置詞句といえるから、8 つの品詞すべてについて句は考えられるが、文法的に見て重要なものは名詞句、形容詞句そして副詞句の 3 種である。

次に**節**(clause)とは文の一部をなし、その中に主語・述語を含む語群をいい、これには名詞節、形容詞節、副詞節の 3 種がある。またどの品詞により節が作られているかにより節を分類すると、接続詞節（that 節、if 節など)、疑問代名詞節、関係代名詞節、「その他の節」の 4 種がある。「その他の節」というのは、Now you're older, The moment you saw me などの形で作られる副詞節のことである。節はまたその機能から分類すると、等位接続詞（and, but など）で結ばれ重文を作る**独立節**、及び複文を作る**主節**と**従属節**との 3 種がある。

英文法では以上のような句と節の問題は重要なものであるが、その他に重要なものとしては話法と特殊構文の問題が挙げられる。**話法**とは、他人の言葉を引用するときの言い表し方をいう。ここでは①代名詞の人称、②動詞の時制、③助動詞、④指示代名詞、⑤時や場所の副詞、⑥伝達動詞、それぞれの変化が問題となる。ただいずれも機械的に変えればよいので比較的簡単ではあるが、例によって例外もあるので注意がいる。少々ややこしい例を 2，3 挙げておこう。

・「急がないと遅れるよ」と私は彼に言った。

I said to him, “Make haste, or you’ll be late.”

I told him he would be late unless he made haste.

・「映画に行くけど君はどこに行くの」と彼は私に聞いた。

He said to me, “I’m off to the flicks. Where are you going ? ”

He told me he was off to the flicks and wanted to know where I was going.

・「昨晩私に電話した?」と彼女は私に聞いたので、「したよ」と言った。

She said to me, “Did you ring me up last night?”

I said, “Yes”

She asked me if I had rung her up the last night and I said I had.

次に**特殊構文**とは、文法的必要からではなく意味の強調、文の釣合、習慣などにより語順が通常の文とは異っている各種の文のことである。これには強調文、共通関係文、省略文、挿入文、同格文、倒置文、特殊な否定文などがある。それぞれに固有の問題があるが、ここでそれらを取上げている余裕もなく必要もないと思うので、少しの例文をあげて終りとしたい。

・彼を幸せにしたのは人格ではなく、財産であった。

It was not what he was, but he had that made him happy.

（It is ~ that の強調文も it was ~that ＋過去形、という形の時制の一致がある）

・老人は青年より幸せである。前者は思い出に生き、後者は希望にのみ生きるから。Age is happier than youth, because

the one lives on memories, while the other on hopes only.
（共通関係文）

・何人もそうでないという証明のあるまで、無罪の推定を受ける。You're presumed to be innocent until (you're) proved otherwise. （省略文）

・いつも傷をする原因は、何だと彼は考えていましたか?

What **did he suppose** was the cause of his frequent injuries ?（挿入文）

・悪ふざけはいい加減にやめなさい!

Don't you stop your shenanigans !（Stop your shenanigans! という命令文の、強調としての一種の倒置文）

・早く帰りたくてたまらなかった。

I could hardly wait to get back home.（特殊否定文）

・私はもうあなたと一緒にいることしかできません。

I can't wait to be with you again. （特殊否定文）

3－2　名詞・代名詞・形容詞

名詞とは動詞の主語または目的語、及び前置詞の目的語になることができ、人・物・場所・質・作用を描写する語をいう(By a noun is meant a word that describes person, thing, place, quality or action, and can be used as the subject or object of a verb, and the object of a preposition.)。 英語の名詞に於ては数(number)、性(gender)及び格(case)が問題になる。これら3つは日本語では殆ど問題としないので厄介である。

まず複数(plural)とは 2 以上の数をいうのか、または 1 より大きい数をいうのかについては、英文法では前者が取られる。従って例えば 1.5 回は複数ではないので、one and half time といい time に s は付かない。これに対して日常用語では単数とは 1 をいい、複数とは 2 をいい、多数とは 2 より大きい数をいうのが通常だろうけれども、英文法では上のように扱われるので注意のこと。

また靴下や靴などのように 2 つが常に 1 組になっているものについて、**双数**(dual)という概念をもち出し文法上も特別の扱いをする言語もあるようだ。英語でも鋏(はさみ)(scissors)やズボン(trousers)などのように二股になっているものは、常に複数形扱いされる。従ってズボンが一着しかなくても、My trousers are there.のように複数形となる。

次に名前、妻、夫など通常は 1 つしかないものは、単数にするのが論理的だけれども、複数形が使われる場合が多い。

・人間には頭が 1 つある。

Men have heads.（Men have a head.とすると多数人に 1 つの頭がある、の意となる)。

・彼女らは母親に自分達の細かい仕事を手伝ってもらうのを期待している。　They expect their mothers to help them pick up the pieces.
しかし both, each, respectively などが付いた文では単数形でよい。
・英国にも日本にも首相がいる。
　Great Britain and Japan both have a prime minister.

　英語には可算名詞(countable noun)として普通名詞と集合名詞、不可算名詞(uncountable noun)として固有名詞、物質名詞及び抽象名詞がある。また衆多名詞(noun of multitude)というものもあり、これは集合名詞ではあるが、1 つの単位ではなく各構成員を重視して複数扱いされる名詞のことである。可算名詞には不定冠詞が付くかまたは複数形になるし、また特定したものであれば定冠詞が付く(I saw **a** boy in **the** street.)。
　不可算名詞には不定冠詞はつかないし、複数形にもならない。また不可算名詞は一般的言明では定冠詞をつけない(We're having ~~a~~ really fine weather at the moment.　She wrote an article about the role of women in ~~the~~ society.)。しかし不可算名詞でも可算的に扱ったり、「ある種」という意味で不定冠詞をつけることもあるし、特定したものとして扱いたいときには定冠詞をつけてもよい（These are examples of **the** many everyday uses. これらは日常生活での使われ方の多くの例である)。
　以上のように名詞の分類についての原則論は極めて簡単であるけれども、可算名詞(c.)か不可算名詞(u.)かの区別の基準が曖

昧なこと、一つの名詞でも c.になったり u.になったりするものがあること、及び u.のようでありながら常に冠詞をつけて使う名詞があることなどにより、冠詞とのからみで名詞を正しく使うことはかなりの慣れがいる。

・冷蔵庫に玉ネギある?　　（可算名詞）

　Are there any onions in the fridge ?

・この料理に玉ネギ入っている？　（不可算名詞）

　Is there any onion in this dish ?

英語の名詞に於てはその**呼応**、すなわち主語と述語動詞とを数と人称によって一致させる必要があり、これがかなりややこしい。例えば“A as well as B”は A に動詞は一致し、“A or B, either A or B, neither A nor B”は、B に動詞は一致する。

・His mother as well as his sisters **has** been invited.

・Neither Joanna nor her friends **are** wrong.

A number of, a crowd of などは複数扱い、many a は単数扱い、a lot of は数に関するときは複数、量に関するときは単数扱いとなる。

・Many a motorist **doesn't** care where he goes in his car.

・A lot of houses **are** burnt down.

・A lot of money **was** spent for fruit machines.

部分詞(partitive)とは few, half, most, part, some, the rest などの、物の一部をさす語をいう。部分詞は名詞の数に一致し、また名詞が集合名詞のときは複数扱いされる。部分詞だけのときは複数扱いされる。

・乗組員の大部分は溺死した。 Most of the crew **were**

drowned.

・休火山であるものは少ない。

Only a few **are** dormant volcanoes.

尚、「分数+of+名詞」の場合は名詞の数に一致し、更に名詞が集合名詞のときは複数扱いされる。また、**助数詞**とは数詞の次につけて、物の種類を表す接尾語をいうが、英語にはこれと似た語として、a piece of cake, two cups of coffee などの言い方があるがその数は少ない。日本語では一冊の本、一戸の家、三台の車、十枚の紙、二杯の水などかなりの助数詞がある。しかし助数詞の種類の多さでは、日本語も中国語ほどではない。

次に英語の名詞には日本語と同じく、男性（man, son, nephew など)、女性（woman, daughter, niece など)、中性（book, pencil など殆どの名詞はこれ)、通性（baby, child, friend など）の 4 種がある。しかし中性名詞でも時として男性(masculine gender)または女性(feminine gender)として扱うことがあり、これは一種の擬人化である。また England や Japan などの国名を表す名詞は、国家や市民の意味のときは男性として扱うのが普通である。いずれにしても英語の名詞の性は、フランス語などと比べると極めて簡単でこの点は楽である。

最後に**格**(case)とは、名詞または代名詞の他の語に対する文法的関係をいい、英語では代名詞は主格、目的格、所有格の 3 つの変化があるが(I, my, me, you, your, you など)、名詞は所有格の's があるだけゆえ（John's book など)、簡単である。ドイツ語やロシア語などのいわゆる屈曲語は格変化が多く、例えばフィンランド語では次のような 16 種もの格変化があるそう

だ!?

主格(nominative)、属格(genitive)、与格(dative)、分格(partitive)、対格(accusative)、様格(essive)、変格(translative)、内格(inessive)、出格(elative)、入格(illative)、接格(adessive)、奪格(ablative)、向格(allative)、欠格(abessive)、共格(comitative)、具格(instructive)。

これだけややこしい言語で日常生活を送るのは、大変だろうなと思えてくるが言語は耳からであり、耳から覚えた言葉はスラスラと口から出てくるのだろう。現に日本語だって日本人の口からはスラスラとでてくるのだから.....。尚、格の代表的用法としては主格は主語や補語、属格は所有や所属、与格は間接目的語、対格は直接目的語などである。

代名詞とは、名詞または名詞句の代りに用いられる語をいう(By a pronoun is meant a word which is used in place of a noun or a noun phrase.)。代名詞には人称、指示、不定、疑問、関係代名詞の **5 種**がある。人称代名詞には古語として thou thy thee thine（所有人称代名詞)、ye your ye yours があるし、また it its it は人称代名詞であり指示代名詞ではない。指示代名詞(demonstrative pronoun)には this, that, these, those, such, same の **6 種**があり、また疑問代名詞には from whence（どこから）, what, which, who の 4 種がある。不定代名詞は他の 4 種に属さない代名詞をいい、all, another, any, both, each, one などざっと数えて **22 種**位ある。

・不定代名詞 one は同種のものをうけたり、一般の人を表す場合には冠詞はつかず、また複数形にもしない。

A bed made of iron is better than one made of wood.
She wasn't one to go haywire.（彼女は取乱すような人ではない。）

・指示代名詞の that や those は同種ではあるが、特定したものに対して使う点で one と異る。

Many of the symptoms mimic those seen in contagious diseases.（症状の多くは伝染病に見られるそれらとよく似ている。）

The climate of Japan is milder than that of China.

・同一物をうける one や特定物を表す one には、冠詞などがついたり、複数形にもなる。

They change the chemicals in soil and water into useful ones.（彼らは土壌や水中の化学物質を有益なものに変える。）

Whose is this one ?　（これは誰のものですか?）

・it との対比に於ては one は同種のものをうけるのに対して、it は同一のものをうける。

Have you got a pen ? —Yes, I've got one.
Have you got the pen ?—Yes, I've got it.
I bought one like it a month ago.
（私は一カ月前にそれと同様なものを買った。）

次に疑問代名詞は、疑問文を作る代名詞である。疑問詞疑問文に対する答えは人称や数、及び動詞はもとの疑問文と答えの文とで一致するのが原則である。

Which cost more , these or those ? — Those do.
What is the capital of Italy ? — Rome is.

（What が主語ゆえ、It is Rome とは言わない。）

しかし次のような例外も多々ある。

What are the capitals of England, Scotland and Eire?

－They are London, Edinburgh and Dublin, respectively.

What was wrong with you ? —I had a cold.

（どこが悪かったの?—風邪をひいていました。）

What do you do, Anna ?—I'm a secretary.

（アンナさん、ご職業は? — 秘書をしています。）

また Like what（例えば?）, Who and what is he ?（一体どこの誰なんだろう?）, When did who get here ?（いつ誰がここに来たって? 但し、ここでの When は疑問副詞）、などの言い方もできる。

形容詞とは、名詞または代名詞を修飾する語をいう(We mean by an adjective a word which modifies noun or a pronoun.)。形容詞には数量・代名・性質・疑問・関係形容詞の 5 種があるが、一定の数を表す数詞と名詞を限定する冠詞も、形容詞の一種として含めるのが通説である。

数詞とは特定の数または順序を表す語をいい、不特定の数量を表す**数量形容詞**とは区別される。前者は one, two,...,first, second などをいい、後者は many ,much, few, little, a certain, several などのことである。数詞こと数字も耳から覚えない限り、仲々と聞きとるのが面倒であり、通訳泣かせの一つなので次のような提案をしたい。

すなわち人間の視覚として、零は 4 つまでなら誤りなく識別できることにより、人類共通の数字は 4 桁区切りで書き、4 桁

区切りで読むことにしよう!!

trilliard billiard milliard trillion billion million

1000,0000,0000,0000,0000,0000,0000=10^{27}

秭(し)　垓(がい)　京(けい)　兆　億　万

こうすれば日英仏などの言語がきれいに揃い、言語学習者にも大変に楽になる!!　また日放協などでは、例えば 2010 円を、「ふたせん飛びとお円」などと読んでいるが、分りにくいので止めてもらいたいものだ。「にせんじゅう円」で十分である。

文章の中で数字を書くときには、次のような原則がある。まず 11 以上の数字、パーセントを表す数字、月名と共に使う日付は数字で書けばよい。

Will you make 30 copies of this report?

The shares Joe hold account for 25%.

On November19, 1863, Lincoln went to Gettysburg.

しかし 10 以下の数字、文頭に数字が来るとき、文中での分数、o'clock を使った時間は文字で書く。

There're five people in the room.

Twenty passengers are injured.

She has done two-thirds of her quota.

The mail was delivered after three o'clock.

尚、日付は英米ともに月日年の順で書き、日は序数詞で読むのが原則である。しかし仏語のように日月年で書き、かつ読んだ方がすっきりすると思う。例えば 10 May 1970 と書き、tenth May nineteen seventy と読むのが良いだろう。ただ日本語は年月日のままでよいと思う。

ここで数字に関する表現を少しまとめておこう。

・r^b は r (raised) to the power b、r^4 は r to the fourth (power)、r^3 は r cubed、r^2 は r squared と読む。平方根($\sqrt{r}$)は the squared root of r、3 乗根($\sqrt[3]{r}$)は the cubic root of r、n 乗根($\sqrt[n]{r}$)は the nth root of r と云う。

・小数点以下第 3 位で切捨て下さい。

Round down the number to the three decimal places.

・小数点以下は切捨て[切上げて][四捨五入して]下さい。

Round the decimals down [up] [off] by a unit.

・四捨五入とは、端数の第一の桁が 4 以下のときは切捨て、5 以上のときは切上げる算法をいう。

We mean by **round off** an algorithm by which we round down fractions inferior or equal to four, and round up those superior or equal to five.

・12 点未満の生徒には再試をします。

I'll give a retest for students with score under 12.

・その城は外観では 5 階に見えるが、実際は 7 階である。

The castle actually has seven floors in spite of its appearance of five stories.

・ボーイング社は 3 位上って[下って]8 位となった。

Boeing rose [fell] three places to No.8.

・フォードは去年の 16 位から 7 位に上った[下った]。

Ford jumped [dropped] to No.7 from No.16 last year.

・どうして 9 は 7 を怖がるの? ― だって 7 は 9 を食べちゃたからさ。Why is nine afraid of seven? ― Cos seven ate nine.

(ate と eight の掛詞(かけことば))

次に**冠詞**とは、名詞につけてその表す概念の適用範囲を指示する語をいう(We mean by an article a word attached to a noun which designates the range of its notion.)。冠詞は日本語にはないものだけに、その使用法の概略を掴むことは難しい。.冠詞自体のもつ固有の意味、慣用的に付ける場合と付けない場合の区別、そして不定冠詞の場合は名詞が数えられるか否かの区別、以上の 3 つに注意すると多少は理解しやすくなる。

朝食はできています。 Breakfast is ready.

お茶ができています。 The tea is ready.

おい、外人! Hey, Foreigner! あー、外人だ! Ah, a foreigner!

ペプシコ社の株が急騰した。Shares of PepsiCo soared.

ペプシコ社のその株が急騰した。The shares of PepsiCo soared.

その車は一定速度で走る。The car runs at constant speed.

その車はある一定の速度で走る。

The car runs at a constant speed.

時間ある? Have you got time?

時間分る? Have you got the time?

時間です= **Time** is up. 時は来た= **The time** has come.

時代は変った= **Times** have changed.

時勢に遅れている=You're behind **the times**.

以上の例は冠詞が付いたり付かなかったりする理由が何となく分るものばかりだが、次のような例はもはや慣用的と言ってよく、英米で生れ育たないと仲々と理解できない気がする。

He wears a beard.（彼はあごひげを生やしている）

She threw a tantrum.（彼女は癇癪(かんしゃく)を起した）

The skier flared to a stop. （スキーヤーはスキーを朝顔型にして止まった）。

職業をいうときには不定冠詞が付くが(I'm an interpreter.)、公職のときには付けなくてよい（I'm UN high commissioner for the refugee. 私は国連難民高等弁務官です）。また特に特定したいときは the をつけてもよい(He is the physicist. 彼がその物理学者です)。

また「牛は役に立つ動物です」と言う場合、Cows are useful animals.というのが最も普通だが、不定冠詞をつけて（A cow is a useful animal. 牛というものは役に立つ動物です）と言ってもよい。更に学識ばった(pedantic)言い方をするときは the をつけて、The cow is a useful animal.（牛なるものは有益な動物である）とも言える。更に、Are tomatoes a fruit or a vegetable?—They are vegetables.という言い方にも注意。

形容詞で難しいのは冠詞のほかに、比較表現の慣用的なものがある。そこで分りにくい後者の例文を少し集めておこう。まず as ~ as で慣用句になっている例は沢山あるが、as cool as a cucumber, as poor as a church mouse, as snug as a bug in a rug（非常に居心地がよい）、などは面白い表現である。

・This is not so much a game as a fight.
（これは試合というよりケンカです）

I know French, much more English.
（私は仏語ができる。なおさら英語はできる）

He cannot so much as write his own name.
（彼は自分の名前すら書けない）

・Γ translates l by no more than α does.

（ガンマはアルファと同じく、l を移動させない）

A whale is no more a fish than a horse is.

（鯨は馬と同じく魚ではない）

No more [less] のように no が付くものは大体慣用的表現となるが、not more [less]のように not が付くものは大体普通の比較表現の否定形になる場合が多い。 No more than 1000 yen（1000 円しかない。主観的表現）not more than 1000yen（1000 円未満。客観的表現）

・Some people are none the wiser for their university education. （一部の人は大学教育を受けたからと言って、一向に賢くならない）

・He doesn't know English, still less German.

（彼は英語はできない。なおさらドイツ語はできない）

He is no less a person than Timaeus.

（彼こそティマイアスその人である）

Guide must be good at languages, but what is no less important is what we call culture.（案内人は語学が達者でなければいけないが、それ以上に重要なのはいわゆる教養である）

・Just as A is B, so C is D.

（A が B であるように、まさに C は D である）

A is to B, as C is to D.

（A と B の関係は、C と D の関係と同じである）

最後に**性質形容詞**について一言。これは事物の性質、状態、種類などを示す形容詞で、大部分の形容詞がこれに属するので、

主に人を形容する性質形容詞を少し集めておこう。

けちな=miserly、どけちな=avaricious、けち臭い=niggardly、しみったれな=stingy、倹約な=parsimonious、節約な=thrifty、さもしい=vile、しまりのない=lax、無気力な＝helpless

おどおどした=jumpy、びくびくした=fainthearted、無口な=taciturn、小心な=shy、臆病な=timid、怖気づいた=scared、意気地のない=pusillanimous、

卑怯な=cowardly、卑劣な=mean、陰気な=gloomy、うっとおしい=dismal、むっつりした=sullen、無愛想な=surly、意地悪な=nasty、腕白な=naughty、破廉恥な=infamous、あくどい=fulsome、むっつりした=glum、

気取らない=unassuming、やつれた=haggard、口達者な=glib、超然とした=aloof、ぎくしゃくした=jerky、怒りっぽい=touchy、ぶっきらぼうな=curt、沈着な=self-possessed、茶目な=wicked、おつむパーの=batty、取りすました=prim、小言の多い=nagging、もの柔らかな=suave、

単純な=straightforward、自惚れた=overweening、控えめの=reticent、ぞんざいな=off-hand、ひょうきんな=facetious、滑稽な=ludicrous、神経質な=keen、緊張した=nervous、恥かしい=embarrassed、ネアカ＝innate cheerful、 ネクラ＝innate dour

尚、I'm embarrassed.（わたし恥かしいな）に対して、It's embarrassing.（それは恥かしい）。また I'm worried.（心配です）に対して It's worrying.（それは心配なことだ）などのように、人が主語のときは過去分詞形を、物が主語のときは現在分詞形が使われるのが原則である。

3－3　副詞・動詞

副詞とは、形容詞・副詞・動詞などにそえ、それらを修飾する語をいう(By an adverb is meant words which are added to adjective, adverb, verb, etc, and which modify them.)。副詞は主として動詞、形容詞、副詞を修飾するが、句や節、(代) 名詞、文全体を修飾する副詞もある。また副詞には単純副詞、疑問副詞、関係副詞の 3 種がある。

・Γは自由かつ固有非連続的に作用する。Γ acts freely and **properly** discontinuously. （副詞を修飾する例）

・彼は欲しがっていた昇進のためだけに、見えすいた嘘をついた。He told a blatant lie **only** for the purpose of coveted promotion.（句を修飾する例）

形容詞に ly を付けると副詞になるのが原則だが、ly を付けなくても副詞となる単語もある。両者のどちらを用いても意味が同じものとしては bright—brightly, hot—hotly などがあり、意味や用法の違うものとしては broad（すっかりと）と broadly（大雑把に)、dear（高価に）と dearly（心から）などなど沢山ある。

・彼女はかなり可愛らしく着飾っていた。She's dressed pretty prettily.

・彼は殆ど一生懸命には働かない。He hardly works hard.

“too, either, so” などの使い分けは次のようになる。前文が肯定文のときは too（または so)、否定文のときは either（または neither）を使うのが原則である。

{ He went to London and she did too.
{ He went to London and so did she.

{ He won't go there and she won't either.
{ He won't go there and neither will she.

I think you have bad memories about the past.　I do, too.
（君は過去についていやな思い出があると思うけど、僕もだよ）。

しかし例外もある。

例外のⅠ：前文が肯定文、後文が否定文またはその逆のときは次のようになる。

He went to London. She didn't go there too.
（彼はロンドンに行った。彼女も行ったわけではない）

He didn't go to London. She went there either.
（彼はロンドンに行かなかった。彼女も行かなかった訳ではない）

例外のⅡ：and ~ too [either] の形で、しかも～である[でない]の意を表す。

It froze, and in May too.（氷が張った。しかも 5 月である）

There was a shop, and not so big either.（一軒の店があった。しかもそう大きくはなかった）

例外のⅢ：文ではなく単語が 2 つ以上の場合には、否定文でも and または too を使えばよい。

I'm not interested in old men ,and old maids.
(俺は年寄りや年増には興味はないぜ。)

Imagine there's no countries. No religion too.
（国なんてないって考えてごらん。宗教もだよ）。

副詞の位置については代名詞を修飾するもの、文全体を修飾するもの、方法や状態を表す副詞、頻度を表す副詞などによっ

て、被修飾語の前または後に置かれたり、動詞の前または後に置かれたり色々である。思いつくままに、例を少しだけ挙げておこう。

・3 試合続けて、あなたは同じ手を喰った。

For three games **running**, you've gotten into the same trap.

・まばたきは終止符のようであり、脳に情報について熟考する時間を与える。

Blinks are **more** like periods, allowing the brain to mull over information.

・私は時々かなり長い間バスを待たねばならないので、いつか車を買います。

I **sometimes** have to wait for the bus **some time**, so I'll buy a car **sometime**.

・次から次へと形を変えなさい。Change the forms r**ound.**

・うまくゆけばここで、夜が過ごせるだろう。

Hopefully we'll pass the night here.

・この本は果たしてよく売れるだろうか。

Will this book **ever** sell **well**?

次に動詞に移ろう。**動詞**とは、動作・作用・存在・状態・知覚を表すために使われる語をいう(We mean by a verb words which are used to describe movement, action, existence, state or perception.)。動詞の形態については活用と種類の 2 つが問題となり、動詞の用法については時制、態、法の 3 つが問題となる。

まず活用については規則変化と不規則変化があり、後者は**約**

300 の動詞がある。前者は-ed を付けて過去形及び過去分詞形を作るが、次のような例外的規則もある。子音字が 1 字で終り、その直前の母音字に第一または第二強勢があるときは、子音字を重ねて-ed（現在分詞のときは-ing）を付ける。

can—canned, dub—dubbed, jog—jogging, handicap—handicapped, prefer—preferring,　rebel—rebelled sum—summing, transmit—transmitting、など。

しかし直前の母音字に強勢がないとき、及び子音字がすでに 2 つで終っているときには重ねない。 developed, fluttered, revealed, trailed, traveled,tramped,vomited など。尚、規則動詞といえども、frolic—frolicked のように特別な形となるものもある。

動詞の種類は文章の**基本 5 文型**によって 5 つに分けられる。それぞれの文型によって、紛らわしい点を列挙しておこう。まず第一(S+V)と第二文型(S+V+C)について。I live in London.の in London は修飾語句ゆえこれは第一文型だけれども、Winter is over.の over は副詞が補語となったものゆえ第二文型である。同様に There is time to go there.（そこに行くだけの時間はあります）は第一だが、It is time to go there.（そこに行く時間です）は第二である。

次に第三文型(S+V+O)については、直接目的語の日本語訳が問題となる。前にも書いたように直接目的語は日本語に訳すと「を」になるのが原則だけれども、「に」や「と」などになる直接目的語をとる動詞もある。その例としては、accompany（に伴う）、answer（に答える）、approach, attend, climb, confront,

marry（と結婚する）、fight（と戦う）、resemble（に似る）、win（に勝つ）など沢山ある。

また Please refrain from smoking.（お煙草はご遠慮下さい）などのように、自動詞と前置詞が密接に結びついて 1 つの他動詞のような働きをしている動詞も、第三文型に入れるのが良いだろう。加えて bereave A of B（A から B を奪う）、inform A of B（A に B を知らせる）、inhibit A from B（A に B をさせないようにする）などのように of または from 以下をとってしまうと、文としては必ずしも完全とはならないような動詞でも、第三文型に入れざるを得ないと思う。

第四文型（S+V+IO+DO）による 2 つの目的語は、直接目的語「を」と間接目的語「に」であるが、例外として 2 つの直接目的語をとる動詞（answer, ask, begrudge, envy, forgive, grudge, pardon, save, strike,など）がある。この場合どちらか一方の目的語を消しても意味が通じるという特徴がある。

・誰も彼の幸運をねたむ人はいなかった。

No one begrudged him his good fortune.

・彼は一発その犬を激しく殴った。

He struck the dog a violent blow.

to, for または of を使い間接目的語を直接目的語の後ろにもってくる文型は、もはや第四ではなく第三とみるのが良いだろう。例えば Give me the book.は第四だが、Give the book to me.は第三である。また I ask him to come.、 I expect it to rain tomorrow.、I allow her to come.などは、次の第五文型と見るべきだろう。

第五文型（S+V+O+C）の目的語と目的格補語については、主

語+補語または主語+動詞の関係にあることが必要十分である。従ってすぐ上に書いた 3 つの例文は本文型であるといえる。第五文型は使役を表す表現にも使われ、これは次のような 5 つに分類できる。

強制使役[A（人）に～させる]：make A do, get A done,
force [compel, oblige] A to do

非強制使役[A（人）に～させておく]：let A do

丁寧使役[A（人）に～してもらう]：get A to do, have A do
[B（物）を～してもらう]：get B done, have B done

不利益使役[B(物)を～される]: get B done, have B done

完了使役[B（物）を～してしまう]：get B done, have B done

英語では「物を～される」と「物を～してもらう」と言う形は全く同じであり区別がつかない。また不利益使役と完了使役も全く同じ構文であるが、通常は意味内容によって区別できるし、また完了使役の場合は命令の意味を含む文で使われるので区別できる。I had a new suit stolen.は不利益使役、 Why don't you get your chores done?（雑用を片付けてしまったらどうなの?）は完了使役である。尚、He made her his wife.（彼は彼女を妻にした）は第五文型だが、She made him a good wife.（彼女は彼の良い妻になった）は第四文型と見るべきだろう。

時制(tense)とは、時間についての観念を示す文法上の様式をいう。これには単純時制、完了時制、進行時制、完了進行時制の 4 つがあり、それぞれに過去、現在、未来という自然的な時の概念が結びつくので合計 12 種あることになる。例えば過去の単純時制は過去形(past form)であり、未来の完了進行時制

は未来完了進行形(future perfect continuous form)となる。

ここまでだけなら英語の時制も割と簡単であるが、ここには更に、いわゆる相の概念が含まれているのでややこしくなる。**相**(phase)とは動詞の表す動作、作用が開始、継続、完了のいずれの段階にあるかを示す概念をいう。英語では相は時間の概念と共に表され、これと離れて相だけを表すことができないのに対して、中国語などでは時間の概念と離れて相だけを表すことができる。また中国語の動詞には英語の動詞のように時制の体系がないが、相の体系は英語より複雑である。これに対してフランス語などでは、完了時制も進行時制もないので、相は問題とする必要は殆どなく英語より簡単である。要するに英語の時制が難しいのは、相と時制が混在しているからと言える。

- 動詞
  - 点動詞
    - 動作(意志による人の行為をいう)……走る(run)、見る、眠る(sleep)、扱う、接近する(approach)、など
    - 作用(意志によらない人の行為又は人以外の行為をいう)……(費用)を要する、鳴る、光る、(風邪を)ひく、作用する、始める、歪める(distort)、など
  - 線動詞
    - 存在(作用の結果をいう)…ある(be)、から成る、属する、存在する、を構成する、など
    - 状態(動作の結果をいう)….住む(live)、滞在する、をもつ、である、を求める(seek)
    - 知覚(広く五感に関する行為をいう)……のようだ(look like, seem)、を置き忘れる(leave A behind)、見える(see)、笑う、臭う

以上からして英語の時制の問題を考える場合、動詞をその意味内容から前葉のように分類するとよいだろう。この分類の利点は次の点に現れる。点動詞の平叙文では現在形はまれで、殆どの場合に現在進行形が使われる。例えば「私は歌を歌う」はI'm singing a song.と訳すのが自然であり、I sing a song. は「私は歌を歌う人である」といった、少々おかしな感じを与える文となってしまう。しかし線動詞ではこの逆である。特に存在又は知覚動詞では現在進行形はまず使わない。線動詞では現在に属する時間で現在形が多用されるのと同じく、過去に属する時間でも主として過去形が使われる。しかも過去はすでに終わった事実という面があるので、点動詞でも過去形が使われることが多い。

次に完了時制とは完了、経験、継続又は結果を表すが、動詞によってその内容が異なる。**完了**(completion)は意思による終了を意味し、動作動詞が対象となる(I'll look around on my own as you have suggested. おっしゃるように自分でも見て回ります)。**経験**(experience)は動作・状態・知覚動詞が対象となる(I have lived in London for five years. 私は5年間ロンドンに住んだことがある)。**継続**(continuation)は知覚動詞及びbe(である)、continue, have などのように、状態動詞のうちの継続の意を含む動詞が対象となる。**結果**(result)は無意志による終了を意味し、作用動詞が対象となる(That seems to have worked. それが良かったらしいのです)。

このように完了時制は現在完了が主体であり、過去完了や未来完了はフランス語などで言う、大過去(le plus-que-parfait)や

前未来(le future antérieur)としての用法が殆どである。つまり過去完了はある過去より以前に起った過去を表し、未来完了はある未来の時点までに終了する未来を表す時制といえる。

・ロンドンに来る前は、私はパリにすんだことがある。

I had lived in Paris before I came to London.

・彼らは来週の今頃は、ローマに着いているでしょう。

They'll have arrived in Rome by this time next week.

時制と関連した注意点を 2, 3 書いて、時制の問題の終りとしたい。

a）現在完了は yesterday や last night, just now などのように**明確に過去を表す副詞**を使うことはできないが、already, just, lately, recently などのように**漠然とした過去を表す副詞**を使うことはできる。

ｂ）時を示す副詞節の中では未来形は現在形に、未来完了形は現在完了形になる。

・畑に水をまくと、穀物は早く成長する。

The corn will grow quickly when we **water** the field.

・学寮を見学したら、聖ジョンまでの道を歩きましょう。

After we'**ve looked** at the college, we'll walk along the road to St. John's.

ｃ）since 節の動詞は過去形で、主節の動詞は現在完了形になるのが原則だが、since 節の行為が継続していることを強調するときは、完了進行形にしてもよい。

・久し振りに休暇をとった。

It has been a long time since I had a holiday.

・私がここに座り続けてから、あなたはすでに 3 杯もの紅

茶を飲みました。 You've already drunken three cups of tea since I've been sitting here.

態(voice)とは、主語と動作の主客関係を示す、動詞の形態をいう。voice という文法用語は英文法では態、日本語文法では相と訳されることがあるが、相は phase の訳とした方が混同がなくて良いだろう。要するに voice は同一内容のことを、違った声で表す概念を言っているにすぎないからである。英語には態は能動態と受動態[=受身]の 2 つしかない。しかし日本語には「自動、他動、受身、可能、使役、謙譲」などがある。「流れる、流す、流される、流せる、流させる」と並べてみるだけでも、その多様性が分る。

受身は動作を表す場合（動作受身）と、状態を表す場合（状態受身）に分けられるが、前者の場合には get[又は become]+過去分詞の形も用いられる。

He got talked into buying junk.（彼はガラクタを買わされた）。尚、get には get A doing（A を～させる）とか、get doing（～し始める)という言い方もあり、be の代りに使われることもあると言える。

受身は自動詞では作れないが、自動詞+前置詞の形で他動詞の意味になる場合には作ることができる。また命令文の受身は let が使われる。Do it at once.→Let it be done at once.

受身形の作れない場合としては、①目的語が特定した人又は物でないとき、②現在完了進行形や未来進行形などのように be が 2 つ出てくるとき、③間接目的語(主に人)を主語にできないとき、などがある。例えば順番に、A book is had by me.　A

letter will be being written.　He was written a letter. などはダメな例である。しかし②と関連するが、I'm being followed.(尾行されているのです)とか、I do believe that it's still being used.は、be 動詞が 2 つだが受身形が可能である。

法(mood)とは、文の内容に対する話し手の、態度を示す動詞の変化をいう。これには事実を事実として述べる直接法(indicative mood)、事実を命令として述べる命令法(imperative mood)、事実を条件として述べる条件法(conditional mood)そして事実を感情・願望・疑念として述べる接続法(subjunctive mood)の **4 種**がある。

英文法では条件法と接続法を合せて、仮定法と呼ぶのが通例だが、両者は必ずしも同じではない。そこで本書ではフランス語などと同じく、2 つに分けて扱うことにする。また不定法(infinitive mood)と分詞法(participial mood)という用語もあるがこれらは法の問題ではなく、準動詞形(verbal)の問題として扱えばよい。

本款(ほんかん)では条件法と接続法について少し検討しよう。英語の条件法は節を使い、かつ使われる動詞が定型化されているので割と簡単である。すなわち条件法現在、過去、過去完了の 3 種を覚えればそれでよい。

・If the boy **be** honest, I will employ him.
　(その少年が正直なら、雇うことにします)。
・If I **were** white, I would live in London.
　(もし私が白人なら、ロンドンに住むでしょう)。
・If it **had not been** for your help, I should have failed.

(あなたの援助がなかったなら、私は失敗していたでしょう)。

ただ上記 3 つの混合型もあるし、条件節に「～したいなら」の意の would や、「万が一～」の意の should や were to をいれた型もある。

・If he hadn't died, he would be twenty now.
(もし彼が死んでいなかったなら、今は 20 才でしょう)。

・If you would go on like this, I may ask you to leave.
(もしあなたがこんなやり方を続けたいなら、会社を辞めて下さい)。

・If it were to rain, I shall start.
(万が一雨が降っても、私は出発します)。

条件法は文法的には if を使った副詞節であるが、使われる動詞が条件法という形で定式化されている点に於て、次のような「単なる条件節」と区別される。

・I shouldn't worry if he has forgotten you. (たとえ彼があなたを忘れてしまったとしても、私は心配しません)。

・If you will wait a moment, I'll fetch a chair.
(少し待って下さるなら、椅子を持ってきましょう)。

・If this blade will still be in use at the end of this month, it will have lasted for two months. (今月末までこの刃がもったなら、2 ヵ月もったことになる)。

接続法とは、主節に於て感情・願望・疑念を述べる場合に、従属節の動詞が接続法現在、過去または大過去に変化することをいう。接続法現在は原形動詞かまたは should+原形動詞、接続法過去は be 動詞が常に were となる他は、直接法過去と同じ

であり、また接続法大過去は直接法完了形と同じである。以下に於て接続法が使われる場合を分類しておこう。

a)目的格の名詞節がくる場合：

We insisted that the derivative **be** continuous.

(導関数が連続であることに我々は固執する)

How I wish I **could work** there again.

(もう一度あそこで働けたたらな)

I'd rather he **went.**（むしろ彼は行ってしまってもらいたい)。

ｂ）非人称構文の場合：

次のような構文では、ある事をすべきであるのにまだしていないという意味が含まれ、常に過去形すなわち接続法過去が使われる。

It is time you **went** to bed.（もう寝る時間です）

It's high time we **started.**（我々はもう出発しても良い時だ）

Would to God you **were** a better husband.

（神に願って、あなたがもう少し良い夫であったなら)。

ｃ）各種の接続詞節の場合：

これらの場合、時制、人称に関係なく原形のみが使われる。

He yielded Joanna's request that he **pay** attention to the result.（結果に注意を払うようにという、ジョアナの要求を彼は受け入れた)。

This is not true criticism, whether it **be** directed at a work of art, a person or a speech.　（芸術作品、人または弁論に向けられているにせよ、これは本当の批評ではない)。

尚、主節が省略されて従属節のみが残っている、次のような文章の動詞も接続法である。

God **save** our gracious queen!

（神よ、わが女王陛下をお守り下さい）

God **help** me! （神よ、私をお助け下さい）

以上で動詞の 5 つの問題（活用・種類・時制・態・法）は終りとして、次には動詞関連の事項をまとめておこう。まず**助動詞**とは、動詞に密接に結びついて動詞を助ける語をいい、can, dare, may, must, need, ought to, used to, shall, will, be, do, have,had better, had best, would rather の **15 種**がある。助動詞(auxiliary verb)は変則動詞または特別定形動詞(anomalous or special finites)とも呼ばれ、更に can, may, must, shall, will など、話者の心的態度を示すものは法助動詞(modal auxiliary)とも呼ばれる。

助動詞では次のようなことが問題となる。

a) can と may :

Can I ~ ? と May I ~ ? の使い方は、英米で心象が違っているので注意がいる。英語では May I ~ ? は非常に丁寧な言い方と考えられているが、米語では普通の丁寧さである。例えば、「何を差上げましょうか」という慣用表現は、英語では Can I help you? だけれども、米語では May I help you? である。

Can I help you ? Yes, I hope so.

Have you got this in size 8 ?

(何を差上げましょうか? ええ、これと同じで大きさ 8 のはありますか)。

またイギリス英語では may は丁寧な依頼にも使う。

例:「お医者さん、遺体を移動して下さい」は、“Doctor, you may

remove the body.”　という。

ｂ)can と be able to：

can は相手方の能力を問うので、場合によっては失礼になる。例えば「あなたは日本語が話せますか?」は Do you speak Japanese? と訳すべきであり、Can you speak Japanese? では相手方への心象が良くない。また「ここ 2，3 日眠れない」は I’m not able to sleep these days. または I can’t get to sleep these days. がよく、I can’t sleep these days.では、能力として眠れないという意味の文になってしまう。

要するに一時的又は偶発的に「できる又はできない」の意のときは、be able to の形を使うということである。　ただ can は許可(permission)・可能(possibility)・能力(ability)・推定(presumption)・慣用表現の 5 つがあり、be able to より使用範囲は広い。この他にまぎらわしい表現として **ability** は能力・手腕・力量、**capacity** は素質・適応性、**be capable of ~ ing** は「～する素質がある」、be to は予定・命令・可能を表す語ということになる。

・With his to go on, I was able to project my own vision.
(残された彼のをもとにして、私自身の見解を描き出せました)

・We were able to [managed to] bring him to by artificial respiration.
(我々は人口呼吸によって、彼の息を吹返すことができた)

・We could all smell his hangover.(匂いで二日酔いと分った)

ｃ) must と have to：

must は話者からみた必要を表し、have to は外部事情による必要を表す。例えば居てもらいたくないから「もう出かけな

さい」は You must go now、汽車かバスの時間が来たから「もう出かけなさい」は You have to go now である。従って使い分けには注意する必要がある。同じようなことは should と ought to にも言え、前者は話者からみた義務、後者は外部事情による義務を表す。

尚、He must go の否定は He mustn't go または He needn't go だが、He has to go または He needs to go の否定は He isn't to go である。

d) shall, will と be going to :

まず shall と will については will が幅広く使われる傾向にあるので、単純・意思未来を問わず will を使えば、大体の場合に間違いはない。従って特殊な意味で使われる shall と will の用法を、正確に覚えておけばよい。しかもこれは種類も数も限られている。尚、'll は普通は will の略だが、shall の短縮形としても使われるので注意のこと。

次に be going to 形と shall-will 形の使い分けについてだが、これには厳格な規則はない。なぜなら文法的にはどちらでも良いからである。しかし場合によっては、意味が違って感じられることがある。例えば I will buy it は「(その場で初めて気づいて)私はそれを買います」の意だが、I'm going to buy it は「(前もって予定していて)私はそれを買います」の意である。要するに点動詞、線動詞を問わず shall-will 形は推定を表す場合、意思未来、何らかの拘束があるときに使われると言える。そしてこれら 3 つの場合以外は be going to, be ~ing, be about to, be to などが使われると言える。

e) would と used to :

would は過去の不規則的習慣(たびたび～したものだ)を表すが、used to は過去の規則的習慣(よく～したものだ)を表す。また be used to ~ ing や be accustomed to ~ ing は「～するのに慣れている」の意を表し、ここでの used は形容詞である。加えて“You'd better do ~” は、警告の意があるので使用には注意した方がよい。

尚、to の付いた助動詞で本動詞を省く場合、to は残すのが普通だけれども(He doesn't smoke as much as he used to. 彼は昔ほどは煙草を吸わない)、 付加疑問文とか So does A の形では省くのが普通である。

He ought to have it cut, oughtn't he?

He has to listen more carefully. So have you.

本節の最後に準動詞形(verbal)を扱っておこう。**準動詞形**とは不定詞、分詞、動名詞をいい、動詞の働きをすると同時に名詞、形容詞、副詞などの性質を兼ね備えている。まず不定詞から始めよう。普通の述語動詞は、主語の人称・数・時制・法・態によって形の制限をうけるので定形動詞(finite verb)と呼ばれるが、不定詞ではこれらが不定(infinite)なので不定詞(Infinitive)と呼ばれる。また不定詞の to は前置詞ではなく、単なる記号にすぎないので 8 品詞のどれにも入らない例外品詞である。

・我々の意向はすぐに出発することだ。

Our intention is to start at once.

・彼は英語とロシア語は言うまでもなく、スペイン語も話せる。

He can speak Spanish, to say nothing [not to speak]

of English and Russian.

・列車は正午までに着く予定であった。

The trains were scheduled to have arrived by noon.

(未完の過去と呼ばれる不定詞の用法)

次に**分詞**とは動詞と形容詞の役目を兼ねた語をいい、これには現在分詞(present participle)と過去分詞(past participle)の 2 つがある。

・支配人代理は断固とした人です。

The acting manager is a determined person.

・彼女は非常に扱いにくい。She's very trying.

・今日(こんにち)の日本は英語の指導を専門とする、メッチャ沢山の民間学校がある。 Japan today has a plethora of private schools specializing in the teaching of English.

現在分詞が接続詞と動詞の働きを兼ねて副詞句を作り、文を短縮した構文を**分詞構文**(participial construction)と呼んでいる。次のようなものがこれである。

・Living next door, I seldom see him.

(隣に住んでいるが、私は彼にめったに会わない)。

・Living next door, I often see him.

(隣に住んでいるので、私は彼によく合う)。

・Once (being) seen, it can never be forgotten.

(一度見れば決してそれは忘れられない)。

動名詞(gerund)とは、ing の語尾を持ち動詞と名詞の働きを兼ねた語のことである。 Officials, regardless government

officials or local do working for working's sake calmly, coolly and definitely. (公務員達は国家、地方公務員を問わず、仕事のための仕事を平然公然毅然(きぜん)とやっている)。 Flying machine (飛行機)、dancing master(踊りの先生)、shooting affair(発砲事件)の形は動名詞だが、 flying bird(飛んでいる鳥)、dancing girl(踊っている少女)、shooting star(流れ星)は現在分詞である。同様に以下の文に於ても前者は動名詞、後者は現在分詞である!!

{ In wading the river, he stumbled and fell.
{ While wading the river, he stumbled and fell.

(川を渡っているとき、彼は躓(つまづ)いて転んだ)。

{ On leaving school, he went to America.
{ After leaving school, he went to America.

(学校を出ると、彼はアメリカに行った)。

第 3 文型を作る動詞は、直接目的語として動名詞を取ったり不定詞を取ったりすることができ、以下のような場合分けが必要となる。

a)まずどちらを取っても意味などが変わらない動詞としては、次のようなものがある。begin, be surprised, continue, fail, forbear など。

・John dreaded going [to go] to the dentist.

・It is worth (your) while reading[to read] this book.

b) どちらを取るかによって意味が変わる場合には、動名詞は「～するのは…です」のように一般的意味又は過去の意味を、不定詞は「～することそれは…です」のように個々の特別的意味又は未来の意味

をもつのが原則である。

be afraid of doing(～でないかと心配だ)、be afraid to do (怖くて～できない)、get doing(～し始める)、get to do (～するようになる)、mean doing(を意味する)、mean to do (～するつもりである)、stop doing(～するのを止める)、stop to do(～するために止まる。但し、これは自動詞)。

・I try counting sheep. (私は羊の数を数えようとしている)

・I try to count sheep.(私は羊の数を数えようとするが難しい)

・The youngest boy, a tyro tyrant, stopped taunting Chris. (最年少の新人暴君はクリスをからかうのを止めた)

c) 直接目的語として動名詞だけをとる動詞としては、anticipate, appreciate, can't help, deny, detest, keep,give up, shun, warrant など沢山ある。

・He used circumlocution to avoid answering the embarrassing questions. (彼は厄介な質問に答えるのを避けるため回りくどい表現を使った)

・Fancy meeting you here. (ここであなたに会うなんて)

d) 直接目的語として不定詞だけをとる動詞としては、care, claim, decide, expect, hope, wish などがある。

・It promises [seems] to be fine this afternoon. (午後には晴れてきそうだ)。

・We practice what we claim to stand for. (我々は自分達が指示を主張していることを実行する)。

e) 最後に「どうして英語って、こうややこしいのだろう」と嘆きたくなる項目をまとめておこう。それは前にも書いたように、to は 8 品詞のどれにも入らない不定詞を表すための記号として

の用法と、本来の前置詞としての用法とがあり、次のような動詞では to は前置詞なので、後には不定詞ではなく動名詞が来るというものだ。abandon oneself to, amount to, be looking forward to, devote A to, get around to, when it comes to, など。

・I came near to forgetting it.

(もう少しで忘れるところだった)。

・He's opposed to paying a state sales tax.

(彼は州の売上税を払うのに反対である)。

・Misfortune reduces him to begging.

(不幸は彼に物乞いをさせるに至った)。

・I'm looking forward to seeing you.

(お会いするのを楽しみにしています)。

・He indulges himself to playing Japanese chess.

(彼は将棋にふけっている)。

3－4　接続詞・前置詞

接続詞(conjunction)とは、文または文の部分を結びつける語をいい、語と語、句と句、節と節または文と文とを結びつける単語のことである。接続詞はその形の上から分類すると although, and, so などの単純接続詞、as if, even if, seeing that などの熟語接続詞、at once ~ and..., scarcely ~ when...などの相関接続詞がある。相関接続詞では一方は副詞で、他方は接続詞であることが多い。

・You can make excursions, **either** on your own **or** by conducted tour.
(ご自分だけでも、または案内人付きででも旅行できます)。

接続詞は用途のうえから分類すると、等位と従位接続詞になる。**等位接続詞**(coordinate conjunction)とは、and, because, by the way, yet, not only ~ but also などのように対等の関係にある語、節又は文を結合する接続詞をいう。

・I missed the good program, **because** I didn't set the timer on the video. (ビデオのタイマーを入れ忘れたので、良い番組を撮りそこねた)。

・It'll rain, **for** the barometer is falling.
(晴雨計が下っているので雨でしょう)。

従位接続詞(subordinate conjunction)とは、節を導いて主文に従属させる接続詞をいい、等位接続詞以外のものがこれに当る。尚、関係代名詞や関係副詞も文の中で節を導くから、この意味で接続詞の働きをもっている。

・**Indeed** he has a foul tongue, **but** he's very kind at bottom.

(なるほど彼は口は悪いが、根はとても親切だ)。

次に**前置詞**(prepositoon)とは、主に名詞又は代名詞と共に使われて、他の語との関係を示す語をいう。 前置詞はその形により単純形(about, above, across など)、結合形(behind, beneath, into, upon, without など)、並置形(at about, from among, since before, till after, from under など)、派生形(concerning, during, notwithstanding など)、そして成句形(according to, by means of など)に分けられる。また前置詞は目的語が疑問詞のとき(What are you looking for?)、不定詞のとき(A preposition is a bad word to end a sentence with.) などには、目的語の後ろの方に置かれるので**後置詞**にもなっている!?

前置詞は日本語の助詞(こちらは常に後置詞と言える)と同じく、その使用法がかなり厄介である。「彼が日本人だ」と「彼は日本人だ」のように、どちらを使っても通常は誤りとはされない場合と、「彼に日本人だ」のように通常は誤りとされる場合があるように、前置詞も使い分けが大切だ。 一般論として、個々の前置詞のもつ意味から使用される前置詞が決定される場合と、形容詞又は動詞から習慣的に使用される前置詞が決定される場合(be capable of, deter from, 等々)の 2 つに注意する必要があると言える。言語を耳から覚えれば、前置詞の使い分けも自然と身につくだろうが、それができない本書ではいくつかの例を挙げて終りとしよう。

・A pin is sticking out **of** her blouse.

(留針が彼女のブラウスから突き出ている)

・He was beside himself **with** joy.(彼は喜びで我を忘れていた)。

・I ordered a book **from** the bookstore.

(私は書店に本を注文した)。

・I left the message **with** the porter.

(私は赤帽に伝言を残した)。

・I'll go **on** a bus[**in** a taxi].(私はバス[タクシー]で出かけます)。(乗合交通のときは on を、個人的乗り物のときは in を使う。また a の代りに the でも良いし、by bus [by train]という言い方もある)。

・You look good **in** those pants.

(そのズボンは良く似合います)

・This watch [hat] looks good **on** you.

(その時計[帽子]は良く似合います)

(洋品などは人を主語にし、時計や帽子などの小間物(こまもの)はそれらを主語にする)

・Venison is meat **from** a deer. These houses are made **of** wood.(原料が分りにくいときは from, 原料が分りやすいときは of を使う。)

・I'm good **at** physics.(物理が得意です)

He's poor **in** health.(健康にすぐれない)

(行為・学問などは at を、体質などは in を使う)

・I made an appointment **with** her **at** 6.

(私は 6 時に彼女と約束をした)

・I made an appointment **with** her **for** 6.

(私は 6 時に会う約束を彼女とした)

・Beasts sleep **by** day and men **by** night.

(獣は昼眠り、人は夜眠る)

・He walked **about** the town.(彼は町を歩きまわった)

The moon goes **round** the earth once every 28 days.

(月は 28 日で地球を一周する)。

(about は漠然とした周囲、around は周囲を取り巻く状態、round は周囲を回る運動を表す)。

・Christmas is just **around** the corner.

(クリスマスはすぐそこまで来ています)

・They live in the house **over** the way.

(彼らは道の向うに住んでいます)

・They work **like so many** ants.

(彼らはあたかも蟻のように働く)

・Life is often compared **to** a voyage.

(人生はしばしば航海に例えられる)

・Nothing can be compared **with** this.

(何もこれと比較できるものはない)

・She was sitting on a bench **with** her shoulders quivering.

(彼女は肩を震わせながらベンチに座っていた)

(with+(代)名詞+分詞、形容詞などの構文で状態を表す)

・The vector A coincides **to within** numerical factors with the vector B. (ベクトル A は定数係数の範囲で、ベクトル B に一致する)。

・The manifold M corresponds to the group G **up to** isomorphism. (多様体 M は同型写像の範囲で群 G に対応する)。

動詞句(verbal phrase)とは、動詞に前置詞や副詞という、不変化詞が付加されてできた句をいう。これは慣用句として本来

の動詞の意味からは想像しづらい意味を表す場合が多いのみならず、使われている動詞が自動詞なのか他動詞なのか、また付加されている語が前置詞なのか副詞なのかで文法的な解析が複雑となり、英語を難しくさせている大きな原因となっている。

a) まず自動詞+前置詞の場合には一種の他動詞のように扱われ、場合によっては受身にもできることは前にも述べた。この範疇に入る動詞としては abandon in [with], account for, belong to, consist in [of], result in [from]などがある。

尚、以下の 2 つの例は受身にはならない例である。

Where did you come **by** this vase?

(どこでこの花瓶手に入れたの?)

I could pass **for** a Japanese on the phone.

(私は電話でなら日本人で通せます)

b) 次に自動詞+副詞の場合には、S+V の文型になるのが通例である。この例としては break out, come about, fade away,look in, show up などがある。

This will come up in the exam. (これ試験に出るよ)

His father has passed on [away]. (彼の父は亡くなった)

I drank so much whiskey that I passed out.

(ウイスキーを飲みすぎたので気絶した)

c) about, above, below, down, in, off, on, out, over, under などのように、前置詞にも副詞にも使われる語が自動詞と結びついた場合には、上記 2 つのいずれかを判定する必要がある。

自動詞+前置詞の例	自動詞+副詞の例
I climbed / up the mountain.	I climbed up.
He got / across the river.	He got across safely.

She looked / out the window.　　Look out! (危ない!)

She ran / down the hill.　　The battery ran down.
（バッテリーがあがった）

The Egyptians draw / on the history of Pharaohs.
(エジプト人はフェラオの歴史にたよっている)

Night is drawing on.
（夜が次第に近づいてくる）.

次のような子供のなぞなぞ(children's riddle)も、英語らしいと言える。

What can go up a chimney down, but can't go down it up?
—An umbrella. (煙突の上で閉められるが、下で開けられないものは何だ?—傘)

d) 今度は動詞が自動詞にも他動詞にもなる場合を検討しよう。この場合には①自動詞+前置詞、②自動詞+副詞(I'll turn in /early tonight.　The ship put out / from the harbor)、③他動詞+目的語+前置詞(He has a hat / on his head)、④他動詞+目的語+副詞(He has a hat on)、⑤他動詞+副詞+目的語、のいずれなのかを識別する必要がある。以下の最初の 2 つは④の例、残りの 3 つは⑤の例である。

・The teacher tries to get a lesson across to students.
(教師は生徒に授業を分ってもらおうとする)

・Her indifference drew him on all the more.
(彼女の無関心はますます彼を惹きつけた)

・I shall put up these partitions tomorrow.
（明日この区画地を競売に出します)

・Difficult problems never put out him.

（困難な問題は決して彼を慌てさせない）

・He’s always running down his wife.

(彼はいつも妻を貶(けな)している)

尚、close in on (に詰め寄る)、run short of (をきらす)、run out of (を使い果たす)、stick out of (から突き出る)などの表現は、動詞+副詞+前置詞が密接に結びついた慣用句であり、読んだり話したりするときには前置詞の前で一呼吸入れるとよい。

The scene cut back / on his younger days.

(場面は彼の若い頃の日々に戻った)

Investigators are zeroing in / on one scenario.

(捜査官らは 1 つの台本に狙いを定めつつある)

e) 動詞が他動詞である場合の目的語の位置についても、以下の 3 つの場合がある。

①まずこの例は極めて少ないが、常に他動詞+目的語+副詞の順になるものとしては get A up(A を起す。I got children up. = I got them up.)とか、give A up(A を引渡す。I gave the culprit up to the police. = I gave him up to the police.)、などがある。

②次にこの例も少ないが、常に他動詞+副詞+目的語の順になるものとしては hit on A, pick on A, set on A, (He’ always picking on me .彼はいつも僕をいじめるよ)、などがある。

③多くの場合は上記 2 つのどちらの語順でもよい動詞であり、hand in A = hand A in, pick up A = pick A up など多数の例がある。但しこの場合でも目的語が人称又は指示代名詞の場合には、必ず他動詞+目的語代名詞+副詞の順になる。

・我々は実際にはこの考えを実行できない。

We cannot carry out this idea in practice.

= We cannot carry this out in practice.

・ボタンをかけなさい。 Do up your buttons. = Do them up.

・所有者は警察を買収しようとした。

The owner tried to buy off the police.

= The owner tried to buy them off.

f) 最後に動詞句から派生した名詞等も色々な意味で使われ、英語の難しさを助長している。breakdown(c.破損、衰弱、内訳) breakout(c.脱獄) breakthrough(c.突破、大発見) breakup(c.崩壊、絶交) outbreak（c.勃発） buildup（c.増強） cleanup（c.浄化） drawback（c.ひけめ） getup（c.身なり、装丁） hangout（c.たまり場） kickback(c.わいろ) letup(c.u.停止、低減) onset(c.端緒) payoff(u.報酬) put-on(c.見せかけ) setback(c.逆戻り) setup(c.情勢,仕組) shakedown(c.ゆすり) shutdown(c.一時閉鎖) turnover(c.就労率)

尚、イメージダウン、ライトアップ、リストアップなどのように日本人が勝手に作ったものも沢山あり、こうした単語は通訳や翻訳をするときに大変に迷惑なものなので、是非とも止めてもらいたいものだ。

3－5 間投詞

間投詞とは、不意の発言として使われる語、句または音の一組をいう(By an interjection is meant word, phrase or set of sounds used as a sudden remark.)。この定義からも分るように感嘆だけに限らないので、感嘆詞とか感動詞という用語より間投詞という用語で本書は統一したい。

間投詞は文中では独立の要素となり、通常は他の部分と文法的関係をもたないが、他の語句に多少の関係を持つこともある。

Hurray [Hurrah] for the Angels! (エンジェルス、万歳!)

Oh ,if I had only known her.(ああ、彼女を知ってさえいたのだったら)

間投詞は怒り、驚き、ためらい、同情、喜びなどを表す語であり、①全く間投詞としてのみ使われる語と、②名詞や名詞句、動詞句などが間投詞としても使われたり、③擬音語や擬態語の一部が間投詞として使われることもある。

第一類型の語としては Ah（あー）, Ave(ようこそ)、Oh, O, Tut（チェ)、Hey, Hi, Ugh(うーふ)、Hash(シー)、Brrr(ブルー)、Talah（ジャジャーン)、Phew(ヒュー)、Whew（フュー)、huh（アーン), hem（フン)、Eeek（いたい）, Yeek（やばい）, Psst（ちょっと）など沢山ある。

少し例文を挙げよう。

・すごい、やった!　That'll be swell!　**Crikey!**!

・何んと! 洗濯したらセーターが縮んで[伸びて]しまった。

Blimey! My sweater shrank [stretched] after the wash.

・エー! 56 億 7000 万年ですって!

Gee! Five billion six hundred seventy million years!

・ワー！[ゲー!] ネバネバしたものさわるの大嫌いだ。

Ugh [**Yuck**]! How I hate touching sticky things!

・あっち!　指をやけどしそうだった。

Ouch! I nearly burnt my finger.

・しまった! 皿を落としてしまった。

Oops! I dropped a dish.

次に第二類型の語としては、以下のような色々なものがある。

・**Boy**！　I feel sick too. (嗚呼、僕も気持悪くなったよ)

・**My**! (まあ!驚いた) **You don't say**! (まさか!)　**Say**! (ちょっと!)

・You know something.(あのね、ちょっと)　I know! (そうだ!)

・**Great**!　That'll take a load off my mind.

(よかった。これで肩の荷が降りるでしょう)

・Well I never! Poor Nathalie.　Poor me, you mean!

(まあ! ナタリー可哀想。可哀想なのはこっちだよ)

・What a pity! (嗚呼、残念だ!)　What a shame! (ひどい事だ!)

・Cheer up!(しっかり!)　Keep on pushing! (頑張れ!)

Good luck! (頑張ってね!)

・Well, **call it a day**.（お疲れさま。仕事をみんなで終るとき）

・Have a good journey home.(お疲れさま。仕事を終えて帰る人に)

・**No kidding!**　I can see it in my mind's eye.

（冗談じゃない! あの事が目に浮かんでくるな）

最後に第三類型の間投詞には次のようなものがある。まず**擬音語**とは実際に耳に入ってくる音の感じを真似た語をいい(Onomatopoeia is words which imitate real sound caught by

ears)、**擬態語**とは事物の状態や身振りの感じを表す語をいう(Mimesis is words which represent the state of things or the manner of gestures)。

前者の例としては ahchoo(ハックション), bash(バシン), blam(ウヒョー), chop(バシッ), ding-dong(ゴーンゴーン),pitter-patter(パタパタ), yum-yum(ムシャムシャ)などがあり、後者の例としては abracadabra(ちんぷんかんぷん),Hey presto(あら不思議), peekaboo(いない、いないバー)などがある。これらはそのままで間投詞としても使われる。　尚、擬音語は擬声語ともいうが、声には限らないので本書では擬音語で統一する。西洋語では日本語に比べると擬音語や擬態語の例は少なく、ピシャリとかチクチクなどと言った多くの表現は以下の例文の如く、いわば広義の擬音語または擬態語によって表現されると言える。

擬音語の例文

あまりの良さに彼は思わずウーと呻(うめ)いた。

He groaned unconsciously with supreme pleasure.

窓ガラスがガシャンと割れた。

The window pane [glass] **smashed**.

電算機はカチリと音を立てブーブーといい始めた。

The computer **clicked** and **whirred**.

クチャクチャと音を立てて食べるのは行儀悪いです。

It's bad manners to **slurp** your meal.

舌鼓(したづつみ)を打って食事をするのは良くない。

It's not good to take a meal with a smack of the lips.

ゴロゴロというのは雷かな、それとも花火かな?

Is this **roll** thunder or fireworks?
雨がザーザー[シトシト]と降っている。
It' pouring [drizzling].
油がフライパンでジュージューいっている。
Oil is **sizzling** in the frying pan.
彼は荷物をドスンと床に置いた。
He dropped the luggage on the floor with a **thud**.
彼女はドボンと風呂に入った。
She plunged into the bathtub with a **plop**.
誰かが扉をドンドンと叩いている。
Someone is **pounding** on the door.
扉をバタンと閉めないように。 Don't **slam** the door.
子供は煎餅(せんべい)をバリバリとかじった。
The child **crunched** rice crackers.
ビリー！ガチャン!どうしよう?
Rip! **Crash**! What am I going to do?
生徒達は教室でベラベラと喋っていた。
Pupils were talking "**Yakkity-yak**" in the classroom.
雨がポタリポタリと天井からしたたり落ちた。
Rainwater was dripping from the ceiling.
彼はギターをポロンポロンと弾き始めた。
He began to **strum** on a guitar.
リーンリーンと電話が鳴っている。
"**Ding! Ding!**", is ringing the telephone.
どの動物が嘶(いなな)きますか? 馬です。馬はヒヒーンと嘶きます。
Which animals neigh? Horses do. Horses whinny.

雄鶏(おんどり)はコケコッコウと鳴き、雌鶏(めんどり)はコッコッコッと鳴く。

Cocks crow [sing cock-a-doodle-doo]. Hens cluck.

ひよこはピヨピヨと鳴き、豚はブーブーと啼く。

The chick cheeps, and the pig oinks[grunts].

鵙(もず)[百舌]がキーキーと鳴く。Shrieks shrike.

擬態語の例文

彼らは喧嘩(けんか)をしたくてウズウズしている。

They are spoiling for a fight.

天ぷらがカラッと揚った。Tempuras were fried to crispness.

キラキラする繊維の服は派手好みに見られるよ。

You look showy with clothes of **glittering** fiber.

傷口がシクシクと痛む。

I have a dull pain in the wound.

よくもまあシャアシャアとしていられるね!

What a surprising nonchalance you are showing!

耳鳴りがジンジンとする。

I have a ringing in my ear. My ear is ringing.

傷口がズキズキと痛む。すりむいた傷がまだヒリヒリする。

My wound **throbs** with pain.　The scratch still smarts.

彼はいつもソワソワしている。He's always fidgety.

このズボンは膝がダブダブだ。

These trousers are **baggy** at the knees.

彼らの人生はダンダンつまらなくなってきた。

Their life become less and less interesting.

彼女とデレデレするな。Don't dally [flirt] with her.

何事にもデーンと構えよう。

Take a composed attitude toward everything.

彼は犬に短剣をブスリと刺した。

He thrust a dagger **home** into the dog.

ドキ！ バレたか？　**Stab**! He found out?

このウナギはヌルヌルして掴めない。

This eel is too slippery [slimy] to hold.

軟膏を塗ったらなんかベトベトして嫌だな。

The application of salve makes me feel somewhat sticky.

彼は蚊に刺された所をボリボリ、コリコリと掻いた。

He scratched and scratched the mosquito bite.

あのニヤニヤおじさんは呪われ、ダメになった。

The foppish uncle was cursed and went phut.

家中をピカピカにするよ。

I'll make the whole house **spic and span**.

ナヨナヨしい事は言うな。Don't talk slenderly.

執行人はよた者の胸に刃物をブスリと刺した。

The executioner stabbed the hooligan into his breast.

彼はピクピク動くエビを平気で食べます。He makes no bones about eating raw shrimps twitching[wriggling].

糸はピンと張るまで伸しなさい。

Stretch the thread **tight**[**taut**].

彼女の料理の腕はマアマアということでした。

She was only a fair cook.

彼は一瞬ムッとしたがジッと我慢した。

He was offended a moment, but put up with the offence.

信解品第四　語彙

4－1　慣用句・熟語・成句

上記 3 種はいわゆる類義語と言えるが、本書では次のように定義する。**慣用句**(usage)とは前置詞句や副詞句、形容詞句の形をし、全体として特別な意味を持つ表現をいい、**熟語**(idiom)とは動詞句を主体とし、全体として特別な意味をもつ複合語をいう。**成句**(set phrase)とは主に名詞句やそれ自体として 1 つの文となった形の慣用的表現をいい、これら 3 つを含めた表現の方法を**言い回し**(locution)と呼ぶことにする。いずれも英語には嫌というほど沢山あるので、特に分りにくいものだけを少しずつだけ集めておこう。

慣用句の例文

We won't get an **across-the-board** pay rise.

(全員一律の賃上げは無理だろう)

Sleep comes lightly, **if at all**.

（仮に眠れたとしても、軽い眠りでしかない）

They'**re at loggerheads** among them.

(彼らは仲違いをしている)

What he did is really **below the belt**.

(彼のしたことは全く卑怯である)

She posed **on all fours** [on her hands and knees].

(彼女は四つん這いになった)

Cheap labor becomes a good thing, **on a par with** cheap oil.

（安い労働力は安い石油と同様に、良いものということになる）

I'm not really **feel**ing **on the ball**.
(まだ完全には目が覚めた気がしない)

Jim was **called on the carpet** by his boss.
(ジムは上司に油をしぼられた)

Shepard was a hero **on the order of** Lindbergh.
(シェパードはリンドバーグに匹敵する英雄であった)

Shuttle technology, once **state-of-the art**, is outdated today.
(かっては最先端であった宇宙往復船の技術も、今では時代遅れである)

We're backing his policy **to the hilt.**
(我々は彼の政策をトコトン支援している)

He's somewhat **under the weather.**
(彼は少し体を壊している)

They are **wet behind the ears**.（彼らは未熟である）

I passed the exam **with flying colors**.
（私は試験に大成功した）

Veronica went away **without so much as** saying good-bye.
（ベロニカはサヨナラさえ言わないで去って行った）

熟語の例文

The company didn't **abide by** the court decision.
（その会社は裁判所の決定に従わなかった）

Pork doesn't **agree with** me. （豚肉は自分に合わない）

He **availed himself of** the opportunity.
（彼は好機を利用する）

He never **backs down**. （彼は決して主張を撤回しない）

They’**re bent on** winning the league.
（彼らはきっと優勝すると意気込んでいる）
I’ve been **on the go** all day.（私は一日中忙しく働いている）
What’s up?（どうしたの?）　What is she up to?（彼女何するつもり?）　What have you been up to?(あなた何してたの?)
What happened?（何が起こったの？）
I plucked up courage and **broke the ice**.
（私は勇気を奮い起して会話の糸口をつけた）
Another one **bites the dust**.（また一人、戦いに負けて死ぬ）
Veronica’s inept attempts **cut no ice with** me.
（ベロニカの下手な企ては私には効果がない）

I can’t **get the hang of** typing.
（タイプを打つコツがつかめない）
You can’t **get away with** it.（ただで済む問題じゃない）
He **got** [put] **his back up**.（彼は非常に怒った）
I’m **get**ting **over** you, but can’t believe it’s true.
（あなたを忘れようとしているけれど、それができるなんて信じられない）
If you don’t let the cop **get your goat**, you might **get off with** a warning.（巡査を怒らせなければ、警告だけで済むだろうよ）
I’m **giving myself up to** this exam.
（私はこの試験に専念している）
Establishments **give out** their rates.
（宿泊施設は料金を公開している）
The government **went back on** the pledge.

（政府は公約を破った）

Chess is a good game **to go in for** [to practice for pleasure]（チェスは楽しみにするには良い遊びです）

The last thing he needs is to be confused about which warning signal has **gone off**.（彼にとって一番大事なことはどの警報が鳴ったのかを間違わないことです）

She **goes out of** her way to show off.

（彼女はわざわざ自分をみせびらかす）

They'll **go over** the enemy.（彼らは敵側に回るだろう）

Some people have **gone so far as to** say Japanese live in rabbit hutches.（日本人はウサギ小屋に住んでいるという人までいる）

He has **been around**.　（彼は海千山千の男だ）

I hit **the bull's eye** and was bowled over.

（的が的中しびっくり仰天した）

I came up trumps and **hit the jackpot**.

（運がついてきて大穴を当てた）

The police **held back** the crowd.（警察は群衆を阻止した）

I **got held up**.（遅れてしまった）

They **held off** a jihad.（彼らは侵略者（ジハード）を寄せつけなかった）

Keep me **posted** on her.（彼女のことはいつも知らせておいてね）

It's a pitch to spur them to **kick off** the program.

（彼らに番組を始めさせるように促す絶好機です）

He **knows** [learns] **the rope**.（彼は内部事情に詳しい）

This knife **lends itself to** many uses.

（この刃物は色々な使用に適している）

I asked the tailor to **let out** my suit.

（洋服店に背広を仕立て直すよう頼んだ）

Why don't you **make up with** her?

（どうして彼女と仲直りしないの）

You must **make up for** lost time.

（なくした時間の埋合せをしなくては）

I just **made it to** class.（丁度学校に間に合った）

I'm glad we could **make it**. （うまく出来てよかった）

The prime minister finally **made it to** the stricken area.

（首相はようやく被災地に出かけて行った）

The news sent **on the air** [=broadcast] yesterday.

（昨日ニューズは放送された）

Put your foot down **once** (and) **for all**.

（断固たる態度を取りなさい）

I'll not **put up with** your insolence.

（君の横柄さが我慢できない）

They **put off** the wedding. （彼らは結婚式を延期した）

I **put up** cash for a new system.

（新しい組織のため資金を出した）

He **set off** [=shoot up] fireworks（彼は花火を打ち上げた）

I **set out** in taxi. （私はタクシーで出発した）

The government school **was set up** in 1855.

（官立学校が 1855 年に設立された）

A week of mountain air **set us up**.
（一週間の山の空気は私たちを元気にしてくれた）
I was nicely **taken in**. （まんまと騙された）
Take me on. (僕の相手になってくれ)
The festival **took place** , and Bill **took the place of** the mayor.
(祭りが行われ、ビルは市長の代役をした)
We **took part in** the meeting and **took the part of** our workers.
（我々は会合に出席し、労働者の味方をした）
We'll **take to** the bush. （我々は草原戦に訴える）
You **told on** me, didn't you? （私のことを告げ口したね）
The teacher **told me off** yesterday.
（教師は昨日、私に課題を割り当てた）
Can't something **be worked out**?
（何とかなりませんか？）

最後に way の入った熟語や慣用句をまとめ挙げておこう。
They never **get out of the way**.
（彼らは決して道をあけることはない）
The doll has a deep throat **all the way down**.
（その人形の喉はずっと奥まで深い）
If I **had my way**. （この私にそんな力があるなら）
Children sometimes **get in the** [our] **way**.
（子供は時々邪魔になる）
An intricate case **came my way**.
（こみいった事件が起こってきた）
She **has a way with** them.

（彼女は彼らを扱うのがうまい）

He **looked the other way**.（彼は目をそらしていた）

The other way round.（反対だよ）。 No way!（いやーだ）

Too much **their own way**. （勝手すぎるよ）

He worked **his way through** junior high school.

（彼は働きながら中学を出た）

Mr. Rogers is **on his way** here now.

（ロジャーズさんは今こちらに向っている途中です）

The word of mouth campaign is already **under way.**

（くちこみ活動はすでに始まっている）

尚、以下のような way は away の省略形である。

The house lay a little **way back** from the river.

（その家は川から少し下った所にあった）

Way down to New Orleans.（遥かなるニューオーリンズ）

That happened **way back** in 1915.

（それはずっと昔の 1915 年に起った）

Rob and I **go way back**.（ロブと私は長いつき合いさ）

成句の例文：まずは名詞または名詞句の形の慣用的表現を集めてみよう。

all-time high 今までの最高記録、 black lie 悪質なうそ、 downright lie まっかな嘘、 white lie 罪のないウソ、 drumstick 鶏の骨付肉, bus boy 給仕人の助手、fifth columnist 敵側に味方する者、 loss leader 目玉商品、Molotov cocktail 火炎ビン、 money laundering 資金の洗浄、 pink slip 解雇通知、 potluck party 食事持寄りパーティー、 rain check 雨天順

延券、 outsourcing company 外部委託会社、 soft touch すぐに金を貸す人、 street tout 客引き、 stuffed shirt もったいぶった男、white elephant 無用の長物、nest egg へそくり、song and dance 言い訳

次に文章そのものが、ひとつの慣用的表現となっているものを集めてみよう。殆どの場合以下に書かれた文章のままで使われるが、時には時制や代名詞が変ることもある。

A little bird told me. 風の便りに聞いたのです。 A little language goes a long way. 簡単な言葉が役に立つ。Fortune smiled on me. 運が向いてきた。 I'll excuse myself now. これで失礼します。 I shall trespass on your hospitality. ご親切に甘えさせていただきます。 I keep my fingers crossed for you. あなたの幸運を願っています。Let it be. ほっとけ。 So be it.=Amen. そうありますように。 My mother wants [asks]to be remembered to you.母からもよろしくと申しています。

Please give my kind regards to your father. お父様によろしく。 Please accept my condolences on the death of your father. 尊父の御逝去(ごせいきょ)に対して謹んで哀悼(あいとう)の意を表します。 Till death us do part. 死が二人を分つまで。 The tables have turned. 状況は変わった。 Touch wood. くわばら、くわばら（幸運が来ると災いも来るかもしれないので、魔除けの木に触っておきなさいの意)。You can whistle for that. 求めても無駄。 What a to-do! 何というばか騒ぎ! Much ado for nothing. 針小棒大だ！

英語などの西洋言語では日本語における漢語のように、ラテン語が使われることも多い。日常頻繁に使われているものの殆どは、省略形で使われている。例えば AD=Anno Domini, e.g.=exempli gratia, etc=et cetera, id=id est, N.B.=Nota Bene, viz=videlicet など多数がある。

次に物理や数学で使われるものとしては、a fortiori（なおさら）、a priori（演繹的に）、a posteriori（帰納的に）、Q.E.D.（証明終り）、reductio ad absurdum（背理法）、などがある。

また多少格式ばった表現をするときに使われるものとしては、bona fides（真実の）、de facto（事実上の）、de jure（法律上）、et al（およびその他の）、pro bono publico（公益のために）、quid pro quo（見返り品）、terra in cognita（未知の分野）など沢山ある。

We require no **ad hoc** hypothesis.

（我々は**特にこのための**仮定は求めない）

The subspace of Euclidean space is **per se** Euclidean. （ユークリッド空間の部分空間は**それ自体で**ユークリッド的である）

The election result shows that people want the maintenance of the **status quo**.（選挙結果は人々が**現状維持**を望んでいることを示している）

掲示と標識(notices and signs)も一種の成句であり、ここで少し集めておこう。

一時停車禁止 No Standing、 犬は鎖に繋ぐこと All Dogs to be Kept on a Leash、 追越禁止 No Passing、 押売無用 No Peddlers、 火気厳禁 Inflammable、 空車 For Hire、腐り物

Perishables、 工事中:迂回 Under Construction: Detour、正札(しょうふだ)掛値(かけね)なし One Price Only、小便無用 Commit No Nuisance、信号厳守 No Jaywalking、 通行止 Dead End、 火の用心 Precaution against Fire、 本日満室 No Vacancies、面会謝絶 No Visitors Allowed、落書禁止 No Scribbling

慣用表現といえば英語の専売特許(patent)と思われがちだが、日本語でもそのまま訳すと誤解される言い回し（甘い考え、猫なで声、玉虫色など）とか、日本の伝統に基づく表現（四つに組む、100 点満点、太刀打ち、など）とがある。そこで以下では日本語の慣用表現及びそれに近いものを、ほんの少しだけ取上げてみよう。

そんなの**朝飯前**さ。It's easy as duck soup[a piece of cake].

私はその仕事から**足を洗った**。I've turned over a new leaf.

壱からやり直そう。Let's begin from scratch[square one].

彼は**扇の要**(かなめ)のようなものだ。

He's just like the hub of the wheel.

これなら**鬼に金棒**だ。This is a double advantage.

ロンドンはパリとは**及びもつかない**。

London is a far cry from Paris.

甲社は**空約束**で客を騙す。

The company A strings along customers.

イチローは**窮地を脱した**か?

Has Ichiro wriggled out of a fix [a tight corner]?

これは**コクのある**ビールだ。This beer has a good body.

この店の麺は**コシ**がある。This shop's noodles are chewy.

あの会社には有力な**コネ**がある。

I've a strong pull with the company.

彼はいつも学校を**さぼる**。He always play truant [hooky].

三々七拍子!　Clap hands by 3-3-7 beat!

万歳**三唱**!　Give three cheers, "Hip,hip,hurrah!"

死出の山を越え、**三途の川**を渡り黄泉の国へと行く。 Going over Mount Mori and crossing the River Styx, here comes the Hades.

あれは**杓子定規**で色気も素っ気もない奴じゃ。

He's bland and blunt, and does everything by the book.

今ではソロバンは**廃(すた)れつつ**ある。

The Chinese abacus is going out of use now.

私は値を 2000 円まで**叩いた**。I knock the price down to 2000 yen.

狸と狐の騙し合いだ。They're cheating each other.

農業では**食べていけない**ので、彼らは皆町へ出稼ぎに出た。

There's no money in farming. They're all off to work in cities.

彼は**提灯持ち**にすぎない。He's a mere puffer [flatterer].

(**提灯**とは細い竹のひごに紙を貼り、中に蝋燭又は電灯を入れた一種の照明器具をいう。Lantern is a kind of light with a candle or an electric lamp inside, and made of paper pasted over thin bamboo hoops.)

お茶が出るまで待ちなさい。Wait until the tea draws.

お茶が出されるまで待ちなさい。Wait until tea is served.

彼も**年貢の納め時**だ。His game is up.

財政が**ネック**となって事がすすまない。

Finance is the bottleneck which obstructs our plan.

腹が立って、頭にきた。I see red, and get my hackles up.

この会社は**風前の灯**だ。This company is on its last legs.

ジョンソン氏は今やこの会社の**古だぬき**である。

Mr. Johnson is an old-timer at the company now.

臍(ほぞ)**をかためよ**。Make up your mind.

この**ポンコツ**は見た目は悪いけど、街中を走るには十分だ。

This jalopy is not much to look at, but it gets me around town.

彼は**マイホーム主義者**だ。He's a homely family man.

まぐれです。It's a fluke.

彼はいつも**迎え酒**をやる。

He always has a hair of the dog that bit him.

凶悪犯人の多くは**虫も殺さぬ顔**をしている。

Most of heinous criminals look as if the butter wouldn't melt in their mouth.

彼らは共産党の**申し子**である。

They're golden boys of the communists.

もちつもたれつ。You scratch my back, and I'll scratch yours.

資源は再利用しないと**もったいない**。 It's wasteful to throw away resources without being recycled.

臨機応変にやろう。Let's play it by ear.

犯罪は**割に合わない**社会が望ましい。

We want the society where crime doesn't pay.

本款(ほんかん)の最後として成句の一種ともいえる、諺についてまとめておこう。英語の諺は新約又は旧約聖書に基づくものや、シェイクスピアの作品から出たものがかなりあるのが特徴といえる。これに対して日本語の諺は中国故事や、仏教経典に基づくものが多いと言える。ここでは出典別に分けるのは難しいので止め、また有名なものはどの文法書にも書いてあるので、文法的又は構文的に面白いと思われるものや、響き又は内容の美しいものを集めてみた。

ところで諺を知っていても、実際の会話などでどのように使うのかを知らないと不便をするので、まず使い方の例から始めてみたい。

・諺にもあるように、終り良ければすべてよしだ。
As the proverb goes[says], all is well that ends well.

・それが、いわゆる一石二鳥というものですね。
This is, what we call, to kill two birds with one stone.

・何事もよく言うように「過ぎたるは及ばざるが如し」ゆえ、暇がありすぎるのも問題ですね。
As it's often said, "The last drop makes the cup over",
too much leisure becomes a nuisance.

・時は金なりが彼の口癖だ。
His favorite phrase is: Time is money.

・彼の座右の銘は「長生きはするもの」です。
The motto he lives up to is: Live and learn.

・オリンピックの標語は「より早く、より高く、より強く」である。The slogan of the Olympics is Citius,Altius,Fortius —Faster, Higher, Stronger.

・あの本は連帯責任は無責任の原則を地(じ)で行くものだ。
That book is the picture of Everybody's business is nobody's business.

・己に克つとは不思議な言葉だ。なぜなら自分に克った者は、当然自分に負けた者だからである。Overcome oneself is a strange expression. Because one who overcomes oneself is naturally overcome by himself.

[あ行]

愛に不公平はない. Love lives in cottage as well as in court. 言うは易く行うは難し。Saying is one thing and doing is another. 医者よ自分自身を治せ。Physician, heal thyself. 衣食足りて礼節を知る。Competency is for constancy of mind. 一か八かやってみる。 Take a chance. 一寸先は闇。Let us eat and drink, for tomorrow we may die. 上には上がある。Diamonds cut diamonds. 烏合の衆。The mob has many heads but no brains. うどの大木。Too big to use. 大男総身に知恵が回りかね。A big man, a little wit. 己に克ちて礼に復するを仁となす(克己礼復為仁)。Overcome oneself and return to courtesy. That's what we call benevolence.

[か行]

来てみればさほどにもなし富士の山。Blue are the faraway hills. 清水の舞台から飛び降りるつもりでやる。Make up your mind to cross the Rubicon. 君子は 9 度思って 1 度言う。The wise man has a long ear and a short tongue. 虎穴に入らずんば、虎子を得ず。Nothing ventured, nothing have. この世に

は何も新しいものはない、ただ君が知らないだけ。Nothing new under the sun, only your ignorance.

[さ行]

色即是空、空即是色。Matter is void, Void is matter.　自業自得。As you sow, so shall you reap.　蛇(じゃ)の道は蛇(へび)。Set a thief to catch a thief.　諸行無常。Paul's will not always stand.　正直者がばかを見る。Plain dealing is dead and died without issue.　知らぬが仏。Ignorance is bliss.　住めば都。An Englishman's house is his castle.

[た行]

大器晩成す。Genius is slow to develop.　ただより高いものはない。There is no such thing as a free meal.　楽しめる間に楽しめ。Gather roses while you may.　天網恢々(てんもうかいかい)疎にして漏さず。God's mill grinds slow but sure.

[な行]

情は人の為ならず。A kindness is never lost.　汝の敵を許せ、しかしその名は忘れるな。Forgive your enemies, but never forget their names.　汝盗むなかれ。Thou shalt not steal.二兎を追う者一兎も得ず. Grasp all, lose all.　人間は万物の尺度である。Man is the measure of all things.　忍耐は苦い、しかしその実は甘い。Perseverance is bitter, but its fruit is sweet.　盗人(ぬすっと)の昼寝にもたくみあり。When the fox preaches, take care of the geese.　念力岩をも徹す。Faith will move mountains.

[は行]

背水の陣をしく。Burn one's bridge.　埴生(はにゅう)の宿もわが宿。Be it ever so humble, there's no place like home.　日暮れて道遠し。

There is a long way to go before dark.　人は人を殺してはいけない。Man shall not kill man.　一人でいないと寂しい。Never less alone than when alone.　暇人(ひまじん)閑居して不善をなす。Doing nothing is doing ill.　貧乏暇なし。Poor men, poor leisure.　風前の灯。A candle flickering in the wind.　ぶれるな。 Be determined once for all.　本末転倒。To put the cart before the horse.

[ま行]

蒔かぬ種は生えぬ。You cannot make an omelet without breaking eggs.　待てば海路の日和かな。It is a long lane that has no turning.　未来は過去の応用である。Those who cannot remember the past are condemned to repeat it.　身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ。Take the good with the bad.　盲(めくら)蛇におじず。Fools rush in where angels fear to tread.　もしそこから学べば、失敗は成功だ。Failure is success if we learn from it.

[や行　ら行　わ行]

安物買いの銭失い。The cheap buyer takes bad meat.　柳の下にいつも泥鰌(どじょう)はいない。Christmas comes but once a year.　夢に見るなら現実にできる。If you can dream it, you can do it.　夜明け前が一番暗い。The darkest hour is before the dawn.　楽あれば、苦あり。No pains, no gains.　良酒に看板は不要。Good wine needs no bush.　隴(ろう)を得て蜀(しょく)を望む。Give him an inch, he'll take an ell.　論より証拠。The proof of pudding is in the eating.　わが道を行く。Going my way.　藁(わら)で作っても男は男。A man of straw is worth a woman of gold.　割れ鍋に閉じ蓋。Every Jack has his Jill.

4－2 日常生活用語

本節では日常生活の色々な場面で現れる、色々な用語や表現をざっくばらんに集めてみた。とくに後半では普通の英文法書にはあまり触れられていない、自然科学や社会科学に重点を置いた用語などを拾い集めてみた。

ｉ）日本事象(Things Japanese)

西洋では米はマカロニやスパゲッティと同じく、熱湯で茹でたのち水洗いして食べますが、日本ではまず米を水でよく研いだのち、釜の中に入れて温度調節しながら炊きあげて食べます。カレーライスとハヤシライスは多くの日本人に好まれています。

Occidentals eat rice in the same way as macaroni or spaghetti, id. , they first boil them in hot water then wash them to eat. But Japanese eat rice by washing them in water first, then putting them in a rice cooker to steam by regulating temperature. Curry and rice, and rice with hashed meat are most Japanese favorites.

・挽肉(ひきにく)＝minced [ground] meat、細切れ肉＝hashed meat、ぶつ切り肉=chopped meat、 薄切り肉=sliced meat、厚切り肉=steak。ちくわ=broiled fish paste、かまぼこ=steamed fish paste、はんぺい＝fried fish paste.

・豆類=legume、マメ科植物=leguminous plant、大豆=soy bean、小豆(あずき)=red bean、隠元豆(いんげん)=kidney bean、莢(さや)隠元=green bean、枝豆=green soybean、莢えんどう=string bean、グリーンピース=green peas、そら豆=broad bean、レンズ豆=lentil、納豆=fermented soybean、甘納豆=sugared bean.

・藻類=aquatic plant、海草=seaweed、荒布(あらめ)=kelp、昆布=

sea tangle、若布=alga、海苔=dried laver、塩昆布=salted sea tangle、とろろ昆布=scraped sea tangle.

・緑茶=green tea、煎茶=infused tea、玉露=green tea of quality、番茶=coarse tea、焙じ茶=scorched tea、抹茶[ひき茶]=powdered tea、麦茶=barley tea、昆布茶=sea tangle tea、紅茶=black tea、ウーロン茶=oolong tea、薄荷茶=mint tea、素けい茶＝jasmine tea、科(しな)の木茶=lime tea.(仏語では l'infusion de tilleul)

・つまみ=snack、珍味=delicacy、数の子=herring roe、いくら=salmon roe、明太子=cod roe、チョウザメの卵=caviar、梅干し=pickled plum、漬物=pickles、アルコール飲料=liquor、強いアルコール=spirits、吟醸酒=quality brew、醸造酒=brew、蒸留酒=distilled liquor.

パチンコとはピンボールに似ていますが、スロットマシーンのように自動支払装置の付いた賭の器械をいい、日本人の最大の楽しみのひとつです。玉が入賞口に入ると画面が回り始め、333 とか 777 のように絵柄が 3 つ揃うと大当りとなり、平均で 2000 個の玉が下から出てきます。

Pachinko is a gambling device resembling a pinball, but with automatic payoff as in a fruit machine. It's one of the greatest amusements of the Japanese. The screen starts to rotate each time a bead enters into the starting slot, and if you get the pictures like 333, 777, etc., you'll win a lucky V and have about 2000 beads on the average from below the machine.

豆まきは由緒ある日本の伝統行事のひとつで、旧暦の立春の前日に行われます（2 月 2 日頃)。これは合衆国でのグラウンド

ホッグデーと同じ日です。尚、グラウンドホッグデーとは地豚が 2 月 2 日に冬眠から覚めて穴から出てきた時、自分の影を見るか否かで春を占う日で、曇りで影を見なければよい春になるとされます。

The time-honored bean-throwing ceremony is one of the Japanese traditional events, and takes place on the day before the beginning of spring on the lunar calendar(about Feb.2). It's the same day as Groundhog Day in the USA. By Groundhog Day is meant the day when we augur the spring of the year. Namely, groundhogs come out of their holes after hibernation on February 2, and if they don't see their shadows because of cloudy weather, we'll say this spring will be fine.

ⅱ）医療と病気

心の病気には神経傷害と精神障害とがある。**神経傷害**とは神経系の障害により、一時的又は偶発的に身体または心の異常をきたす病気をいい、心身症、神経衰弱などの神経症(ノイローゼ)と、顔面神経痛などの神経痛に分けられる。

The spiritual diseases comprise nervous and mental disorder. We mean by the former diseases which make human body or spirit abnormal temporarily or casually by the nervous tract disorder. They can be classified **neurosis** such as psycho-somatic disease, neurasthenia, etc. and **neuralgia** such as facial neuralgia,etc.

精神障害とは、脳の障害により一時的又は恒常的に人間精神

の異常をきたす病気をいい、精神病、精神薄弱、精神病質の 3 つに分けられる。このうち精神病には分裂症、そううつ症、てんかん症、憂うつ症などがある。

We mean by mental disorder the disease which makes human mentality abnormal temporarily or permanently by cerebral disorder, which consists of mental disease, mental weakness and mental derangement. The first one of the above three includes schizophrenia, manic-depressive psychosis, epilepsy, hypochondriac, etc.

高病原性トリインフルエンザとは、主に五大悪鳥によって伝染すると考えられている、たちの悪いインフルエンザをいう。**五大悪鳥**とは人家や民家の回りにまとわりつき、人間にちょっかいをかけてくるウグイス、カラス、シジュウガラ、ドバト、ヒヨドリの 5 つの畜生をいう。

We mean by “highly virulent avian flu” ill-natured influenza which is said to be carried by the five bad birds, namely bush warbler, raven, titmouse, feral pigeon and brown-eared bulbul. These beasts haunt our houses or dwellings and meddle in our lives.

最近多い病名：花粉症=pollinosis, 花粉アレルギー=pollen allergy, 枯草熱=hay fever, 中皮腫[中皮癌]=mesothelioma, サーズ[重症急性呼吸症候群]=Severe Acute Respiratory Syndrome, エイズ[後天性免疫不全症候群]=Acquired Immune Difficiency Syndrome, レジオネラ症=legionellosis, 狂牛病[牛海綿状脳症]=mad cow disease[bovine spongiform encephalopathy], 骨粗鬆症(こつそしょうしょう)＝osteoporosis, 口蹄疫(こうていえき)＝aftosa=

=hoof-and-mouth disease=foot-and-mouth disease

病原体の主なものは病原菌（ウイルス）、細菌、寄生虫であり、大きさの順に並べると寄生虫>細菌>菌糸＞リケッチャ>病原菌>プリオン>高分子化合物の 7 種となる。

The principal pathogenic organs are: virus, bacteria and parasites. In order of size they come as follow: parasites>bacteria>bacteriophage>rickettsia>virus>prion> highly molecular compound.　They are seven in total.

黴菌（ばいきん）＝germ、何々菌＝X bacillus、微生物＝microbe、菌類＝fungus、酵素＝enzyme、酵母＝leaven、イースト菌＝yeast、乳酸菌＝lactic ferment、麹（こうじ）＝rice malt、抗原＝antigen、抗体＝antibody

最近は抗菌防菌をうたう製品が多いが、こういう製品を使っていると結局のところ、自分の体に細菌が集中してしまうので、非常に危険である。

Recently there're a lot of products which are said to be processed by anti-germ or germ proof treatment. But it seems very dangerous to use them. Because in the last resort germs will gather together on one's own skin.

痣（あざ）、疣（いぼ）、胼胝（たこ）、できもの、にきび、吹出物、肉刺（まめ）に効く薬はありますか?　それとシミ、そばかす、ほくろに効く薬はないですか？

Have you got any remedy good for bruises, warts, calluses, boils, acnes, pimples or blisters? And haven't you got any remedy good for spots, freckles or moles?

調合済内服薬＝medicine、未調合内服薬＝drug、治療薬＝

remedy、売薬＝patent medicine、丸薬＝pill、錠剤＝tablet、粉薬＝powder、カプセル＝capsule、水薬＝liquid medicine、座薬＝suppository、糖衣剤＝sugared capsule

オブラート＝medicinal wafer 、抗生物質＝antibiotic、睡眠薬＝sleeping pill、睡眠剤＝soporific, 鎮痛剤=anodyne、鎮静剤=sedative、下剤=laxative[purgative]、虫下し=vermifuge、万能薬=panacea、偽薬＝placebo、制酸剤＝antacid

しゃくりを治すよい方法は袋をふくらますか、熱いお茶を湯飲の反対側から飲むか、または驚かせてもらうことです。

To get over [shake off] hiccups, I'll advise you to blow a bag, drink a hot tea from the wrong side of the cup, or let you be frightened.

脊髄(せきずい)とは脊柱の中を通っている、細長い円柱状の中枢神経をいい、脊椎(せきつい)とは脊柱を構成する 32 から 34 個の骨をいう。骨髄(こつずい)とは、骨の中の空洞をみたす柔らかな組織をいう。

By spinal marrow is meant slender and cylindrical central nerve which goes through the spine, and by spinal column 32 to 34 bones which compose of the spine. We mean by bone marrow soft tissue which fills the hollow of bones.

頭蓋骨=skull、肩甲骨=scapulas[shoulder blade]、鎖骨=clavicle[collar bone]、肋骨(ろっこつ)=rib、尾骶骨(びてい)=coccyx、大腿骨=thighbone、膝蓋骨(しつがいこつ)=kneecap、脛(けい)骨[すね骨]＝shinbone、頸(けい)骨[首の骨]=neck bone、背骨=backbone、交感神経=sympathetic nerve、副交感神経=parasympathetic nerve、頭蓋＝cranium、頭蓋の＝cranial、頭頂部＝parietalis、頭頂部の=parietal

ⅲ）自然科学関係

夏が少し暑かったり、冬が少し寒かったりすると異常気象という人もいるが、これでは異常の異常たる意味がない。むしろ明日の天気すら当らない気象庁を異常気象庁と呼んだ方がいい。

Some people talk on the abnormal weather only if a summer is a little bit hotter or a winter colder. But this kind of use of the word “abnormal” is meaningless. We’d better call the Meteorological Agency abnormal whose staff cannot forecast even tomorrow’s weather correctly.

震度とは人体への感じ方や被害の状況等により、気象庁の職員が公表する地震の大きさをいい、**マグニチュード**とは震央距離 100ｋｍでの地震計の読みを、対数で表した地震の大きさをいう。後者はアメリカ人のチャールズ・リクターが考え出したものゆえ、何々リクターと呼ぶべきだろう。

By seismic scale is meant the size of earthquake that Meteorological agents announce by considering perceptibility, casualties, damages and others. By magnitude is meant the size of earthquake expressed by logarithm of reading of seismometer installed at 100km from epicenter. But this latter is introduced by an American, Charles Richter, so we should call it Richter scale.

火砕流=pyroclastic flow、土石流=rock and mud flow、溶岩流=lava flow、地滑り=landslide、土砂崩れ=avalanche of rock and earth、岩板構造学=plate techtonics、注意報=warning、警報=alarm、警告=alert、通告=notification、通知=notice

星座とは天球上の場所を容易に示すため、天球面を区分した

名をいい、**星雲**とは薄い雲のように見える星の集団をいう。

Constellation is an appellation of sections of celestial globe to facilitate to locate its places, nebula is a cluster of stars looking like thin clouds.

星座は天球の区分の場所名ゆえ、1 つの星座には銀河系内の星と系外の星雲が混在しているのが普通である。**天の川**とは星が集まって川のように見える部分をいい、**銀河**とは恒星が何百億個と集まっている空間をいい、**銀河系**とは太陽系が入っている銀河をいう。言うなれば銀河は普通名詞だが、銀河系は固有名詞と言える。

A constellation usually mingles stars and nebulae within or beyond the galactic system, since it's an appellation of sections of celestial globe. The Milky Way is a part of the space which looks like a river with stars, the galaxy is a part of the space which contains tens of billions of fixed stars, and the Galactic system is the galaxy in which the solar system exists. In a manner of speaking, the galaxy is a common noun, whereas the Galactic system is a proper noun.

銀河系に最も近い星雲はアンドロメダ大星雲であり（約 200 万光年）、また太陽に最も近い恒星はケンタウルス座のα星である（約 4.3 光年=40.7 兆ｋｍ位）。

The nearest nebula to the Galactic system is Andromeda(about 2 million light years), and the nearest fixed star to the sun is Star α of Centaurus(about 4.3 light years＝some 40.7 trillion km).

有機化合物とは炭素と水素を主体とする高分子化合物をいい、

無機化合物とは有機化合物以外の化合物をいう。

By an organic compound is meant the (chemical) compound of heavy weight molecules composed mainly of carbon and hydrogen, and by an inorganic compound the compound other than organic compounds.

炭化水素とは炭素と水素だけからなる有機化合物をいい、**炭水化物**とは炭素と水とが結合した形の化学式 $C_m(H_2O)_n$ をもつ有機化合物をいう。前者は石油や天然ガスに主として含まれ、後者は食物に含まれる。

Hydrocarbon is an organic compound composed only of carbon and hydrogen, and carbohydrate is an organic compound which has a combined-style formula of carbon and water $C_m(H_2O)_n$. The former is mainly found in petroleum or natural gas, and the latter in food.

無機物[≒**鉱物**]とは、天然に生成されて地中に多く含まれる無機化合物をいい、**無機質**[≒**ミネラル**]とは人体の栄養になる無機物をいう。

By mineral substance is meant inorganic compound a large amount of which is produced in nature and found in the earth, and by mineral the mineral substance which is nutritive for human body.

水化物$(H_2O)_n$ =hydrate: 炭水化物 $C_m(H_2O)_n$

酸化物(O_n)=oxide：一酸化炭素(CO)=carbon monoxide、二酸化炭素(CO_2)=carbon dioxide、強酸化物= oxidant、硫黄酸化物=sulfuric oxide、窒素酸化物=nutric oxide

水酸化物(OH_n)=hydroxide：水酸化ナトリウム(NaOH)=

sodium hydroxide、水酸化カルシウム $Ca(OH)_2$=calcium hydroxide

塩化物(Cl_n)=chloride：塩化ナトリウム(NaCl)=sodium chloride、塩化水素(HCl)=hydrogen chloride

シアン化物(CN_n)=cyanide：シアン化カリウム[青酸カリ]=potassium cyanide、シアン化水素(HCN)=hydrogen cyanide

無水物=anhydride：無水亜硫酸(SO_3)=sulfuric anhydride

炭酸塩(CO_n)=carbonate：炭酸ナトリウム(Na_2CO_3)= sodium carbonate、炭酸カルシウム[石灰石]$CaCO_3$ =calcium carbonate

鉱石とは岩石や土壌を構成する物質をいい、石英・長石・雲母・方解石・鉄鉱石・ボーキサイトなどがある。また**岩石**とは、数種類の鉱石が規則的に配列し地殻を構成する物質をいい、火成岩、水成岩、変成岩がある。

By ore is meant materials which compose of rocks or earth. We name as ore quartz, feldspar, mica, calcite, iron ore, bauxite, etc. And we call rocks regular arrangement of several kinds of ores which compose of earth. There're igneous rock, sedimentary rock and metamorphic rock.

硝石=niter、鍾乳石(しょうにゅうせき)=stalactite、水晶=rock crystal、輝石=pyroxene、方鉛鉱＝galena、花崗岩＝御影石＝granite、石灰岩＝limestone、大理石＝marble

ⅳ）社会科学関係

為替(かわせ)とは現金の代りに金銭の受渡しをする方法をいい、外国

為替とは外国を対象にした為替をいう。為替相場とは外国通貨と内国通貨との交換率をいい、為替手形の相場のことではないので紛らわしい用語である。

Money order is a method of delivering money instead of cash, and (foreign) exchange is money order with foreign countries. Exchange rate is a rate between foreign and domestic currencies. As it's not a rate among bills of exchange, we'll say this term in Japanese is confusing.

振替とは、帳簿上の書換えによって支払いを行うことをいうので為替の一種であり、為替振替という語は冗長語ともいえる。

Transfer is the manner of payment by rewriting the sum between books. It's therefore a kind of money order and the word "money order transfer" can be regarded as redundancy.

委任者と受任者=mandator and mandatory、貸主と借主＝creditor and debtor、借方と貸方=debit and credit、債権者と債務者=obligee and obligor、資産と負債=assets and liabilities

銀行用語での**振替**は口座から口座に現金を移すことをいい、**振込**は自分の口座から他人の口座に現金を送ることをいうので注意がいる。

Moreover we should take notice of bank terminology. They call transfer the payment of money between the accounts A and B, but they call remittance the payment of money from one person to another.

証券には証拠証券、免責証券そして有価証券があり、有価証券の中には株券、手形、小切手などがある。

Securities are composed of vouchers, coupons and

negotiable instruments, and negotiable instruments are made up of stock certificates, commercial bills, checks, etc.

株式先物取引とは、日経 225 銘柄または TOPIX をひとまとめにして行う信用取引をいい、裁定取引とは現物と先物との価格差を利用して利鞘(りざや)を稼ぐ取引をいう。

Stock futures are transactions on credit put together 225 special stocks of Nikkei or TOPIX, and arbitrage transaction is a transaction which uses the differences of the prices between spot transaction and stock futures to gain margin.

株式会社は英米オランダ法系、**有限会**社はドイツ法系、**合名会社**と**合資会社**はイタリア・フランス法系の会社組織ゆえ、英語に訳すのは難しい。また英米法系では法人組織より、信託制度により権利義務の関係を規定する場合が多い。

As the joint-stock company is Anglo-Dutch law system company, so the limited liability company is German, the partnership and the firm are Italian-French. Thus it sometimes is difficult to translate them into English.
Moreover Anglo-american law system often prescribes right-duty relations by trust system, rather than by juridical organization.

瑕疵(かし)ある意思表示とは欠陥のある意思表示をいい、具体的には詐欺又は強迫を受けた意思表示をいう。**意思の欠缺(けんけつ)**とは意思の不備又は不存在をいい、例えば 10 才の子供が 500 万円の借用証書に印鑑を押すような場合をいう。

We mean by an imperfect intent intent which has flaws. To be explicit, it's intents done by fraud or threat. By the

deficiency of intent defective or non-existent intent, for example a child of ten years old stamped a bond of debt of five million yen with seals of approval.

物権とは物を支配できる権利をいい、日本の民法には 10 種の物権が規定されている。

The real right is right to control things, and the civil code of Japan provides ten real rights explicitly.
占有権=seizing, 所有権=ownership, 入会権=communal right, 地上権=surface right, 永小作権=emphyteusis, 地役権=servitude, 留置権=lien, 先取特権=priority right,質権=right of pawn, 抵当権=mortgage

債権とは特定人が特定人に特定の行為を請求できる権利をいい、賃借権・代金請求権・明渡請求権など多くの例がある。

By credit is meant right to claim specific deed by a specific people to a specific people. Not to mention lease, purchase claim, evacuation demand, etc., there are lots of examples for it.

注：法曹界(ほうそうかい)の人々は意思と意志、脅迫と強迫、控訴と公訴、債権と債券、心理と心裡、物権と物件などの紛らわしい語を好んで使ったり、毎年のように法を改正して、揚げ足取りをするので注意のこと。ホーそうかい!?

「何人も、実行の時に適法であった行為又は既に無罪とされた行為については、刑事上の責任を問われない。又、同一の犯罪について、重ねて刑事上の責任を問われない。」（憲 39 条）

No person shall be held criminally liable for an act which

was lawful at the time it was committed, or of which he has been acquitted, nor shall he be placed in double jeopardy. (Art.39 of Con. of Japan)

注：英米では手続法(procedure law)を重視するのに対して、大陸法系では実体法(substantial law)を重視する傾向が強い。例えば時効については、英米法では訴訟(suit)上の攻撃防御の方法または提訴の期限切れ(the statute of limitations)と捉えるのに対して、大陸法では実体法上の権利の得喪(とくそう)として捉えられる（取得時効=acquisitive prescription、消滅時効=extinctive prescription）。

また罪(crime)と罰(punishment)は宣告するがその執行は猶予するという執行猶予(stay of execution)も英米にはなく、罪と罰それ自体を宣告しないという宣告猶予(suspended sentence)が取られる。日本は大体に於て大陸法系である。

主として刑事事件での用語集：公判＝trial、起訴状＝indictment、検察側＝the prosecution、検事＝prosecutor、被告人=the accused、被告人席=the dock、犯罪者=criminal、犯罪人=perpetrator、犯人=culprit、有罪人=convict、容疑者=suspect、被疑者=indicted、加害者=assailant、被害者=victim、囚人=prisoner、(陪審員の)評決=verdict、(刑事の)判決=sentence

主として民事事件での用語集：原告=plaintiff、被告=defendant、弁護士=lawyer、法廷弁護士=barrister、事務弁護士=solicitor、訴状=petition、口頭弁論=pleading、仲裁=arbitration、調停=mediation、和解=reconciliation、示談=amicable settlement、(民事の)判決=ruling、

日本では 2009 年より裁判員制度が導入されたが、これは罪状認否手続をへて行われる陪審制や準陪審制とは異り、いわば混合裁判制とでも呼ぶべきものである。

In Japan the lay assessor system was introduced in 2009. This isn't the jury system or the quasi-jury system with alignment procedure, but is the so-called mixed court system.

ｖ）芸術、運動その他

私は古典音楽はあまり好きではないが、バロック音楽は大好きです。私にとっての 3 大バロック音楽はヘンリー・パーセルの「アブデラザール組曲」、ジョージ・ヘンデルの組曲「水の上の音楽」、ウォルフガング・モーツァルトの「哀悼曲 626 番」です。 I'm not keen on classical music, but I'm keen on baroque music. My three favorite pieces of baroque music are: Suite "Abdelazer" by Henry Purcell, Suite "Water music" by George Handel, and "Requiem No.626" by Wolfgang Mozart.

清元（きよもと）とは、おもに歌舞伎において、三味線の伴奏と共に歌を唄う人をいう。瞽女（ごぜ）とは、中世の日本で三味線を弾いて歌を唄っていた、盲目の女性をいう。

By kiyomoto is meant people who sing songs by accompaniment of three-stringed lutes, especially in kabuki play. We mean by goze blind women who were playing three-stringed lutes and singing songs in the middle age of Japan.

琴＝Japanese harp、箏曲＝Japanese harp music、雅楽

=court music、囃子=Noh refrain、能＝Noh play、狂言=Noh farce、文楽=puppet play、琵琶法師=lute minstrel、浄瑠璃-=ballad drama、義太夫=puppet play recitation

シードとは強い選手やチーム同志が、一回戦で対決しないように工夫された試合の組合せをいう。

Seed is a combination of matches in order that strong players or teams are not met in the first round.

リーグ戦とは、各競技者またはチームが総当り戦をする試合の組み方をいい、**トーナメント戦**とは各競技者またはチームが勝抜き戦をする試合の組み方をいう。 By a round robin [a league tournament] is meant a combination of games in which every player or team meets all others, and by a tournament is meant a combination of games in which each player or team passes the elimination to participate in the finals.

準決勝=semifinal、準々決勝=quarter final、予選=preliminary、予選通過者=qualifier、同点決戦=playoff、準備体操=warmup、徒手体操=floor exercise、器械体操=apparatus gymnastics、柔軟体操=stretching exercise、美容体操=beauty exercise 美容療法=calisthenics、3 回転ひねり=triple axle twist、3 回転半ジャンプ=three and half axle jump

日本は学歴偏重社会である。M 氏は東大を出て通産省に入り、そこでハメを外しすぎて刑務所入りした。彼ほど国立の施設を愛した人はいないだろう。こんな風に言われるくらいに、国立

大学への敬愛は今でも高いのは遺憾である。

Hyper-emphasis is placed on educational background in Japan. Mr. M graduated from Tokyo University and entered the MITI, where he let him go so much as to enter prison. No one has ever loved national institutions more than he. It's regrettable that most of the Japanese still have a strong respect to national universities, just as indicated here.

注：網走番外地といえば網走刑務所を指すように、国立の大規模施設は大体に於て、その住所は無番地すなわち番外地(off-number quarter)となっている。例えば愛知県春日井市木附町番外地は、自衛隊の高蔵寺分屯(ぶんとん)基地(JASDF Kouzouji Sub Base)である。とすればついでに東京大学は文京区本郷番外地、国会議事堂(The Diet Building)は千代田区永田町番外地などで統一するとハクがつき、恰好いいのではないだろうか.....。

英米の宗教上の主な祝祭日

Jan 6: Epiphany (公現祭。3 博士がキリストに会いに来た日)
Feb 2: Candlemas (聖燭(せいしょく)祭)
Feb 14: St. Valentine's Day (バレンタインデイ)
March: Lent (四旬節。復活祭までの懺悔(ざんげ)の期間)
Mar. or Apr.: Easter(復活祭。春分以後の満月後の第一日曜日。Good Friday と Easter Monday までの 4 日間が休日)
April 1: All Fools' Day (万愚節)
May: Whitsunday (聖霊降臨祭。復活祭後の第 7 日曜日)
May: Whitmonday (聖霊降臨祭後の第 1 月曜日)
Aug 15: The Assumption (聖母被昇天祭)

Sep 29: St. Michaelmas (ミカエル祭。賃料等の基準日)
Oct 31: Halloween (万聖節の宵祭り)
Nov 1: All Saints' Day (万聖節)
Nov.: Thanksgiving Day (感謝祭。11 月の第 4 木曜日)
Dec 25: Christmas Day (キリスト降誕祭)
Dec 26: Boxing Day (クリスマスの贈物の日)

英米の主な料理

bangers and mash (ソーセージとマッシュポテト)、bubble and squeak (じゃが芋とキャベツの炒め)、corn fritter (トウモロコシと肉の小麦粉焼き)、Cornish pastry (肉や玉ネギをパイの皮でくるんだもの)、 crumpet(ホットケイキの一種)、eel pie and mash(魚やパセリをパイの皮でくるんだもの)、faggots and peas(豚肉、レバーとグリーンピース)、fish and chips(魚といものフライ)、jellied eels(ゼリーでくるんだ鰻)、 lasagna(薄い板状のパスタ料理)、mussels(カラス貝の酒蒸)、peas pudding(グリーンピースをつぶしてプリンにしたもの)、ploughman's lunch(チェダーチーズのサンドウイッチ)、porcupine meatballs(米とひき肉のミートボール)、pork pie(豚ひき肉入りのパイ)、sauerkraut(ドイツ風塩漬キャベツ)、sausage roll(ソーセージ入りのロールパイ)、Scotch egg(ゆで卵入りのミンチかつ)、shepherd's pie(マッシュポテトと肉のパイ)、steak and kidney pie(肉と腎臓入りのパイ)、steak and kidney pudding(肉と腎臓入りのプリン)、tacos(メキシコ流のパンケイキ)、toad-in-hole(うどん粉で巻いたソーセージ)

尚、Brighton rock は金太郎飴のイギリス版であり、cotton

candy は綿菓子のアメリカ版である。また西洋では普通に食べられている食材でも、日本では殆ど食べられていないものがあり、その逆もある。後者を英語に訳しても殆ど通じないことが多いが、あえて少しだけそんな例を挙げておこう。

えのきたけ=velvet shank、椎茸=oak mushroom、しめじ=wet land mushroom、なめたけ=winter mushroom、椈(ぶな)しめじ=beech mushroom、松茸=pine mushroom、荔枝（レイシ）＝lychee、春菊＝crown daisy＝garland chrysanthemum、菜の花＝rape blossom、小松菜＝mustard spinach、紫蘇＝beefsteak plant =perilla、白菜＝Chinese cabbage＝Chinese endive

あおやぎ=trough shell、浅蜊=cockle、蜆(しじみ)=freshwater mussel、蛤(はまぐり)=clam、ホタテ=scallop、むらさき貝=mussel、鱒(ます)＝trout、鮎＝sweetfish、鮒＝crucian（carp）、カマツカ＝gudgeon、しいら＝dorado(s)、鯛=seabream、赤魚＝seachub、淡水魚＝freshwater fish

尚、「お召し上りですか、お持ち帰りですか？」は、Here or take out？という。また汽水は brakish water、鹹水(かんすい)は brine、桿水(かんすい)は lye water、塩水は salt water、海水は seawater、としておこう。鹹水は食品保存用に使う塩水をいい、桿水はラーメンに黄色い色を付けるための液体のことである。

4－3　修辞法

修辞法(rhetoric)とは言葉を効果的に使って、文章を適切に美しく表現する技法である。直喩(simile)・隠喩(metaphor)・換喩(metonymy)・声喩(onomatopoeia)・擬人法(personification)などの比喩(imagery)のほかに、誇張法(hyperbole)・反語法(rhetorical question)・対句(antithesis)・倒置(inversion)・調喩(allegory)・婉曲(えんきょく)語法(euphemism)・逆説(paradox)などがあり、日英でさほどの違いはないので文章などを書くときに気をつければよい。本節ではまず修辞的文法とそれに関連のある事柄を取上げ、次に修辞的観点からのみならず文法的にも正しくないのに日常使われている、いわば型崩れした英語の例などを取上げてみよう。

修辞的文法(rhetorical grammar)とは文法的には必ずしも誤っていないが、修辞的見地からは必ずしも正しいとは言えないような文の研究をいう。こうしたことに気をつけて文章を書くことは大変に良いことなので、その大雑把な概要をここで集めておこう。以下の例文は準国家試験である通訳案内業試験に出題されたものであり(一部は除く)、矢印の前が修辞的に誤った文で、後ろが正しい文である。

a)　Faulty parallelism(並列構文の誤り)

これは等位接続詞(特に相関接続詞)で結ばれる語群は、類似の文法的要素でなければならないとする原則のことである。

He was neither willing to pay nor was able.→ He was neither willing nor able to pay.

They promptly hired a house, and masters were engaged, opening the academy. → They promptly hired a house,

engaged masters and opened the academy.

ｂ) Unclear pronoun reference(不明瞭な承前代名詞)

代名詞はそれを受ける先行語句が明確でなければならない。

They certainly treat you well in a London hospital. → Patients are certainly treated well in a London hospital.

The Secretary told the reporter that his statement was incorrect. → The Secretary told the reporter that the statement in the newspaper was incorrect.

c) Misplaced modifier (修飾語句の位置の誤り)

修飾語句の位置に注意しないと被修飾語句が複数可能となり、意味が曖昧になる。

I'm reading Thackeray's Henry Edmond, who is one of the best authors of the 19th century. → I'm reading Henry Edmond by Thackeray, one of the best authors of the 19th century.

Here's an advertisement about a piano for sale by a widow in the first class. → Here's an advertisement by a widow about a first-class piano for sale.

ｄ)Dangling modifier(懸垂修飾)

主文の主語と文法的にしっくりしない修飾句、または節は使ってはいけない。

Entering the classroom, a large blackboard caught my eyes. → Entering the classroom, I caught sight of a large blackboard.

The address was concluded by quoting a passage from Milton. → He concluded his address by quoting a passage

from Milton.

e) Faulty predication (誤った主述関係)

主語と述語は意味内容も正しく呼応している必要がある。

Japanese tourists have increased recently.→ The number of Japanese tourists has increased recently.

You're his age.→ You're of his age.

His opinion is not the same as his parents.→ His opinion is not the same as that of his parents.

ｆ) Garbled sentence (混乱文)

これは内容の混乱した文、または文の始りと終りが首尾一貫しない文をいう。

Defending liberty with such vigor, my opinion is that Milton is the leading advocate of liberty of time. →Milton's vigorous defense of liberty leads me to the opinion that he's the leading advocate of liberty of his time.

ｇ) Redundancy (冗長文)

これは同じ意味の語句を、不必要に重複させた文をいう。

He laughed almost through the entire show.→ He laughed almost throughout the show.

He died the next morning April 15, 1865 at about 7a.m. → He died about 7 a.m., April 15, 1865.

ｈ) Incorrect omission (誤った省略)

文法的構成を犯したり、意味の曖昧さを伴う所まで省略してはいけない。

We have and will again talk to him about the plan.→ We have talked and will again talk to him about the plan.

It’s raining west of Tokyo.→ It’s raining western part of Tokyo. または It’s raining far west from Tokyo.

次に修辞的文法と関連して訳し方の技法について考えてみよう。英訳にしろ和訳にしろ、大体に於て適切に文章の組換をして、後は 1 語 1 語単語変換してゆけば、英語らしい英語又は日本語らしい日本語が出来上がるのが原則である。しかし中にはもう一工夫しないと訳せない場合とか、自然な文章にならないとかの場合もある。このような場合として以下のような例が考えられる。

a) 人や動物を主語にせず、無生物を主語にすると良い例

私はエマに愛情を寄せる。My heart goes out to Emma.

困ったことになった。Things have come to a pretty path.

池には魚が沢山いる。The pond is teeming in fishes.

根っこにつまずいた。A root tripped me.

キーオの最後の活躍の望みは怪我で砕かれた。

Injuries hamper Keough’s desire for final fling.

ｂ)日英で同一品詞が対応するとは限らない場合

哀れにも少年は失恋した。→哀れな少年は失恋した。

A poor boy crossed in love.

声を出してですか、それとも出さないで読むのですか。→大声でですか、それとも静かに読むのですか。

Shall I read it aloud, or silently?

あなたは何番目の兄弟ですか?→あなたは何人年上の兄がいますか? How many elder brothers do you have?

レイガンは何代目の大統領ですか?→レイガンのアメリカ大統

領での順位は何ですか?

What does Reagan stand in the order of American Presidents?

鉛筆や消しゴムは散らかりますね。→鉛筆や消しゴムはより多くのごった返しとなりうる。

Pencils and erasers can make more clutter.

ｃ)名詞が沢山ある文では、人を表す名詞とそうでない名詞を一緒にして、主語とか目的語にしてしまわないこと。

夏から初秋にかけて夏山登山、修学旅行、避暑客、研修生、会議の客がなだれ込む。From summer to early autumn, visitors swarm to the town for mountain climbing, graduation trip, summering, study and conference.

ｄ)日英で互いに対応する概念がない場合

・箸で**はさみ**なさい。→箸でつかみなさい(Take it by chopsticks), 又は箸で持上げなさい(Pick it up by chopsticks)。「はさむ」という語は箸を前提とした語のようなので、それのない西洋では「持つ」、「持上げる」または「つかむ」で表現せざるを得ない。

・Say は「何々をいう」、tell は「誰々に何々をいう」の意味である。remark は「**気づいて何々という**」の意味だけれども、日本語ではこの意味を一語で表す語はないと言える。 He remarked that the weather was bad.（彼は天気が悪いことに気づいてそう言った)。 “That’s a bad cut”, she remarked.（彼女は「これはひどい切り傷ね」、と気づいてそう言った)。 I remarked on the way he limped in.（私は彼がびっこをひいているのに気づきそう言った）

e) 日英で時制が一致しない例

・英語では現在形でも日本語では過去形になる場合：

A is over.（Aは終った）。 And there comes to be no one.（そして誰もいなくなった）、など。

・英語では未来形でも日本語では現在形になる場合：

Tomorrow will be Sunday.（明日は日曜日です）、など。

f) かなりの意訳を要する場合の例

・いただきます!―ごちそうさま! Help yourself !―It was delicious. フランス語では Bon appétit!（良い食欲を）という表現が「いただきます」に相当するが、これを英語に訳して Good appetite! と言ってもあまり通用しない。尚、食前食後の祈りを Say grace.という。また「満腹しました」は I'm full.又は I'm stuffed.であり、I' m fed up.というと「あきあきした」の意味となるので注意のこと。

・只今!―お帰りなさい! I'm back!―Welcome back.（但し日本語ほどは使わない）。

・「象は鼻が長い」は「象は鼻が長いという特徴がある」と考えて、An elephant has the feature that its trunk is long. と訳せるだろう。また「愛すればこそ」は Love makes more.または Love will do more. と訳せるだろう。

本款（ほんかん）の最後に英語での手紙の書き方をまとめておこう。まず**頭語**として「拝啓」にあたる Dear Sir, Dear Madam, Dear Mr. X, などを読点(,)をつけて書き、次に**本文**を書けばよい。「貴社ますます御清栄のことと…」「毎日暑い日が…」などのような**前文**は入れなくてよい。そして最後に敬具や頓首にあたる、Sincerely yours, Truly yours, などの**結語**を書き、**自筆の署名**

を入れれば出来上りとなる。あとは手紙として見栄えの良いように、適当に段落をつけて作成すればよく、また日付は通常右上に書きその下に自分の住所を書く。相手方の氏名と住所は左上の Dear Sir, などの上に書く。

ついでに各種の書類、例えば履歴書などに書く、きまり文句も少し挙げておこう。

I hereby certify the above statement to be true and correct in every detail. （上記の通り相違ないことをここに証明します）

The above is true to the best of my knowledge and belief.

（以上述べたことに相違ありません）

Occupation—None（職業—なし） The rest is omitted.（以下省略）Educational background（学歴） Professional career（職歴） Sanctions—None（賞罰—なし）

型崩れした英語

いわゆる口語調の英語では、文法的にも修辞的にもおかしい表現が多々あり、これらが普通の会話の中では頻繁に使われることも多いので、本款で少しまとめておこう。

a）意味不明の it が多用される傾向がある。

Blow it!（もう少しだったのにな!） Bring it! （かかってこい!）Come off it.（止めてくれよ） Fuck it!（くそったれ!） You name it.（自分で言ってみて下さい） You'll have to rough it.（不便を我慢しなければなりません） We must hand it to him for coming early.（早く来られたのは彼のおかげだ） The cassette has it all over the CD in convenience.（カセットは CD よりも便利さで優っている） The detective had it in for

him.（刑事は彼に恨みをいだいていた） I've had it with souvenirs.（お土産はもうお手上げ） We can't take it any more.（もう我慢できん） That's the trouble with it.（だから具合が悪いんだよ）

b)主語が省略されたり、'd, 'll, 've などの省略形や、ain't, gonna, gotta, wanna などの形が多用される。

(Do you) Wanna go to the flicks?（映画行かない）。(I) Give you a lift?（乗ってかない）。 How'd you guess?（did の省略。どうして分ったの?） That must've been the coward's way out.（それは卑怯者の解決策には違いないな） The moon ain't gonna [isn't going to] rise in the sky.（月はもう空に昇って来ることはない）

c）形容詞の形で副詞にしたり、接続詞としての like を多用したり、3 人称単数にも do を使ったりすることも多い。

It **sure** has been **that** long.（そんなに長かったのさ）

He was **that** weak [so weak that] he could hardly stand.（ひどく疲れていたので、彼は殆ど立っていられなかった）

It's not **like** [because] I want to work with you.（あなたと仕事したいというわけじゃないのよ）

My baby **don't** care.（俺の彼女はおかまいなしさ。）

d）日本語では四字熟語と云うと諸行無常、明鏡止水、山紫水明などのような意味深長な良い言葉が多いが、英語では四字単語(four-letter word)というと「下品な語」という意味がある位に、品のない語の多くは 4 文字である。日本人がこうした語を使うのは良くないが、語彙を増やすという観点からここで列挙しておこう。

穴=cunt、隠語=cant、一発ヤル=bang、陰核=clit(oris)、液=jizz、ケツ=arse、シリ=ass、性交=boff、チクビ=mams、チンボ=cock、マンコ=pussy、ムスコ=stud、ムスメ=poon、ワレメ＝twat、ヤル=fuck、舐める=lick、吸う=suck、猥談(わいだん)=smut

・He dropped his pants at the drop of a hat and said, “Would you like some **cheese** with your **whine**?”（彼は待ってましたとばかりにズボンを下げ、俺の立派なので泣かせてやろうか、と言った）

・She alleged that the teacher got suggestive and **made a pass at** her.（教師はいかがわしい事を言い始め、なれなれしい事をしたと彼女は主張した）

・Catherine m’a dit, “C’est la première fois que j’ai vu le p-n-s des jaunes. En fait, il est jaune.” （わたし黄色人種のチ〇ボって初めて見たけど、やっぱ黄色いのね、とカトリーヌは僕に言った）。

注：たまにはフランス語も良いかと思い、フランス語で書いてみた。若い頃に耳から覚えた言葉というものは、やはりしつこく覚えているものである。

以上ここで取上げた単語は、文字通りの意味(denotation)が悪いので、その使用を避けることは容易だが、言外の意味(connotation)が悪い単語は仲々と気づかないので厄介だ。例えば belly（腹）は stomach を使った方が良いし、French lesson(フランス語の授業)は「愛の手ほどき」、morning glory(朝顔)は「朝立ち」の意味にもなるので気をつけた方がいい。逆に pink(桃色)は嫌らしい意味はなく、pink gums は健康的な「桃色の歯茎」の意味である。また通常桃色の紙であることから、pink slip は「解

雇通知」の意味にも使われる。ただ「桃色のスリップ」の意味も、もちろんある。

品のない単語が出てきたついでに、もう少しだけ下品な単語や文章を続けよう。

うんこ=crap、うんち=number two、クソ=shit、大便=feces、排泄物=excrement、フン=dung、排泄する=excrete、排便する=defecate、検便=stool examination、こやし=manure、堆肥(たいひ)の山=compost heap、有機肥料=organic fertilizer、屁=fart　汚物-=muck　宿便＝fecal impaction、お通じ＝bowel mouvement、胎便＝meconium、硬化糞＝coprostasis、食糞症＝coprophagia

おしっこ=pee、おちっこ=wee、ちっち=number one、小水=peddle、小便=piss、尿=urine、唾液(だえき)=saliva、痰(たん)=phlegm、唾(つば)=slaver、タレ唾(つば)=slobber、吐き唾=spit、涎(よだれ)=drool、鼻水=snivel、口臭=halitosis

イヌ=sleuth、ガサ入れ=crackdown[roundup]、カタギ=solid[honest]、現ナマ=dough、スケのヒモ=gigolo、ダチ=bull、タレ込み=tip-off、テイレ=bust、デカ=dick、ブツ=stuff、ポリ公=fuzz[gumshoe]、負け犬=pooch

麻薬または**ヤク**とは中枢神経を麻痺させ、一時的に幻覚症状を起させかつ常習性のある薬物をいい、**覚醒剤**または**シャブ**とは中枢神経を興奮させ、一時的に気分をすっきりさせかつ常習性のある薬物をいう。

By a narcotic or a dope is meant a habit-forming drug which brings on temporary hallucination by paralyzing central nerve, and by a psychostimulant or a pep pill a

habit-forming drug which causes temporary refreshment by stimulating central nerve.

最近では煙草や酒をやめる人が増えたが、その反面、ヤクやシャブをやる人が増えたのは遺憾なことである。特に前 2 者は中国に持って行っても死刑にはならないが、後 2 者は死刑になるのでお気をつけ下さい。

Recently a lot of people stop smoking or drinking alcohol. But it's regrettable that the number of potheads, junkies or drug addicts has been increasing. Even if you took tobaccos or alcohol to China, you wouldn't be condemned to death, but if you took downers or uppers to China, you would be condemned to death. So take heed.

注：①主な麻薬としては、ケシ(poppy)の実から作った粉である阿片(opium)、阿片を精製して作った結晶であるモルヒネ(morphine)、モルヒネのアセチル誘導体であるヘロイン(heroin)、ライ麦の穂(ear)に細菌が寄生して作られた物質の抽出物であるリゼルギン酸ジエチルアミド(**L**ysergic **A**cid **D**iethylamid)がある。また麻(hemp)の葉から作ったヤクで煙草のようにして吸う大麻(cannabis)、ハシシュ(hashish)、マリファナ(marijuana)、及びコカの葉から作った結晶であるコカイン(cocaine)がある。

②主な覚醒剤としてはフェニル・メチル・アミノプロパン(phenyl-methyl-aminopropane)及びその塩類(chlorite)が殆どであり、その他にアンフェタミン(amphetamine)、ベンゼドリン(benzedrine)、メチレンジオキシメタフェタミン(Methylene Dioxi Metha Phetamine. **MDMP**)などがある。またヒロポン

(philopon)は塩酸メタフェタミン(chloric metha-phetamine)の商標名である。

③ The Beatles という 4 人組の作った歌に、“**L**ucy in the **S**ky with **D**iamonds (お空で金剛石を持ったルーシーちゃん)” というものがあったが、これは LSD という**幻覚剤**(hallucinogen)をもじった歌とされている。しかし LSD というのは正確にはドイツ語の頭字語(acronym)であり、英語では上記のように LAD になるということを一言付け加えておこう。同じようなことはナトリウムの Na、カリウムの K についても言え、英語では前者は sodium、後者は potassium というので注意のこと。

最後にすでに何度も書いたけれども、言葉は耳から音で覚え、口からそれを言ってみるのが最善の策である。しかし**次善の策**(the second best)としては、身の回りにあるすべての事柄を英語でではなく、英単語でいいから言えるように訓練することと言える。そのためには和英辞典を常に持っているとよい。ただ残念なことに、日本で発売されている殆どの和英辞典には発音記号が付いてない! 基本語 3000 語位はいいとしてもそれ以上の単語には、原則として発音記号の付いた和英辞典の発売が望まれるところである。そして身の回りの殆どが英単語で言えるようになれば、今度はそれが英語の文章となって口から出てくる日は、そう遠いことではないと思う。

薬草喩品第五　共通語への道

5－1　世界の言語

共通語(common language)とは、1 つの地域の中に多数の言語が存在しているとき、全ての人に使えることを目的として定められた言語をいう。　**標準語**(standard language)とは、1 つの国の中に多数の方言が存在しているとき、全ての人に使えることを目的として定められた言語をいう。また**方言**(dialect)とは、ある言語に対して同族関係が証明でき、かつ生活上のあらゆる場面では使えるとは限らない言葉をいう。

2010 年現在、世界には 190 位の国と地域があるとされ、そこで使われている言語は、数え方にもよるが 2000 種位あるようだ。割算すると約 10 言語／国となる。ただ 2000 という数字は覚えやすいから勝手に私が決めたものであり、言語学者により 500 から 3000 位までの差がある！　言語学(linguistics)という学問があるが、その内容は言語学者の数だけ言語学があると言っても言い位の大らかなものゆえ、あまり細かいことは無視することにしよう。日本の場合は標準語の他に、アイヌ語と琉球語がすぐに浮ぶが、その他には 7 つもあるとは思えないので 5 つ位としておこう。

一般的に言って数字が大きいと立派とみなされる傾向が強いが、特に経済学の分野におけるものの考え方はそうである。しかしウドの大木という言葉もあるように、大きいことは決して良いこととは思えないが、まずは世界の言語の使用者数を多い順に並べてみよう。**母語話者**の順で並べると①中国語(10 億)、②英語(3.5 億)、③スペイン語(2.5 億)、④ヒンディー語(2 億)、

⑤～⑦アラビア語・ロシア語・ベンガル語(各 1.5 億)、⑧ポルトガル語(1.4 億)、⑨日本語(1.1 億)、⑩ドイツ語(1 億)、となるようだ。

次に**公用語話者**の順で並べると①英語(14 億)、②中国語(10 億)、③ヒンディー語(7 億)、④スペイン語(2.8 億)、⑤ロシア語(2.7 億)、⑥フランス語(2.2 億)、⑦アラビア語(1.7 億)、⑧ポルトガル語(1.6 億)、⑨マレー語(1.6 億)、⑩ベンガル語(1.5 億)、となるようだ。

語族(family of languages)とは、同じ祖語から分れ出て、互いに共通点があると考えられる言語集団をいう。語族には印欧語族、ハム・セム語族、ウラル・アルタイ語族、インド・シナ語族、マライ・ポリネシア語族、アフリカ語族などがある。しかしここでも言語学として確立した定説はないようなので、本書では五大陸と五大人種(黒・栗・黄・茶・白)の色分けを基準として、次のような **10 種**に分けることにした。ただこれは語族というより、「地域別の世界の言語」分類である。

ヨーロッパ語族：英語・独語などの白人諸国の言語

インド・イラン語族：サンスクリット語、ヒンディー語、ネパール語、ペルシャ語、パシュトゥー語、など

セム語族：アラビア語、ヘブライ語、エチオピア語など

ハム語族：クシ語、ベンベル語、古代エジプト語、など

ウラル語族：ハンガリー語、フィンランド語、など

アルタイ語族：トルコ語、モンゴル語、ツングース語、満州語、日本語、韓国語、など

シナ・チベット語族：中国語、タイ語、チベット語など

オーストロネシア語：マライ語、マダガスカル語、タガログ

語、ベトナム語、台湾語などのインドネシア語派と、オーストラリア先住民や太平洋などの島国の言語であるポリネシア語に分れる。

アメリカ語族：エスキモー語、インディオ〔アメリカン・インディアン〕諸語、アステカ語、インカ語、マヤ語

アフリカ語族：セム語族とハム語族を除いたアフリカ黒人の言語で、スーダン語派、ハンツー語派、コイサン語派の3つに分かれ、全部で500種位ある。

尚、スワヒリ語とハウサ語はアフリカ諸国の共通語になりつつある。またヨーロッパ語族はスペイン語、ルーマニア語、イタリア語などの**ロマンス語派**、チェコ語、ロシア語、マケドニア語などの**スラブ語派**、英語、スウェーデン語、ゴート語、ドイツ語などの**ゲルマン語派**に分けられる。

ついでに**アステカ文明**(the Aztecan Civilization)とは、AD14からAD16世紀頃に、メキシコ高原で栄えた文明をいう。**アンデス文明**(the Andean Civilization)とはペルーの中央部アンデス地帯で、BC2500年からAD1546年まで栄えた文明をいい、**インカ文明**(the Incan Civilization)ともいう。**マヤ文明**(the Mayan Civilization)とは、中央アメリカのグアテマラあたりを中心に、BC2500年からAD1546年まで栄えた文明のことである。後2者はスペイン人が滅亡させた。

次に「文字別の世界の言語」の分類を考えてみよう。ここでも以下の10種に分けることにした。覚えやすいから。

ギリシャ文字：ギリシャ語

ラテン文字：ラテン語、英語、独逸語、ハンガリー語、ルーマ

ニア語、ポーランド語、スワヒリ語、タガログ語、トルコ語、マレーシア語、など

ロシア文字：ロシア語、モンゴル語、ブルガリア語など

アラビア文字(みみず文字)：アラビア語、パシュトゥー語、ペルシャ語、など

ナーガリ文字(干柿(ほしがき)文字)：ヒンズー語、ネパール語など

クメール文字(視力表文字)：ビルマ語、ラオス語、など

漢文字：中国語、日本語、韓国語。西夏文字や契丹文字は漢文字の変形といえる。

スコータイ文字(象さん文字)：タイ語

補助文字：日本の仮名(米粒文字)、ハングル文字、など

現在不使用文字：モンゴル文字、フェニキア文字、象形文字、楔形文字、など

上記の分類で括弧書したのは、それらの文字を見たときの印象を簡単に書いてみたものである。例えば日本の仮名は外国人から見れば、米粒が並んでいるように見えるのではないだろうか? あくまで感じなので、口に出しては言わない方が良いだろう。尚、クメール文字はモン文字とも言うようだ。この分類から分ることは、ヨーロッパ白人の言語は文字の種類も数もメッチャ少ないのに対して、アジア・アフリカ言語では文字の種類も数もメッチャ多いということだ。漢文字は中国では 5 万字位あると言われるから、目眩(めまい)がしてくるが一文字が一単語と考えれば、英語でも 5 万単語はゆうにあるから、たいしたことでもないと言えるのかな?

ここで少し定義を書いておこう。**ラテン文字**とは、ローマでラテン語を書き表す文字として成立し、欧米各国をはじめとし

て、世界の諸国で使われている表音文字(phonogram)をいう。これはローマ字ともいい、BC1400 年頃に出来たフェニキア文字を改良して作られた。**アルファベット**とは、ラテン文字やその他の文字記号を、一定の順序で並べて作った字母表をいう。例えばアラビア文字を一定の順序で並べて作った配列は Abjad と呼ばれ、仮名文字を一定の順序で並べた配列は五十音図(the Japanese syllabary)と呼ばれる。また世界の言語の音を表すために作られた発音記号表は、国際音声字母(International Phonetic Alphabet) と呼ばれ、ラテン文字の配列表も(狭義の)アルファベットと呼ばれる。**ローマ字表記**とは、ラテン文字を使って日本語その他の言語の音を表す方法をいう。日本語の場合には訓令式(第一表式)と、James Curtis Hepburn が考え出したヘボン式(標準式)とがある。

世界の言語の分類の 3 番目として、「文法別の世界の言語」を挙げておこう。これはいまだに研究が進んでいないせいか、大体に於て次の 5 つに分けられているようだ。

屈曲語(くっきょくご)：ロシア語、ドイツ語、サンスクリット語、など
膠着語(こうちゃくご)：ハンガリー語、モンゴル語、トルコ語、朝鮮語、フィンランド語、など
孤立語：タイ語、中国語、ベトナム語、など
抱合語：アイヌ語、エスキモー語、インディオ語、など
中間語：英語、仏語、日本語など多数

屈曲語(inflectional language)とは、語が格などによって豊富な変化や活用を持ち、これによって文法上の関係を表す言語をいう。**膠着語**(agglutinative language)とは、実質的意義を表す

語に、付属的な助辞が付いて文法的形式を示す言語をいう。**孤立語**(isolating language)とは、単語自身には文法的形式を示す変化はなく、語の配列の順序によって文法的形式を示す言語をいう。**抱合語**(incorporating language)とは、1つの動詞の中に、主語や目的語も含まれてしまう言語をいう。そして**中間語**(intermediate language)とは、一部の語は格などによる変化や活用をもち、また一部の場合には語の配列の順序によって、文法的形式を示す言語をいう。英語や仏語はこれである。ただ仏語は名詞の格変化はないが、その他の品詞の殆どが変化するので、英語より屈曲語に近いと言える。

ただ中間語などという分類肢を作ってしまうと、すべての言語はこれになってしまう危険もある。例えば中国語にもいくつかの助辞があるし、日本語にも語尾変化がある。またフィンランド語は名詞が16種位の格変化する点からは屈曲語だが、一つの単語がもの凄く長いものが多く、膠着性が強い点からは膠着語ともいえる。そこで本書でいう中間語は、屈曲語と孤立語の中間的性格をもつ言語を主として指すことにしている。

その理由は屈曲語の現在での典型がロシア語とドイツ語、孤立語の典型が中国語であり、これらの国々は現在及び過去に於ても世界の歴史に少なからずの影響を与えている。そしてこれら2つの言語の中間を行くのが英語であり、右にもよらず左にもよらず**中道を行くこと**が、いかに得をするかが言語を通しても分る気がするからである。国民性というものも、意外と言語構造からの影響もあると私には思われるのである。

膠着語の特色は後置詞(日本語では助詞という)が多いことであり、例えばハンガリー語はラテン文字をもちいる膠着語であ

り、後置詞は 50 種位ある。またフィンランド語はメッチャ長い単語が沢山あるようで、せっけん売り＝saippuakauppias は、世界一長い一単語の回文と云われている。日本語も膠着性の強い言語であり、「飲まさせられたくなかったらしいよ」などのように助辞を沢山くっつけた文を作ることができる。このことを利用して作られたグータラ文の典型例は、最高裁の判事らが書く判決文であろう。読点が一つもなしの文が 15 行くらい続くのはしょっちゅうであり、どこに主語があるのかさっぱり分らない文章が殆どである。これで格好いいと思っているのだろうが、大人気ないことと私には思われる。

ついでに言うと、医者とか総理大臣、アメリカ大統領なども大人気ないことをして喜んでいるように見える。大きな総合病院に行くと患者は朝の 8 時頃から待合室に待たされ、11 時頃になるとようやく診察が始り、ものの 5 分でそれは終ってしまう。こういう事をして医者たちの多くは、自分達が偉い人だと自己満足しているようだ。総理大臣も同じで、閣議室の前に閣僚たちを待たせ、最後に現れて写真撮影が済むと、真っ先に逃げるように閣議室に消えていく。あれで格好いいつもりでいると思うと笑ってしまう。

アメリカ大統領も同じで、先進国首脳会議などでは、最後に現れて、最初に逃げるようにして帰って行く。あれで嬉しいのだろうと思うと、まあ何と大人気ないのだろうと多くの人々は思っているに違いない。誰かが一番最後に来なければならないのだから、総理大臣や大統領の場合にはしょうがないことかも知れないが医者の場合には、もう少し誠意をもってお客様である患者に対して接するように教育してやるべきであろう。医者

だけが大変な仕事をしているわけではないことを、もっともっと分らせるようにしてやらねばならないだろう。

しかしそれにしても毎年のように、首脳会議やその他の会議をやって、何百億円の金を使っているようだが、何の意味があるのだろうと言いたくもなるものである。テレビ電話もあるし、インタネットもあるのだから、何もツラ合せをしても何の意味もないことであろう。それとも裏では非常に重要な取決めがなされているのだろうか?　分らない。

さて孤立語の特徴は一言で言ってしまうと、文法がいらない言語といえる。例えば中国語を例にとれば、漢字の意味と読み、書き方さえ覚えれば、後はそれらを適当に並べれば、中国語の文章になってしまうゆえ、確かに文法は要らないともいえる。形容詞も動詞も変化しないし、人称代名詞も変化しない。敬語法も殆どないし、動詞も相はあっても時制はないので、漢字の一字一字が独立した文法的対象といえる。しかしそうだからと言って、中国語が簡単で誰にでも分るということではなく、いわゆる西洋語や日本語とは異なった言語体系にあるということである。中国人が自分達は「世界の中心に開く華である」という、**中華思想**を持っているのもこうした言語の構造とも無縁ではないだろう。

抱合語という言語もあまり世界には沢山はない。というかあまりよく知られた国の言語にはないので分りにくい。しかし日本語にも抱合単語とでも呼ぶべきものは沢山ある。例えば「地震」は「地面が震える」ことだし、「成功」は「功を成す」ことだから、語の中に主語＋動詞または動詞＋目的語が入っているので

抱合単語といえる。この観点からすれば、日本語の熟語は殆どが抱合単語となる。そしてこれがもう少し複雑になったのが抱合語、つまり抱合言語であるといえる。

例えばアイヌ語では「aentusanire」という語は、「人が私に綱を持つさせる」、すなわち「人が私に綱を持たせる」という意味の1つの動詞になるようだ。アイヌ人は顔付はどちらかと云えば白人系だが、色は我々と同じく黄色いという、いわゆる**縄文系人**に属する人々であり、エスキモー人やアメリカ・インディアン人もよく似ている。そしてしかも彼らの言語の殆どが抱合語であることからしても、何らかの親戚関係があるのであろう。

以上で現在地球上に存在する国々の言語を大まかに分類してみたが、この他に**人工言語**と**混成語**と云われるものもある。人工言語はエスペラント語や Globish(=Global English)などが有名だが、これらは次節で検討し、まずは混成語について考えてみたい。混成語(lingua franca)の有名なものとしては、バンツー語(Bantu)をもとにして生れたスワヒリ語(Swahili)がある。

現在これはウガンダ、ケニア、ザィール、ソマリア、タンザニア、モザンビーク、ルワンダなどで使われ、その話者は4000万人といわれている。文字はかってはアラビア文字が使われていたが、現在ではラテン文字が使われている。尚、リンガ・フランカという語は昔は地中海地方で話されていたイタリア語、ギリシャ語、フランス語などの混合語を指していたが、今では混成語一般をさす用語として使われている。

次に有名な混成語としては、クレオール語とピジン語が挙げられる。**クレオール語**(creole)とは、17，8世紀にヨーロッパ白

人が世界に植民地を作った結果、現地の人々の言語と白人のそれとが混合、混同して生れた言語をいい、**ピジン語**(pidgin)とはとくにアジア諸国で生れた、英語をもとにしたクレオール語をいう。クレオールという語はスペイン語の criollo(クリオーリョ)を語源とし、仏語の créole が英語にそのまま入ってきたようで、元の意味は「植民地生れのヨーロッパ白人」というものである。これに対してピジンの語源は色々あるようだが、business という英単語の中国語訛りとするのが通説のようだ。

現在のところクレオール語はピジン語も含めて、世界に 150 種位あるとされる。殆どは太平洋や大西洋の島国で、フランス人が植民地を作った所に多い。イギリス人はお利巧さんであり洗脳が上手なので、現地の人々も素直に英語を公用語として受容れてしまったせいか、クレオール語は少ない。その点フランス人は下手なので現地人の反感をかい、混成語としてのクレオール語が沢山出てきたようだ。更に言えば、スペイン人はフランス人よりもっと洗脳が下手だったせいか、スペイン語系のクレオール語は殆どない。実際、インカ文明にしてもマヤ文明にしても、スペイン人は全滅させてしまっていることはよく知られている。

次にピジン語で有名なものというか有名だったものは、香港中国人の話すピジン英語であろう。「No can do＝できません」とか「Long time no see＝久しぶりですね」などは、今では本物の英語として英米人の間でも使われているが、元を辿ればおそらくは中国商人とイギリス商人らが話していた言葉から生れた表現であろう。同じようなことは、日本人の話すピジン英語である「**竹やぶ英語**＝Bamboo English」についても言える。例えば

salary man という語は、本来の英語なら wage worker＝賃金労働者というべきだが、今では英米人にも通じる単語になっているようだ。

日本人と白人とのピジン語である、竹やぶ英語も長い歴史を持っているといえる。16 世紀の終りにやって来た三浦按針こと、William Adams という紅毛人に始り、ピン・カートン君と蝶々夫人の話していたであろう英語や、進駐軍の兵士と一部の日本人が話していた英語、そして現在の商社員や報道人たちが喋る英語、これら全てが竹やぶ英語と言えるだろう。「ジス イズ ジャパニーズカメラね。ジャパニーズはベルリー勤勉ね」などのピジン英語は、英米人には何とか分っても、日本語も英語もともに外国語である人々には殆ど通じないだろう。四年制大学を出ていてもこんな程度の英語しか喋ろうとしない人々では、外国に行っても全く意味がない。

「蝶々夫人」と言う歌劇がある。これは作り話であるが、その内容は実際に日本の各地や世界の各地で起った可能性は高い。「夢の白色人種の白いチ〇ボが、私の黄色いマ〇コの中を行ったり来たりするなんて！　嗚呼、ドエリャアええー！　ビンカートンもっとビンビンして!」と泣きじゃくる蝶々夫人の顔を、上から眺めおろしながら「黄色人種っておもろい顔しとるな」と心ので思いつつ、牛のようにデカい尻をストンストンさせて楽しむビンカートン君。こうして何万人もの混血、言いかえると雑種が生れてしまっている。

人間は楽しみのための交尾と、繁殖のための交尾を区別できる唯一の動物なのだから、雑種は出来るだけ作らない方が良い。そしてまた、人は自分の行為の結果に対して責任を負うべきな

ので、黄人以外の異色人種とつながった日本人は、それ相応の不利益は甘受すべきである。蝶々夫人も自業自得であり、黄色人種であることを自ら卑下してしまった、外国かぶれのおばさんの物語として受け止めるべきだろう。ただ生れた子については、自分の責任ではなくして雑種になってしまったのだから、親（とりわけ男親）に対して 20 歳になったなら、親権の清算と言う形で一定額の精神的慰謝料が、請求できるとすると良いだろう。

話をもとに戻すと、英語を得意になって喋るのも良くない。なぜなら世界中には英語以外の言語も沢山あり、日本で英語がもてはやされているほどには、英語を重視していない国々も少なからずあるのだからである。例えばヨーロッパ系の白人は、日本人がアフリカのことなど殆ど知らないのと同じく、アジアのことなど殆ど知らない人々が半数はいる。こうした国で日本人が英語で喋るのを聞くと、彼らは「これら黄色い人たちの国は、長いことアメリカの植民地だったから、可哀想に国民は今でも英語で話しているのだね」と考えてしまうものである。こうした事態をさける意味においても、何度も言うように我々東洋系黄色人種の間で共通に使える言葉がほしいのである!

共通語については次節で考えることにして、本節の最後として外来語と和製英語、及び英製和語などについてまとめておこう。**外来語**(foreign loan word)とは、日本語に取入れられた外国語のうち、その外国でもその意味で使われている語をいい、**和製英語**(Japanese English 又は English coined in Japan)とは英語の単語を用いて作られた語ではあるが、英語では異る表現

を用いる表現をいう、と定義しよう。英製和語は和製英語の逆であり、例えば hibachi(火鉢)は焼き肉用の焜炉(こんろ)をいい、Jacuzzi はおそらく蛇口から作った商標名と思われるが、ジェット水流式浴槽のことを云っている。

和製英語の例は山ほどもあるが、オートバイは motorcycle 、ゴールデンアワーは the prime time、コンセントは outlet、シャープペンは mechanical pencil、ダンプカーは dump truck、ベースアップ(ベア)は pay rise 又は wage raise、等々となる!!

通訳や翻訳とりわけフランス語の通訳や翻訳をやっていて一番困るのは、こうした和製英語である。特に大学の経済学部などを出て、かつ英語のエの字も分らない典型的日本人が、得意になって専門用語と称する「竹やぶ英語」を使って喋られたり、文章を書かれたりすると通訳や翻訳をしてやる気もなくなってしまう。自分の立場又は自分から半径 2m位の物や人しか見えない、又は見ようとしない人間ほど疲れるものはない。

日放協の声屋などもこれと同じで、「ディベートとプレゼンテイションの違いはオーディアンスへのインプレションと言え、言葉力アップのためのエッセンスは、マインドコントロールです」などと放送しているのを聞いていると、「まあタワケにつけるメディスンはないな」、と思ってしまう。ピジン語というものも、このような言葉の使い方が積重なって出来上っていくのだろうが、近い将来には日本語自体がピジン語と呼ばれるようになるかもしれない。

こうした訳の分らない語を不必要に導入することは、日本語を混乱させるだけでなく、外国語をも軽蔑する風潮をつけてしまう。和製英語は一部の無責任な報道人らが作り出したもので

あり、自分達を何様と思っているのか知らないけれども、こうした者たちの作りだす語は全面的に無視して、日本語から駆逐すべきだろう。

戦後日本の 4 年制大学を出た人々の大部分も、もう少しお利巧さんになった方が良いのではないだろうか。ロンドン在住の特派員や商社員でも、まともに英語が話せる者は半分位しかいないし、ましてやパリやマドリッド在住の特派員らで仏語やスペイン語をまともに喋れるのは、3 割といないのだから呆れ返る。しかもそれでいてそれなりの高い給料を盗んで、シャアシャアと暮していては、この世ではよくても、あの世では苦労すると思うよ……。

尚、ここで言う「まともに喋れる」というのは、簡単に言えば、現地で現地語で歌われているその時々の流行歌の歌詞がすぐに理解でき、書取りをすれば 90%間違いなく書取れ日本語に訳せる水準としておこう。簡単そうに見えることだけれども、これができる日本人はもの凄く少ないのである。情けないことだ。

しかし日本人だけに限らず、例えば日本に来ている外国特派員達の中でも、日本語がまともに話せるのは半分位しかいないだろうから、御互い様ともいえる。現に英製仏語とか仏製英語とでも呼ぶべき単語がフランス語や英語の中にも相当数あるから、パリ在住のアメリカ人とかロンドン在住のフランス人なども同類項なのかも知れない。

ところで外来語を導入すると、その自国語への表記法も問題となる。この点については原音忠実法が最もよいと思われる。例えば、news はニューズと書くことにする。ただ英語は適当な言語ゆえ、s を「ず」と呼んだり「す」と呼んだりして一定し

ていないので、英語に限っては綴字に忠実に片仮名表記するという方式も良いかもしれない。

更には英語以外の言葉が英語に入り、そしてそれが更に日本語に入っている場合にはどう表記するべきかの問題もある。例えば、champagne はフランス語ではシャンパーニュと発音するが、これが英語に入って英語ではシャンペインと発音され、更にこれが日本語に入ってシャンペンとなったようだ。ただ綴字からシャンパンと発音する人もいるが、これは英語もフランス語も知らない、ドボケ教授らの読み方なので止めた方が良い。

私としてはシャンペンというのが最もよいのではないかと思う。けだし、「シャンペン飲んで、ションベンにしよう、というキャンペーン実施中」というダジャレが美しく作られるからである!?　ただ原音忠実法を徹底すれば、シャンパーニュというのが最もよいであろう。　また缶、珈琲、型録、瓶などはうまく音と漢字が一致しているのでこれでよいが、タバコは煙草ではあまりにかけ離れているので、箱に沢山入っているので「多箱」が良いのではないだろうか。

最後に報道人らが作ったと思われる英製仏語や仏製英語の例を、少しだけ挙げて終りとしよう。まず英製仏語としては le speaker はアナウンサー、l'autostop はヒッチハイクである。仏製英語としては la chemise（シュミーズ）は女の下着ではなく、仏語では男のワイシャツ、la brassière（ブラジャー）も女の下着ではなく、一般的には赤ちゃんの涎（よだれ）かけ、le crayon はクレヨンではなく鉛筆のことである。

5－2　名称も美しく

人工的に作られた世界言語としては、シュライヤーのポラピュック（1879 年)、ザメンホフのエスペラント（1887 年)、ボフロンのイード（1907 年)、ウォールのオクツィデンタル、ペアノのインテル・リングァ（1909 年)、そして Globish などがある。ペアノはGiuseppe（ジュゼッペ） Peano（1858-1932）というイタリア人で、記号論理学を開拓し、不変式論や微分方程式論、ペアノ曲線や自然数論などで有名な数学者である。またザメンホフは Lejzer Ludwig Zamenhof（1859-1917）というポーランド生れのユダヤ人で、眼科医であったようだ。エスペラントはエスペラント語で希望者という意味である。

Globish は地球規模で使われている英語(Global English)を、もう少し分りやすくするため、発音と綴字に規則性を持たせたり、慣用句をもっと少なくして作られた英語のようだが、あまり売行きはよくないようだ。

以上の人工言語の中ではエスペラント語が最もよく普及しているが、それでも英語に比べれば普及率は非常に悪いと思われる。その理由は色々あるだろうけれども、おそらくは言語としてのその響きがあまり美しくないからだろう。人間でもそうだが、ツラがきれいだとウケがよいのと同じである。しかしツラだけはきれいでも、心はウ○コのように汚い女や男も沢山いるし、言語でもフランス語のように響きはきれいでも、それを使っている人々の半数が、ウ○コのように汚い心をしているとあまり普及はしない。心も美しくツラも美しく、知性又は運動神経のいずれかが高いという、三拍子揃った人間のような言語が、共通語として望まれる所である。

そこでまず本書で完成を目指している共通語の名称から考えよう。この点については簡潔明瞭に、完成すべきその共通語でいう**「共通語」**がよいだろう。そしてその響きは聞くだけでうっとりするような美しい言語であるべきだ。具体的な「共通語」の構成は本節で徐々に行うとして、まずはエスペラント語について少し検討しておきたい。

私はエスペラント語が話せるわけではないが、その文法や綴字と発音の関係などを見ていると、非常に分りやすく出来ている。しかし文字は A,E,I,O,U 以外のアルファベットはすべて[o:]という音で終っているし、単語も数字だけは子音で終るものが多いが、その他の多くは[o:]という音で終っているので、あまり響きは美しくない。しかも H は[xo:]という音となっている。この[x]という摩擦音はドイツ語やアラビア語によく出てくる音であり、タンコロを吐くかまたは空(から)タンをきるような音で、あまり感じの良いものではない。

アラブ人の中には「コーラン読み」という商売人がいるようで、本人さんはドエリャアええ一声のつもりで、人々にコーランを砂漠の中で読み聞かせている。しかしアラビア語の分らない外人が聞いていると、破擦音や摩擦音がメチャ多くて、タンコロを詰らせた爺さんが吠えてるみたいで、ちっとも美しくは聞こえない。日本の能や狂言に使われる謡曲もこれと似ており、本人さんはドエリャアええ一声のつもりで吟じていても、外人にはちっとも美しくは聞こえないものと思う。ただ日本語では前にも書いたように、摩擦音はハ行（ha,xi,Fu,he,ho）のうちの xi だけゆえ、さほど聞きづらくはないかも知れない。

話しをエスペラント語のことに戻そう。エスペラント語の

名詞は-o で、形容詞は-a で、副詞の多くは-e で終る。また疑問詞はすべて ki-で始まる。kial＝なぜ、kiel＝どのように、kiam＝いつ、kie＝どこで、kiu＝誰、kio＝何、などである。また文字の音価は一定の規則があり、日本語のローマ字表記のようにほぼ「子音＋母音」の繰返しで書かれるので、発音はしやすい。ただ発音のしやすさと響きの美しさとは逆比例の関係にあるようで、英語のように綴字と発音がメチャクチャの言語の方が響きが美しいというのは皮肉なものである。

エスペラント語の文法については、英語のそれと似ていると言えるだろう。けだし英語の文法というものは、ヨーロッパ白人の言語の中では簡単なもののひとつと言えるからである。すべての動詞は人称による変化はなく、原形に一定の語尾を付ければ現在、過去、未来形になる。また接尾辞が非常に発達かつ整理されているので、これを付けると色々な品詞や違った意味の名詞に変えることができる。すなわち**接尾辞**とは単語の末尾につけて、その単語の意味を拡張させる述語要素をいい、例えば-ej-は場所を表すので kino→kinejo＝映画館となり、また-eg-は程度の大きさを表すので interesa→interesega＝とても面白い、などとなる。

結局のところ、エスペラント語は音と響きはポルトガル語とロシア語を足して 2 で割ったような感じで、文法は英語的で、単語はフランス語などのラテン語系のものとポーランド語系のものが多い。つまりヨーロッパ白人向けの共通語と言えるだろう。しかし如何(いかん)せん響きがあまり美しくないせいか、売行きも今ひとつである。せめてエスペラント語で歌った歌謡曲が、欧米やアジアの歌謡番組で、2，3 曲はいつも上位を占めるような

ことになれば、おそらくはもっと普及するものと思われる。

そこで我が共通語はまずもって、美しい響きをもった言語でなければならない。ただ黄色人種が使う言語だから、白人の言語のような複雑な音は出きるだけ避けたい。現在の日本人とりわけ知識人と呼ばれる人々の大半は、自分達が白人であると思っているような節があるが、イッペン自分達のツラを鏡で見てみるとよいだろう。そうすれば、黄色いツラをしていることが分るはずである。そんな訳で白人と黄人では顔付も違い、舌の長さや喉の構造も違っているだろうから、共通語は黄人でも無理なく発音できる音で構成すべきだろう。日本語の音についてはすでに2－3節で検討したので、ここでは中文（チョンウェン）こと中国語の音について検討してみよう。

中国語の音の特長は、①声調または四声というものがあり、また強弱語勢もあること、②有気音と無気音の区別があること、③3重母音があること、の大きく分けて3つといえる。まず**声調**または**四声**とは、音節毎にすなわち漢字毎にある、音の高低の変化のことである。例えばmaで書くとmā（平板調）、má（上昇調）、mǎ（上下調）、mà（下降調）と表せる。

四声は日本語と同じような高低語勢だけれども、日本語の場合は一単語における高低の付け方であるのに対して、四声は一音節すなわち一漢字毎の母音の高低の付け方である点に、違いがある。中国語を聞いていると何か間延びした感じをうけるが、それはこの四声の区別に原因があると思われる。はっきり言ってあまり美しくは響かないので、我が共通語では四声に相当する高低語勢は止めとしよう。

中国語にはこの他に、強、中、弱、軽という4つの強弱語勢

(stress accent)もあり、結局のところ、16 種もの語勢が中国語にはあることになる。これは少々多過ぎるので、我が共通語では英語と同じく強弱だけの語勢としよう。ただ英語の場合のように各単語に付きまちまちだと覚えるのが大変なので、各品詞につき 2，3 種の原則を作って例外はなしとすればよいだろう。また強弱語勢もあまりに強弱がつき過ぎると、力(りき)みになってしまいまずい。この点につき朝鮮語などは力みがかなり感じられ、あまり響きがよくない。日本語でも演歌歌手の歌う歌の一部には、力みいわゆる「こぶし」が入っており「♪あなた、あなた、あーなた♪」などと吠えながら歌っているのを聞いていると、朝鮮語そっくりだなと思えてくるから、力みは止め、適度な強弱を共通語には付けるようにしよう。

日本語では仮名 1 字が 1 音節であるが、中国語では漢字 1 字が 1 音節であり、音節の冒頭にある子音を**声母**、声母に後続する部分を**韻母**と呼んでいる。例えば「再」[zai]における[z]が声母、[ai]が韻母である。尚、日本語での漢字は音読みと訓読みとがあり、前者は更に呉音読み、漢音読み、唐音読みがあり、後者は 1 字につき数種の訓読みがあるので大変だが、中国語では一漢字につき 2 通り以上の読みがあるのは極めてまれなので、この点は楽である。

次に有気音と無気音の区別に移ろう。**有気音**(aspirate)とは子音を発音するとき、息が口から吹き出る音をいい、**無気音**(unaspirate)とは殆ど吹き出ない音である。中文には 6 系列の有気音と無気音があり（p—b、t—d、k—g、q—j、ch—zh、c—z、)、これは中文特有の区別である。有気音と無気音は前にも書いた有声音と無声音（b—p, d—t, g—k、など）とは違うし、

また日本語には〈カーガ、サーザ、ターダ、ハーバ〉の 4 系列の清音と濁音の対応があるが、これとも違う。尚、中文には清音と濁音の対応は、〈sh(シー)—r(ジー)〉の 1 系列しかない。

このように有気音と無気音とは日本語にはないし、英語や仏語にもないので、これを耳で聞きわけかつ正確に発音するのは難しい。簡単な例をあげると、「北京」という語はかってはPeking と英語などでは書いていたが、最近では Beijing と書く場合が多い。しかしこれをベイジンと発音してしまっては、表示を変えた意味が薄れてしまう。つまり B と j は上記のような無気音を表しているので、ペイチンと読んだ方がよい。つまり「ペ」や「チ」と強く息を出すのではなく、ほんの軽く「ペ」や「チ」を発音すればよい。

とはいうものの普通の日本人には、この音の差を耳で聞き取れる人は非常に少いだろう。ただ日本語でも無意識的には区別している場合もある。例えば「鯛の舌」ではタイのタは有気音の t だが、シタのタは無気音の d である。　同じように「貝の中」ではカイのカは k だが、ナカのカは g である。つまり t—d や k—g などは語頭では有気音的、語尾や語中では無気音的に無意識的に区別して、日本語を喋っていることになる。

言語というものは不思議なもので、子供の頃に耳から音で覚えると本当に色々な音が微妙に違って聞こえてくる。日本人には殆ど区別がつかない r と l や、b と v なども西洋白人の殆どはきちんと違う音として区別して聞き分けている。また逆に h の音を発音しないフランス人は、「額(ひたい)と遺体(いたい)」、「花と穴」などの区別がつかないから、面白いものである。しかしこうした微妙な音の区別があると、共通語の普及には障害となるので、我

が共通語では東洋系黄色人種の言語のどれにもある音だけで、音を構成すべきだろう。

とすると恐らくは日本語の音が基準になってしまう可能性が高い。というのも日本語は有色人種の言語の中ではよく出来た言語であり、そのよく出来たといわれる原因のひとつが、音が少ないことと云えるからである。ただその結果、日本人は外国語の習得が苦手になってしまっているのだから、皮肉なことでもある。簡単な例が「ハシのハシにハシがある」という文でも「橋の端に箸がある」という漢字文が対応しているおかげで、音は同じでも意味のある文章として理解できる。この意味に於て、日本語は耳から音で覚える言語というより、目から文字で覚える言語という変な特色があるとも言えるだろう。

中国語の音の特徴の第 3 番目に関して、日本語の 2 重母音は ya, yu, yo,wa の 4 つであるが、3 重母音以上はない。ただ「青い＝aoi」は 3 重母音、「青い家＝aoi ie」は 5 重母音のようにも見えるが、前者は単語、後者は文なのでそうではない。これに対して、中文には 2 重母音が 9 種（ia, ua, ai,ao, uo, ou, ie, ue, ei)、3 重母音が 4 種（iao, iau, uai, uei）ある。

また中文には**そり舌化韻母**というものがあり、これは母音をそり舌化させる接尾辞「－ル＝－ｒ」をいう。そして**そり舌化**とは母音を発音すると同時に、すばやく舌の先を上顎（うわあご）の前半部（硬口蓋（こうこうがい））に向ってそり上げることである。この[ｒ]で表される音は、英語や仏語にもあるがこの 2 つの言語だけでも微妙に違っているし、中文でのそれとも違っている。また日本語でのラ行の音とももちろん違っている。こういうややこしい音は、共通語では使わないようにしよう。特に中文の[ｒ]は、何とな

く捨てばちに聞こえるのでよくない。

以上で中国語をもとにした、共通語の音のあるべき姿の検討は終りとして、次には英語をはじめとする西洋語の音も検討しておこう。美しいとか美しくないとかは各人の主観の問題であるが、多くの日本人にとっては英語は美しく響く言葉のひとつと捉えられていると思う。そこでその理由を考えてみたら、次の 3 つが思い浮かんだ。

まずは前にも書いたように、英語では文章のみならず各単語にも強弱の語勢が置かれ、メリハリが付けられていることが挙げられる。加えて各単語の子音と母音の組合せが良いことも挙げられる。組合せが良いというかむしろメチャクチャだが、母音だけが 2 つも 3 つも続いたり、子音だけが 2 つも 3 つも続いたりする場合が少いことが良いのだろう。例えば pomade, cocoa, oasis などのように 2 重母音が 2 つ続く単語とか、ドイツ語の Stuttgart や Hertzsprung などのように子音が 3 つも 4 つも続く語が少いし、London とか Richard などのように強勢のある母音以外は、殆ど無視して発音する所が響きの良くなる原因なのだろう。

昔、ビートルズという 4 人組の出演する映画で、ジョンがロンドン行きの切符を買う場面で、“London” と一言いうと、それだけで美しく響いたものだった。そこでそれを聞くため聴衆は一瞬黙り、すぐその後でまたキャアキャアと叫ぶのが、あの映画の通(つう)の見方だったことが思い出される。同じくジョージが “Arthur” と一言いう場面でも、皆んな一瞬静かにしてその美しさを堪能していたものだった。懐かしいと云うか、今も昔も日本人の大半は、自分達も白人の積りでいるのだなとしみじみ

と思う。

このように英語には、英米生れの白人が喋るときれいに響く単語が相当数ある。ただ同じ白人と云っても外国語として英語を習得した人のそれはやはり訛りが少々残る。例えば ABBA というスウェーデンの歌手は、よく聞いているとやはり少々英語がおかしいかなと思えてくるときもある。またアーノルド・シュワルツェネガーさんが選挙運動中、他の候補から「あいつは California という単語すら、まともに発音できないから州知事にはするな」と攻撃されていた。確かによく聞いていると少しだけドイツ語訛りがあるな、と私でも感じるときがある。

そういう私自身も英語や仏語はもちろんのこと、日本語の標準語ですら名古屋訛りが出てしまっている。東京などへ何かを注文するために電話をするときでも、よっぽど注意していても、すぐに「ああ、この人はどこかの田舎から電話してるな」ということがバレてしまうものである。言語は才能のある人以外には本当に難しい。

英語の響きが美しいと思われる第 2 の理由は、音の種類が適度に豊富ということであろう。母音が 20、子音が 25、半母音が 2 つで、合計 **47 音**ということは前にも書いた。これに対して日本語は母音が 5、子音が 15、半母音が 2 つで合計 **22 音**といえる。中国語では声母が 21（b、p、m、など）、韻母が 22、そり舌化母音が 1 で合計 **44 音**といえる。またフランス語では母音が 30、子音が 17、半母音が 3 で合計 **50 音**である。

ただ数が多ければよいというものでもなく、例えば日本語でも名古屋弁といわれる方言では母音が 8 つあるが、とても美しい言葉には聞こえない。少なくとも日本人の間では名古屋弁は

汚く聞こえる言葉のひとつだろうが、日本語の分らない外人が聞くと、名古屋弁は母音が 3 つ多いぶんだけきれいに聞こえるかもしれない。その 3 つというのは赤い（アキャア）、鯛（タャア）などの[ä]、杭（クゥイー）、暑い（アツィー）などの[y:]、青い（アオェー）、遅い（オセェー）などの[Ø:]である。これら 3 種のうち[ä] は英語の[æ]に近いし、[y:]と[Ø:]はフランス語の[y]と[Ø]に近い音である。この点からしても名古屋弁は外国人には多少きれいに聞こえるかもしれない。

しかし人間としての心の汚さが言葉の汚さになってしまっているので如何ともし難い。特に名古屋の少し北にある一宮市という町の住民の 7 割方が喋る名古屋弁まがいの言葉は、これが人間の言語かと思うほどに醜いものである。方言を大切にするのもいいが何事にも限度があるので、それも弁(わきま)えた方がよいと私は思う.....。

話を戻して、[æ]という音は米語で多用される音であり、米語は英語に比べると英語本来の美しさの多少欠けた言葉ゆえ、名古屋弁もあまり美しくはないかも知れない。また米語では巻舌音の[ɚ:]も多用され、これもあまり美しくはない。中国語のそり舌化音の[r]も美しくないのと似ている。ここまでの議論の結論として、言語が美しく響くためにはまずそれを使う人々の心が汚くはないこと、次には美しく響く母音の数が沢山あり、かつ母音と子音の配列が適切でなければならないということとなる。

更には美しく響かせる工夫もいる。例えばフランス語では「上流社会」は haute société となり、発音はオットソシエテである。これだけを聞いていると、とてもきれいには聞こえな

いが、フランス語の流れの中に入れると、まあまあきれいに聞こえてくる。その理由は子音連接(la liaison)や母音省略(l'élision)などがあって、流れがきれいになる工夫がされているからだろう。英語でも例えば、I'll check it. とか No doubt about it.などに於て、単語と単語がきれいにくっ付いて読まれるので、美しい響きになっていると言えるし、各単語が軽い音の子音[t]、[l]で終っているのも美しい原因であろう。この点、日本語も「~です」とか「~書く」などで終る文は、母音の無声化が行われて[u]が発音されないので、朝鮮語などに比べると少しは美しく聞こえると思う。

以上で我が共通語が採用すべき音の問題は終了し、次は文字の問題に移ろう。まずは西洋白人の言語の特色は、文字の数と種類がメッチャ少ないという点が挙げられる。有色人種の言語と比べると、考えられない位に少ない。ラテン文字、ギリシャ文字、そしてロシア文字の 3 種しかなく、しかもロシア文字は前 2 者を足して 2 で割ったような文字ゆえ、新しい文字は殆どないと言える。加えてラテン文字はたった 26 文字しかなく、これだけで白人言語の 8 割方をまかない、かつ黒人の言語や東洋系黄人の言語の一部もまかなっているのだから、タダタダ凄いの一言である! あまりにも優れている文字ゆえ、もはやこれ以上の進歩は望めない文字体系とまで言えるだろう。

そのラテン文字の特長は表意文字であることと、見栄えがまあまあ良いという 2 つに求められるだろう。まずは見栄えの良さについて考えてみよう。日本の企業の一部にも自社製品の広告や包装紙などにラテン文字を使い、子供が書いたようなメチ

ャクチャな英語や仏語を使っている場合が結構ある。こうしたことはラテン文字が、夢の白色人種が使っている文字だからなのか、それとも文字それ自体の外観が美しいからなのかはよく分らない。おそらくは両方なのだろう。

ラテン文字の特色はと言うと、閉曲線が多いこと、左右または上下対称の文字が多いこと、i と j を除くとすべての文字がひとつながりの線でできており、中には一筆書きができるものもあること、の 3 つが挙げられるだろう。位相幾何学という数学を使うと、ラテン文字は**ベッチ数**という数字が 0 のものが多く、また連続した線で出来た文字や記号が、一筆書き出きるための条件は、その交点数が奇数であればよいことも分っている。

ラテン文字に対して、日本語の仮名はベッチ数が 1 のものが多く、かつ非連続的な線で出来ているものが多い。また漢字は角ばった字が多く、ある程度の対称性もあり、字画数が多くて複雑なので外国人から見ても、まあまあ美しく見える文字が多いと言えるだろう。ただ如何せん字画数が多く、かつ非連続的な線ゆえ書きにくいことは否定できない。

ついでに云うとサッカーの球は、球面上に 25 個の正五角形と 26 個の正六角形が、きれいに貼合わされて表面をおおい尽している。これは誰が最初に考え出したのかは知らないが、球面をどんな正多角形をいくつ使うと覆(おお)えるかという問題なども、位相幾何学を使うと出てくる。しかしサッカー球の場合は、おそらくはどこかの皮職人が、その職業上のカンで作り出したものと思う。同じようなことは天気予報についても言え、大学出の気象予報屋が出す予報よりも、ペンキ職人とか農業や漁業に 20 年以上勤めている人々が、職業上のカンで出す予報の方が当た

る場合が多いのと似ている。

とするなら黄人基本語の文字も物作りの上手な（というか上手だった）日本人の職人の誰かが、思いつきで 120 個の文字を作ってくれればよいことになる。120 個というのは基本語も西洋語と同じような表音文字（以後はこれを**表現文字**と呼ぶ）だけで作られる言語とし、大文字と小文字、活字体と筆記体の 4 種で、各々をラテン文字より少々多い 30 種とするからである。これら 30×4＝120 文字だけで物理や工学、化学や数学などの記号もすべてまかなえるようにすることが必要であり、また当然の如く、外観も美しい 120 文字であることが不可欠な条件である。

ラテン文字 104 字（＝26×4）を使って西洋白人は見事に自然科学を記号化したが、人文科学はいまだに十分には記号化されてはいない。形式論理学という学問は言語構造などをかなり精密に記号化することに成功してはいるが、人文科学の分野全部とはほど遠い状態である。我が共通語では近い将来、人文科学も自然科学と同程度に記号化できることを前提にしているので、文字数もラテン文字より少々増やして 120 としたのである。

自然科学は質点、帯電体、素粒子などのいわゆる有質量物と、波動や電荷などの有エネルギー物を対象とし、座標変換などを使い見事に記号化して自然現象を分析している。これと同じように人文科学は悩み、解放、生、死、存在などの無質量物を対象とし、これらをも記号化して精密化するのである。例えば現存在に疎外を加え、希望と絶望を変数として微分したものを、実存という境界条件で積分すると個々人の人生が数式として出てくる、といった具合である。

ただこの方程式の厳密解はこの世では出てこないが、級数展開による近似解は出てくるとなれば、人文科学も大変な進歩になる。こうなれば 20 世紀までに色々な人々、例えばカントやヘーゲル、ニーチェやハイデッガー、サルトルやベルグソンなどが書き残した難解な書物もその内容が見事に記号化され、西暦（又は星暦）3000 年位の東洋系黄人からすれば、昔の西洋白人はこんな程度のことで人生を悩んでいたのだねと、一笑に付されるようになるだろう。**夢の白色人種の時代**は終り、**黄金の黄色人種の時代**が共通語の導入により来(きた)るということである!! ワァー!

次にラテン文字の特徴に移ろう。その特徴は各文字の名称である**文字名**と、各文字が表す音である**音名**が決っている表音文字であるという点である。そして文字名の方はどういう訳か、英語や仏語、独語などで微妙に違っており、かつまた音名の方は各言語の中で大きく異なっている点が特長と言える。文字名は英語では「エイ、ビー、スィー、・・・、ｾﾞｯﾄﾞ（米語ではズィー）」と読まれるが、仏語では「アー、ベー、セー、・・・、ゼッド」と読まれるし、音名にいたっては、例えば英語の a は [æ], [e], [ɑ:], [ɔ:], [ɔ], [ei], [ə]などの音名がある!

また日本語にローマ字表記があるように、中国語やその他の言語でもローマ字表記があり、それぞれ文字名も音名も違っているので注意がいる。例えば中国語のローマ字表記では b や g は濁音のブやグではなく、無気音のプやクを表していることは前にも書いた。更に加えて、世界の言語の音を表すために作られた国際音声字母（IPA）も、その大部分がラテン文字を使って表されている。本当に便利でかつよく出来た文字である、ラ

テン文字は。

夢の白色人種だからラテン文字が作れたのか、またはラテン文字があったから夢の白色人種になれたのかはよく分らない。しかし皮肉なことに何事に於ても、よく出来たものはその出来の良さのゆえに、ある部分から先のこととか、またはある部分以外のことは全く表現できないことが多いものである。西洋白人は自然科学の分野では素晴しい成果をあげて下さったが、それ以外の分野はほったらかしにしてしまった、と言えないこともない。

これに対して有色人種の発明した各種の文字は、それぞれ不可思議な特色を持っている。例えば日本人なら殆ど誰でも知っていることだけれども、漢字こと漢文字はそれぞれが音のみならず意味も持っている。こんなことでも、外国人で日本語や中国語を知らない人からすれば、「文字に意味があるなんて、どんな言語なの」と驚嘆の一言であろう。しかも例えば「木」は tree を表すがこれを 2 つ書くと「林」になるし、3 つ書くと「森」になるといった具合に、簡単な字を組合わせると、より複雑な意味を持つ字になるという特色がある。同じようなことはアラビア文字、ナーガリ文字、ハングル文字などにも言える。

アラビア文字の特長はその 28 文字すべてが子音を表すだけで、母音はこれらの文字の上に ´、° 、⌒、などを付けて表す。こうして出来上がった文字に、今度は下の方に二重点や三重点を付けて、最終的にひとつの文字が完成するという按配(あんばい)である。実際にここで書くと分りやすいが、私の電算機を打つ技術が未熟なせいか、アラビア文字が入力できないのが残念である。日本語で例をあげると、「は」に二重点や丸点を付けると、「ば」

や「ぱ」という濁音や半濁音になるのと似ている。

要するにアラビア文字では文字自体に、子音と母音という音の区別が表現されている文字と言える。こうした表音文字を前にも書いたように、本書では**表現文字**と呼ぶことにしている。朝鮮語を表すハングル文字は母音を表す 21 の字（ト、Γ、Ц など）と、子音を表す 6 つの字（」「、「、など）を組合せて作られる文字のことである（ここでも、うまく入力できないのが無念)。サンスクリット語やヒンズー語などで使われているナーガリ文字も、「子音＋a」を表す字をまず書き、その回りに a, i, u などの母音を表す記号を付けて文字として完成させるという特色がある。

その他の東洋系の文字にも、上記のような法則が文字それ自体に内包されているという特長がある。しかしこのことが逆に、自然科学の発展を妨げたのかも知れないのは皮肉なことと言える。こうした中で我が国の平仮名と片仮名だけはラテン文字と同じく、単に音だけを表す文字として作られているのは、日本人が工学や理学に優秀な成績を持てる理由のひとつかも知れない。

話は少々脱線するが先ごろ日本が打上げていた探査機が、火星と木星の間にある小惑星群(asteroids)のひとつに着陸し、しかも無事に地球に帰ってくるという出来事があった。それ自体は大変に立派だが、1300 個位ある小惑星の一つに探査機がぶつかった結果、振動が生じその振動が更に大きな振動を呼び、小惑星同志が衝突をはじめたらどうなるだろう？　そしてその破片が地球に向って飛んでくるようにでもなったら、大変なことになる。直径 5km 位の岩石が秒速 5km 位で地球に衝突すれば、

バズーカ砲の銃弾が人間の体に突き刺さったと同じようなものゆえ、地球上の生命はほぼ全滅するだろう。

東大とか科学技術庁などの国立の施設を愛する人々は、自らを最高人物と思っている者が多過ぎることは前にも書いたが、「どうだい!　東大!」などと言って自慢しているうちに、「蟻の一穴」となって地球が全滅しないことを祈るだけである。更に言えば、太陽系は数学で云う**可微分多様体**(differentiable manifold)である。可微分多様体の特長は、どこに行っても、どこから見ても景色は同じというものである。それゆえ太陽系内を何十億 km 飛んで行っても、あたかも釈尊の手のひらから、逃れられない孫悟空のようなものだから、何十億円もの税金を使ってまでやるような実験ではないと私は思う。

話を言語のことに戻して、電算機やロケット工学などの最先端技術と呼ばれる分野での用語は、その 8 割方が英単語である。このことは日本語に限らず世界の言語の多くがそうなっているようだ。英語のように最も適当で最も曖昧な構造をもった言語が、最も役に立っているという事実は、我が共通語の構成にあたっても考慮すべきことだろう。

具体的に上記のことを敷衍(ふえん)すれば、1 つの単語があるならそれを大切にし、似かよった概念はすべてその単語に任せてしまうのが良い。要するに「ほったらかしが最良の原則」を取るということである。例えば「インタネット」は「相互網」、「マウスでクリックする」は「ネズミでカチする」、「ウエブサイト」は「巣用地」などと言えばそれでよい。現に英語はそうなっている。あまりに各単語を可愛がり過ぎないようにすることが重要ということだ。Radio という語でもラジオのみならず、放射

線や無線をも英語では含めてしまっている。

簡単に言えば西洋人とりわけ英米人にとっては「一を聞けば十を知る」ということが、すでに言語の中に含まれてしまって理解されていると言えるだろう。もうひとつ例をあげれば、「美しいバラには棘(とげ)がある」という言葉は、英語では単に“Roses have thorns”であり「美しい」は入っていない。つまり「美しい」は言わなくても、美しいものには何か隠された汚いものがあるという意味が含まれていることが、見事に表現されている。

このことは哲学書などにも見られ、観念論などのド難しい書籍でも、原文で読むと各単語は日常使われている普通の語が殆どだから、読むだけはスラスラと読める。特にフランス語はそうである。ところがこれを日本語に訳すと、哲学用語のド難しいものの羅列となってしまうから、面白いものである。こう考えてくると、我が共通語も西洋語にならって、単語数はグッと減らすのが良いだろう。

しかも人工言語だから、その利点をいかせば 6 万語もあれば、人類が現在知りえている概念や知識、および将来知りうるそれらを十二分に表現できるだろう。つまり無駄な類義語や同義語を失くし、無駄な慣用句も失くし、全く無駄である外来語の類を失くせば 6 万語で足りるだろう。そしてこの言語を使う普通の人々は、そのうちの半分の 3 万語位を知っていれば十分となる言語が良い。

ところで日本語の五十音図は前にも書いた通り、仮名文字を一定の順序で並べた配列のことであるが、これは古代インド語と同じような配列が使われている。すなわち母音は最も緊張の少ない「あ」が最初で、「い」、「う」と続く、子音も母音と同様

に音の特性を決める発音上の舌の位置（**調音点**という）が、口の奥から前へという順で並んでいる。よくぞこんな細かいことを、今から 2500 年位も前のインド人は気づいていたものだと感心する。

同様のことはチベット仏教や、日本の真言宗などで使われる**曼荼羅**(まんだら)についても言える。あそこに描かれた絵や文字らしきものは、それぞれそれなりに深い意味をもって描かれているようだ。真言宗でいう**真言**または**陀羅尼**(だらに)と呼ばれる言葉は、梵(ぼん)字[＝悉曇(しったん)文字]と云われるインド系文字で書かれ、アーとかウーといった音を表している。そしてこれらを口にすれば、宇宙の真理や時空間の全てが分るそうだ。何かマンガみたいやな、などと一笑に付すことなく、やはりそこには何かが隠されている可能性があるので大切にしたいものだ。ただ真言宗それ自体は、本当に釈尊こと釈迦牟尼仏(しゃかむにぶつ)の直説(じきせつ)なのかは多少の疑問は感じられる。

以上からして我が共通語の 120 文字も外観は美しく、しかも文字自体に何らかの機能を含めた表現文字とするのが良いだろう。この世の自然現象は西洋白人の言語を使えば十分であり、おそらくは 22 世紀頃までにはほぼ全てが解明できるだろうが、この世の心的現象やあの世のことはもはや白人言語では無理ゆえ、東洋系文字の良さをも加味した文字により解明するとよいだろう。ここで本来なら 120 文字の樋口私案を試案として書いておくべきだろう。しかし何せ Windows という機械は西洋人の作ったものゆえ、とても入力できないので止めておく.....。

ただ大体の目安として、以下のように言える。ラテン文字はおそらくは、ユークリッド幾何でいう各種の図形とりわけ 3 次

元空間内の立体を、2 次元平面に投影したときに現れる模様から作ったものと思われる。そこで共通語の文字は 4 次元から 6 次元空間内にある、**3 次元閉多様体**を 3 次元空間に射影し、更にそれを 2 次元平面に投影した図形のうち、美しくかつ書きやすいものを選んで作ればよい。

さてここまでで、我が共通語の音と文字の外郭は出来上ったので、最後に文法について考えよう。とにかく人工言語なのだから、できる限り簡単なのがよい。とすれば中間語か孤立語のどちらかがよいだろう。中間語の代表といえる英語の文法は簡単な点は魅力だが、英語はやはり白人諸国の共通語ということにして、我が共通語の文法は孤立語のそれを採用しよう!! ただ孤立語といっても中国語は、何といっても漢字という大変複雑怪奇な文字体系があるので、採用できない。とすればタイ語かベトナム語などをもとにしたものがいい。

ところで言語学者の一部とくにフランス人の一部には、屈曲語は語形変化をもつが、これをもたない言語をもつ民族は、文明の進んでいない民族が多いなどと平気で言う者がいる。まあこういう人々は、自らの知能が低いことを知らない人々だから、むしろ庇(かば)ってあげる気持ちでいればよい。従って我が共通語は、孤立語の文法を採用する。

加えて日本語と英語はともに島国の国民の言語なので、この点で共通点が少しだけある。それは外国人と内国人とを、言葉の使い方で判断できる仕組があるという点である。英語では助動詞の使い方や、前置詞や冠詞の使い方がそれで、母国語として英語を習得した人ならまず間違えないが、外国語として英語を習得した人は往々にして間違えるようなものが少なからずあ

る。日本語では敬語という言葉の使い方や、先物(もの)と現物(ぶつ)などの漢字の読み方にそれが見出される。共通語ではこうしたことはなくして、誰もが簡単かつ素早く完璧に習得できるような文法体系が不可欠だ。

孤立語として共通語を作るとして、どのようになるかを現在の日本語を孤立語に変えて、簡単かつ具体的に作ってみよう。まず品詞というものがあるのか否かについては、孤立語としての品詞はある。つまり文章の中の位置によって形容詞になったり、動詞や名詞になったりするという訳である。この点は英語でも同じであり、例えば take という語は動詞にも名詞にも使われ、このような多品詞語は英語には沢山ある。

そして品詞の種類としては、やはり 8 種がよいだろう。但し、前置詞は**後置詞**(postposition)と呼び、連辞や助辞の役目をも持った品詞とする。そしてもちろんのこと、すべての品詞は一切合切変化することなく、「天上天下、唯我独尊」(In heaven and on earth, I alone am honored.)として歴然と文の中に居座っている言語である。「私愛する彼。私愛する過去彼。彼愛する未来私」などの形で文が作られることになる。また「当時彼女やさしい」と言えば、「当時」という句があることで、この文章自体は過去を表していることになる。

尚、**連辞**(copula)とは、be や seem などのような文の主部と述部とをつなぐ語をいう。また**造語法**(word formation)すなわち単語の構成については、①品詞語尾による方法、②接辞（接頭辞と接尾辞）を付ける方法、③単語同志を組合せる方法、という 3 つが考えられる。孤立語かつ表現文字の使用という共通語の性格からは③が主で、①と②は従となるだろう。

以上でもって黄金の黄色人種の使う、夢の言語としての共通語は大完成となった!!　かって孫文（1866－1925）という中国人が日本で講演を行い、「日本は欧米の覇道文化の手先の犬になるか、アジアの王道文化を守る干城（かんじょう）となるか、十分に慎重に考えて下さい」と演説したという。欧米人はスペイン人やフランス人、ドイツ人などの一部を除けば、それほどはワルではないと私は思うが、それでも明治以降の大部分の日本人のように「黄色い白人ジャップちゃん」であり続けるより、「黄色い黄人、日本民族」であることに自信と誇りを持った方がよっぽどいい。この意味では孫文さんの演説は素晴しい。

白人の国に行き、白人と競争をし、少しでも白人に勝つと大喜びしているのは惨めなことである。例えばアメリカ大リーグに出稼ぎに出かけ、200 本安打を 10 年連続して打つと、狂喜乱舞して喜び「黄色人種でもこんなにできるぞ!」とバカな報道人達は報道しているが、それでは黄人は白人に対する劣等人種であることを認めているようなものではないか?　しかもテレビで見ていると、大リーグの球場の多くは観客が試合中のボールをグラブで取ってしまうことができる程度の貧弱な球場であり、日本でなら草野球の球場と変らない。そんな所で試合をしている人々を、むしろ憐れんであげるくらいの気持ちがよいだろう。嗚呼、可哀想!　黄色人種であることと、劣等人種であることとは同義語ではないのだから、自らを卑下する必要はないのである!!

加えて「よその家」に行ったのなら少しは遠慮するのが、人間としての心である。日本に来ている野球選手の中でも、例え

ば日本の年間ホームラン記録を塗り替えようと思えばできる選手はいるだろうが、「よその家」だからと思って遠慮していることと思う。英語の「エ」の字も喋れない黄人が、必死になってアメリカの記録を塗り替えようとするのは、やはり人間としての心を疑われても仕方あるまい。

野球以外の運動競技は、昔から日本人も白人らと対等に競技をしていたのに、野球はようやく 21 世紀に入って日本人も大リーグに就職できるようになったのは不思議とも云える。その最大の原因は、あのドダワケ朝日新聞が野球業界を牛耳ってしまっていたことと言える。奴らが高校生の健全な育成とか何とかとこいて、野球選手の自由を束縛し、更には日教組や東大出の公務員の天下りをコミッショナーとやらにして、自分達のアブク銭稼ぎの手段としてきたことである。

なぜ野球業界の委員とか、大相撲の理事には検察庁とか最高裁の天下りが就職していることが多いのだろう？　その理由はヤクザ組織による八百長に対する、にらみを利かせている積りのようだ。しかし大相撲には理事ぐるみでやる八百長のみならず、親方同士でやる八百長、力士同士でやる八百長の 3 種が大まかに言ってあるようだ。力士同士でやる八百長は時々は取締っているようだが、その他は全くお咎めなしである。

職業野球も同じで特定の球団が審判員を取込み、「ここぞという 1 球」を自分達に有利に判定させるという手口で、自軍を優勝に導いている球団もあるようだ。こうだから例えば中日軍のように、1954（昭和 29）年いらい完全優勝（リーグ優勝＋シリーズ優勝）が、60 年以上に亘って一度もないという球団も出てきてしまう。12 球団しかないのだから八百長がなければ、12

年に 1 度は完全優勝も出きるはずである。東大出のボンボン達が業界を牛耳っているとしか言いようがない。

その東大自体もかなり裏口入学という、八百長があるようだ。ここは毎年 3000 人位が合格しているようだが、そのうちの 1 割くらいはイカサマ入学であろう。東京生れの東京育ちの者達の枠、何でもイカサマをしたがる九州人達の枠、そして国会議員とかその他の特殊な者を後ろ盾にした者達の枠、これら 3 種で 300 人位が毎年見事に八百長入学していると思われる。東京医科大学とやらでも、男と女で合格点に差をつけていたというし、旧司法試験でも東大出や京大出の受験生と、その他の者との合格点ではかなりの差がつけられていたようだ。

話を大リーグに戻そう。アメリカ人は伝統的に奴隷売買の好きな国民ゆえ、運動選手なども奴隷のように競売にかけて、落札価格を決めている。日本人選手が 30 億円で入団しました、などと報道機関の一部は時々報道しているが、あれは球団同士の売買契約の入札価格で、選手自体は 3000 万円ももらっていないこともあるようだ。今はやりの派遣社員と同じで、給料 30 万円と言っても、派遣会社［＝イカサマ会社］と派遣先会社［＝実際の雇用先］の両方からピンハネされ、手取りは 10 万円ほどにしかならないのと似ている。

しかもアメリカは黒人・栗人・黄人・茶人・白人の 5 色の人種が入り混じった国ゆえ、黄人である日本人も何ら特別扱いされるものでもない。「東洋系の黄色人種が国では稼げないから、アメリカへ出稼ぎに来たな」と言う程度にしか、普通のアメリカ人は見ていないだろう。報道関係者は時々、永田町と庶民の

倫理は違うという言い方で、政治家などの非常識さとか横暴さなどを表現するが、これと同じ論理で報道陣と庶民の論理は違うと言えるだろう。報道関係者の大部分は 4 年制大学を出ており、彼らの書く作文は必ずしも一般庶民の姿とは一致していないことが多い。白人社会に住む有色人種はみんな部落や村を作って、自分達だけの部分社会を作って暮らしているゆえ、日本人もその中のいち有色人種すぎないのである。

かって真田左衛門佐(さえもんのすけ)幸村こと真田幸村は、「大坂の陣」をまえに「平和は悪であり、時々戦争という塩で揉んでやらないと、人は腐ってしまう」と言い、徳川方に戦争を挑み敗れて死んだ。こうした戦(いくさ)上手の戦争好きはどこにも、いつの世にもいるし、その言っていることはある程度の真実が含まれているので厄介である。しかし戦争は悪い奴を生かし、真面目に生きている人々に悲劇を与えるものゆえ、できる限りやめた方がいい。

それにも拘らず相変らず拡大再生産を行い、人間の数や生産量さえ大きければ大国と考える人々が多過ぎること、そして黄色人種であることを認めようとせず、白人のつもりでいながらそのくせ白人をメッチャ高く評価する人々の多過ぎることは、まことに遺憾である。日本の**人口は 8800 万人位**に減らし、**縮小再生産へと政策を転換**した方がよほど美しい国になることだろうに。嗚呼、情けない!

明治以後の日本人とりわけ昭和初期の日本人も、全く今の日本人と変りなく、白人のつもりになってアジア侵略に向ったが、結局はその白人様たちに叱られて惨めな思いをしたものだった。もうこの過ちは繰返さないようにしよう。現にアメリカでも、

人口 3 億人の 6 割方は有色人種ないしは有色人種との混血であり、大統領自身も今や黒人と白人の混血になっている。あの中村修二先生のような、黄色いアメリカ人（Yellow American）も相当数いるようだ。夢の白色人種の時代も徐々にではあるが、終りつつあるようにも見える。

しかし他方、まえがきにも書いたように、ヨーロッパでは徐々にではあるが統合が進んでいる。このままいくと「ヨーロッパ合衆国」のようなものができる可能性もある。そうなると再び彼らによる世界侵略が始るかも知れない。それを防ぐためには**黄金の黄色人種**である日本人が率先して、世界の平和と秩序を維持できることを示す必要がある。そのためにも「東洋系黄人の共通語」の創設は、大変に有意義なものとなるに違いない。

厭離穢土（おんりえど）、欣求浄土（ごんぐ）、So be it！

あとがき

ページが余ったので、あとがきを加えることにした。本は大きな用紙を切って作るので、ページ数が 16 の倍数とか 64 の倍数といった数字で終ると、用紙の無駄が少いといわれる。無駄の嫌いな私としては、白紙のページを残す位なら「もったいない」ので、少し余談を追加しておくことにした（**注**：この部分は電子書籍では不要となってしまったが、せっかく書いたので残しておくことにした）。

お盆というと、昔の暦つまり太陰暦では 7 月 15 日だが、今の暦では 8 月 13 日とされている。また元禄 15 年 12 月 14 日は、今の暦では 1703 年 1 月 30 日とされている。つまり旧暦では 5 年に 2 度のうるう年を入れ、新暦では 4 年に 1 度のうるう年を入れて、暦と季節のずれを調節している。しかも旧暦のうるう年は 1 年が 13 ヵ月のうるう月であった。

うるう年は漢字では**閏年**と書き、暦が 1 日またはひと月だけ多い、つまり潤沢（じゅんたく）な年という意味なのだろう。仏語ではうるう年は l'année bissextile といい、その意味は 6 を 2 で分ける年ということだ。6 を 2 で割ると 3 ゆえ、3 年と 3 年の間にある年がうるう年というわけだ。英語ではうるう年は leap year といい、飛越す年という意味だ。では何を飛越すかというと、まず考えられるのは 3 年という年月を飛越すのが閏年というわけだ。

次に考えられるのは、曜日を飛越すということだろう。つまり平年では 1 月 1 日が日曜日で始れば、12 月 31 日も日曜日で終るが、閏年は 1 日多いので日曜日で始れば月曜日で終ること

になる。その結果、翌年は火曜日で始り火曜日で終ることになる。つまり月曜日で始る年が飛越されてしまったわけである。いずれが正しいかは分らないが、後者とすれば、leap year はなかなか面白いことに気づいた名称といえる。暦についてはこの他にも面白いことが沢山あるが、ここらで終りとしたい。

さて元禄 15 年 12 月 14 日は何の日だったかというと、赤穂の浪人が吉良家に押入り、住居侵入殺人罪を実行してしまったとされる日である。竹田出雲らの書いた「仮名手本忠臣蔵」という戯曲などにより、忠臣蔵として有名なので日本人の 8 割方は、この話を知っていると思う。私も知っている。というか私の家のご先祖様は、浅野家の家臣であった。

樋口という名字は一般的に言って、大名家の家臣の家柄の人に多いようだ。5000 円札の樋口一葉さんも、おそらくは甲斐の武田家あたりの家臣であったようだし、直江兼続という武将も、生れは樋口兼豊の子で上杉謙信らに可愛がられて、直江という名字と領地を与えられたとされている。調べてみると、結構こういう人が樋口の名字にはいる。

忠臣蔵では吉良上野介義央（こうずけのすけよしなか）は悪者、浅野内匠頭長矩（たくみのかみながのり）は犠牲者、大石内蔵助良雄（くらのすけよしかつ）は主君の仇を討った英雄とされるが本当だろうか。まず吉良も浅野も共に江戸生れの江戸育ちで、領地へは毎年秋の収穫期に年貢を取りに帰る程度であったらしい。吉良さんという人は、言わなくてもいいことを二言、三言いってしまう性格だったが、浅野の殿様も気分屋で、些細なことにもすぐにムカつく自分勝手な人であったそうだ。それゆえ吉良さんも、殺される日になってもまだ、依然として自分の何が浅野を怒らせたのか、分らないまま死んでいったようだ。

加えて殺人罪を実行してしまった内蔵助もかなりのワル家老であった。主君切腹後も、浅野家の金を横領して、京都の遊廓などで遊びまくっていた。これは表向きは幕府の目をごまかすためと言いながら、実は相当の好き者であったらしい。現に討入の前夜ですら15才位の少女を2，3人連込んで、つながっていたと言われている。

結局のところ、内蔵助はやりまくりすぎて梅毒と淋病の合併症となり、このまま生き続けることができなくなった。しかもあちこちのサラ金からも大量の借金をしてしまったのでなおさら生きられない。そこで借金を取立てに来る殺し屋まがいの連中をつれて吉良家に押入り、吉良を殺して金銭を奪いそれで借金の返済に充てたというのが、あの討入事件の真相である。

浅野家の家臣の大半は、もはや仇討などの時代遅れのことは止めようという意見であったし、我がご先祖様ももちろん討入には参加していない。それどころかお家断絶となった後は、残された家臣や領民の人々の再就職先を探しまわり、最終的には現在の岐阜市にある加納藩に集団就職させてもらった。そして江戸時代はずっと加納藩のもとで浅野家の家臣の一部は暮していた。浅野家は元々は岐阜の土岐氏の支族ゆえ、岐阜に住むこともそれほど抵抗もなかったといえる。

そして江戸時代が終り明治維新が来ると、浅野家の人々も自由の身となり、居住移転の自由も認められ岐阜に別れを告げて多くの子孫がまた赤穂の地に帰って行った。その結果、岐阜に残されていた浅野家の家臣のお墓などは、そのままほったらかしになり、今ではここに浅野家の人々のお墓があったということすら、殆どの人は知らない状態である。考えてもみれば明治

維新からでも、すでに 140 年以上も経っているのだから当り前かも知れない。

これに対して吉良家のお墓は、現在でも愛知県の吉良町に立派なものが残されている。愛知県内を走っている名古屋鉄道の駅のひとつに上横須賀という駅がある。そこで降りて 2km くらい北に歩くと**華蔵寺**という寺があり、そこに吉良家代々のお墓がある。しかも駅からお寺までの道は、両側に歩道の付いた散歩道として整備され、所々に吉良さんの銅像なども立てられ、ちょっとした観光地のようになっている。これを見てみると、少くとも吉良さんは領民の人々や、家臣には好かれていた殿様だったのだなと推測される。ついでに言えば浅野の殿様と、討入事件の実行犯達の墓は、今でも東京の芝泉岳寺にあるようだが、私は一度も行ったことはないし、今後もおそらくは行くことはない。

現在でも殺人事件とか悪質な重大事件が起きると、報道陣とか知識人と呼ばれる無責任人の多くは、犯人を英雄扱いすることが多い。この犯人は子供の頃から虐待を受けて育ち、会社も派遣切りに会い、家に帰っても誰もいない寂しさの中で、衝動的に行ってしまった犯罪ゆえ、死刑にはすべきではありません、と言った具合である。その反面で、被害者の恐怖や無念さ、親族の悲しみや苦しみはほったらかしである。

そこでこうした無責任な死刑廃止論者達にも少しは責任を持たせるため、「自分を殺した人をも、死刑にしないで下さい」という意思表示を出させ、氏名・住所・電話番号などをインターネットなどに公表すると良い。そうすればむかついた人は、その一覧表の中から好きな人を選んで殺してくれば良い。その場

合には殺人罪は成立しても、刑罰はせいぜい器物損壊罪の範囲で済むゆえ、裁判も簡単に済む。本人さんが生前にそれでよいと言っていたのだから、自分の言動には責任を持ってもらわなければなるまい。

逆にこの一覧表に載っていない人が殺された場合には、その親族が望めば、犯人を死刑にすべきである。けだし国民が主権者であり、裁判官らの公務員はすべて国民への奉仕者だからである（憲法前文及び第 15 条）。こうすれば裁判官による量刑の不釣合いの問題も解決できるし、裁判員制度などを導入して、税金を無駄遣いし、主権者たる国民に義務を課するなどと言った、おこがましいことも止めさせることが出きる。

更に殺意などの故意についても、その存在を検察側が立証する必要はなく、故意がなかったと主張する弁護側に立証させるのが良いだろう。こうすれば例えば、小学生が道路の端を歩いて登校しているところに、車で突っ込み小学生を何人も殺したような事件でも、未必の故意による殺人罪として死刑に出きる。そのためには過失犯と重過失犯は分離し、前者は過失行為と名を呼び換え刑法以外の法典に移し、重過失犯は刑法に残し、刑罰も死刑が選択できるようにすると良い。

ただ同じく道路の端を歩いている者達でも精神病患者らが、群れを成して「あーうー、あーうー」と吠えながら歩いているところへ、車で突っ込み殺す行為は、「よくやったぞ」と言いたくもなるので、その線引きが難しいこととなる。後者の場合には期待可能性がないことを理由に責任故意が阻却され、単なる過失行為として評価すべであろうか？

そうは言っても精神障碍者の中にも、自分の世界だけに入り込

んでしまい、大人しく暮している可哀想な人もいるので、こんなことはあまり言いたくはない。しかしそれにしても小学生らの列に突っ込む奴はいても、気違い達の列に突っ込む奴は殆どいないのは遺憾なことである。

さて話が少々横道にそれてしまったが、元に戻して終りとしたい。吉良さんや吉良家の人々は大変な苦しみと悲しみをうけたであろうが、残された浅野家の人々の中にも、吉良家の家臣より逆仇討を受けて死んでいった人々も相当数いたと云う。こうした悲劇はもう失くしたい。そのためには赤穂浪士の話も**「阿呆同志の話」**とまではいわないが、犯罪者を英雄扱いしたり殺人を美化するようなことは、もういい加減にやめにしたらどうだろうか。そう願いながら、関係者の皆様のご冥福を祈りつつ終りとします。

索引（Index）

[ア行]

up to と be up to.....97,110
天の川、銀河、銀河系.....131
韻母・声母・音名.....174,183
yea,yah,yeah,uh-huh,unh-unh.....15,13
音韻(phoneme)、音素(allophone)、など.....23

[カ行]

頭文字(かしらもじ)・頭字語(とうじご)・頭字飾(とうじかざり).....49,154
頑張れと頑張ってね.....103
清元(きよもと)と瞽女(ごぜ).....138
頸静脈と頸動脈.....52
国際音声字母(IPA).....183
骨髄、脊髄、脊椎、脊柱、頭蓋、骨の種類.....129

[サ行]

助辞、接尾辞、連辞.....29,172,190
姓と名の雑学.....36,37
人口は 8800 万人が良い.....194

[タ行]

天皇は固有名詞か普通名詞か.....37
ツラはきれいでも心はウンコ.....170
特別定型動詞・変則動詞・法補助詞.....86

[ナ行]

永田町の論理と報道陣の倫理.....194
人間としての心.....17
ネアカとネクラ.....72

[ハ行]

表意・表音・表現文字.....182,185
品詞の数とその残存率.....28
不変化詞と例外品詞.....97,89
文節・連文節・分ち書き.....56
母音の無声化と無声母音.....24,180

[マ行]

無気音と有気音、無声音と有声音.....30,174
make up と make it (to).....112
Mc と rhythm には母音字はないが母音はある.....35

［ヤ行・ラ行］

八百長相撲・野球・東大入試.....192,193
ラテン文字とローマ字表記.....158,159
連接発声の例.....44,45

[ワ・ヲ・ン]

笑い方の種類、笑う門には悪魔.....14
悪い奴と人道支援.....18

■著者紹介：

樋口克己（ひぐちかつき）

1970 年　都立航空工業短大卒業(現在は存在せず)

1973 年　パリ大学理学部中退

1977 年　日揮(株)に入社し、北アフリカの天然ガス処理工場で働く。 帰国後は著作や翻訳に従事。

尚、己巳巳（きいみ）と読むので、克己と克巳は違う字です。

共通語を求めて

2018(平成 30)年 11 月 11 日発行

著者　　樋口克己

発行者　　樋口克己

発行所　　壱葉舎

巣用地　　http://www.ichiyocorp.site

電子郵便　ichiyocorp@gmail.com

Copyright © 2018 Katsuki Higuchi

Edited in Japan

本書の一部または全部の無断複写、無断使用等は一定の例外を除き、禁じられています。